

---

# 福袋買いませんか？

くうーたんたん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

福袋買いませんか？

### 【Nコード】

N0326G

### 【作者名】

くうーたんたん

### 【あらすじ】

高校受験をひかえた正吾は塾の帰り道、不思議な露店商で福袋を買った。その中身は？学園ラブコメデー

**弁ちゃん登場！（前書き）**

たくさんの支持を頂いたこの作品は只今、アルファポリスドリームブッククラブにて先行予約しております。携帯の人気投票1500ポイントで全国出版となります。ご協力おねがいます。http://www.alphapolis.co.jp/dream.php?ebook\_id=1042391  
こちらから投票できます。

## 弁ちゃん登場！

うう寒い！コンビニのおでんでも買って帰るか…

塾帰りの正吾は冷たい手をポケットに突っ込み、今月分の小遣いの残りを数え出した。触った小銭は4つだけだ。

どれどれいくらかなあ。なあんだ350円か。

「これじゃあ大したネタは買えないじゃんか」

正吾が鼻をすすりながら小銭をポケットにしまおうとすると、

「お兄ちゃん、福袋買わない？」と変なオヤジが声をかけてきた。

一体どこから声がするのかと周りをキョロキョロ見渡すと、薄暗い街灯の下でボロボロのブルーシートを広げた上に幾つかの紙袋が並んでいるのが目に入った。うわあ…変なのに捕まっちゃったなあ。

正吾の嫌そうな顔など気にしないのかオヤジは大きな声で

「ほら、兄ちゃん兄ちゃんこっちおいで！」と遠慮なく声をかけてくるではないか。仕方なく近寄って行くと、その並んでいる紙袋に福袋の文字が入っているのに気がついた。「福袋じゃんか…おじさん、これデパートの売れ残り？」

オヤジは呆れた顔で

「そんな物と一緒にしないでくれ！これはな、真正正銘の福袋なんだ。お前さんには俺が見えるんだろ？だったらこれを買っ資格があるってことだ」正吾は寒さで垂れてくる鼻水をすすりながら

「で？これいくらなの？」と聞いてみた。

「今、お前さんが持つてる全財産だ」

正吾はニツカリ笑った。

「俺、350円しか持つてないんだけど？」「え！？たったそれだけ？今までで一番安い値段だな」

オヤジはがっかりした顔つきだ。

「別にいいんだぜ。他の奴に買ってもらえよ俺、今まで福袋なんて買ったことないしな。要らないもん入ってたって邪魔になるだけだ

し。じゃあね！おじさん」

正吾がそう言った途端

「よし！売った、持ってけ泥棒」とオヤジはヤケクソ気味に叫び声をあげた。

引つ掛かった引つ掛かった！俺って買い物上手じゃん。

「はい、じゃあ350円ね」正吾はオヤジの手に小銭を置いた。

ん？顔に似合わずすべすべのお肌だなあ。

正吾は首を傾げた。

「さあ坊っちゃん！どれにするんだい？」

正吾が紙袋の隙間から中をのぞこうとすると

「ちよつとちよつと！ダメだよあ、福袋ってのは中が何だかわからないから楽しみなんだ。勘でえらびな、勘で！」

チエツちよつとくらい、いいじゃんか…

正吾が迷っていると一番はじの袋が一瞬カサカサと音をたてた。

「なんだこれ？今動いたぞ…」

オヤジは嬉しそうに

「ハハアンきつとあなたに買ってもらいたがっているんだよ。それにするかい？」と言ってきた。

なんだか不気味だなあ。

正吾がその袋を持ち上げると、中からなんともいえない良い薫りがしてきた。

なんだか花畑にいるみたいだ…アゝ幸せな気分になってきたぞ。

「よし！これに決めた」

オヤジは

「まいどありがとうございます！」と満面の笑みで福袋を正吾に渡した。

「あつそうそう忘れるとこだった…これこれ！」赤いポチ袋には大入りの文字が書いてある。中には何も書いていない白い札が一枚入っていた。

「なんだ、ただの紙切れじゃん。金券でも入ってるのかと思ったよ」

オヤジは渋い顔をして

「350円しか払わんという金券なんか期待したらいかんよ。だがなこれはそんなもんよりずっと、ず〜っと価値があるもんなんだ。いいかい…この紙に願いを一つだけ書くん。そうすれば絶対願いはかなう」正吾は

「ハイハイ、そりゃあ凄い！じゃあよく考えないとね」と軽くいなした。

「信じてないな？本当に本当なんだぞ。まあいいさ、そのうちわかるだろ。じゃあな坊主」

正吾は結構大きなその紙袋をぶら下げ、家に帰って行った。「ただいま〜！あ〜腹減った。今日のメシなに〜？」

エプロン姿の母、ユカリがおたまでカレーをよそっていた。

「今日はあんたの大好きなカツカレーだよ。もう出来るから手を洗っておいで」

「んん？正吾、どうしたのその福袋。」

正吾は洗面所から顔を出して答えた。

「ああそれね、屋台で買ったんだ」ユカリは眉を寄せて正吾を睨んだ。

「ま〜た騙されたんじゃないの？この前は眠ってる間に頭がよくなる機械なんて買ってきて、今度は大丈夫なの？」正吾は自信なさそうに

「まあ350円だからさ。あんまり期待はしてないけど寒空の中い歳したオヤジがいくらでもいいから買ってってくれっていうんだぜ。可哀想になっちゃってさ」それを聞いてユカリもさすがに同情したのか

「正吾は優しいからな…ま、しょうがないか」と諦め顔だ。「一体なにが入ってるのかしらね〜。早速開けてみましようよ！」正吾はユカリに急かされながら紙袋を閉じているホチキスの芯をバリバリと外した。

「…なあに？これ。」福袋の中には缶詰めが一つ入っていた。

よくあるみかんの絵が書いてあるアレだ。

「どっからどうみてもみかんの缶詰めだよな、でもまあ俺これ結構好きなんだよね。母ちゃん缶切りくれ！部屋で食うから皿もね」正吾は自分の部屋に入ると、丸い小さなこたつに脚を突っ込んだ。

「しかし、しけた福袋だよなあ。これ一個だけかよ」正吾は福袋の中をもう一度のぞいてみた。

やはり何にも入っていない。

仕方なく正吾は缶切りの歯を缶詰に食い込ませた。

「よし開いたぞ」

ギザギザになったアルミの蓋をこじ開けて逆さまにした。

「あれ？おつかしいな〜！出て来ない」

缶詰の底をポンポン叩くと何かカラフルな色彩がポトツと皿に落ちてきた。

「なんだあ？」

正吾はフォークでそれを転がすと

「うぎゃ！痛いではないか。」なんとそれは着物姿の小さな女の子であった。

「う、うわあ！なんだこれ？人形か！？」皿の上で仁王立ちになっているその小さな女の子に正吾の目は釘付けになった。

「はあ？何言つとるんじゃこの人間は。弁財天、つまりあんたたちの言つところの神様じゃぞ」正吾は開いた口が塞がらないでいると「おまえ！私を選んでなんてラッキーじゃぞ。これからのおまえの人生はまさにエキサイティングじゃ！」ガハハと笑う彼女を横目に正吾は途方にくれていた。

天才トレーナー弁ちゃん！

正吾はつぶやいた。

「弁財天ってなんの神様だっけ？」その小さな女の子はプリプリ怒り出した。

「お前、そんなことも知らんのか！妾はな、音楽の神じゃ。これを見よ」

なにやらウクレレみたいな物を小脇に抱えている。

「うわ〜！ちよつとそれ見せてよ。昔の琵琶ってやつ？」

正吾はそのおもちゃみたいな楽器をつまんでよくみると

「なんだこれ？アコースティックギターじゃん！」

弁天はフッフと笑い

「当たり前じゃ、今はいつたい何世紀じゃとおもつとる」

「スゲーな弁ちゃん、カッコいいよ」

弁天は胸をはって

「当たり前じゃ！」とおおえぱりしている。

「ところで、その弁財天様がなんで俺なんかのここにきたわけ？」

弁天は腕組みして答えた

「お前が神に選ばれた男だからじゃ。そうでなくては天照大神様が見えるわけがないからのう」「えっ！？それって…まさかあの露店のオヤジ？」

弁天は深いため息をつき

「あれは仮のお姿じゃ！どんな姿であろうと慈悲深きお方じゃ、なんせたった350円で妾を売ったのだからな」正吾はクッフと笑い「それでこれからどうするの？」と聞いた。

「正吾、お前を立派な天才にしてやる！それが妾の使命じゃ」

正吾は思い切りのけ反った。

「なんだよそれ〜。俺はなんの取り柄もないよ！運動も嫌いだし、勉強だって下から数えたほうが早いぐらいの成績だしさ。ましてル

ツクスなんか平々凡々でしょ？」弁ちゃんはじつくりと正吾の全身を見回した。

「そうじゃな、背は普通だけど脚が短いのう。顔は…なんでそんなにぽっちゃりしておるのかのう？もう少少こつ…キリツとせんかのう」ブチブチいいながらも最後はきつちり宣言した

「とにかく！何かあるはずじゃ。神をも惹き付ける何かがある。まずはそれを探す事じゃな」正吾は勝手にしるとばかりにコタツに潜りこんだ。

「よし！明日はお前の学校での様子を見よう。そうすればきつと何かわかるはずじゃ」

正吾はその言葉を聞いて跳ね起きた。

「ええっ！？そんなの無理、絶対無理だからね！」

弁天はグフフと笑って

「心配せんでもよい。どうせ他の人間には見えんのだからな…それにしても明日が楽しみじゃ！」  
そう言うと

コタツの中に潜っていった。

## 弁ちゃん学校にゆく!

「起きろ!起きろと言つに」正吾はペチペチほつぺたを叩く弁天を振り払つた。

「うゝん。なんだよ煩い虫だなあ」

「ム、ムシじゃとおゝ!?かくなるうえはいたしかたあるまい、見よ神の力を!」弁天は正吾の耳もとでその小さなアコースティックギターをかき鳴らした。

「ベンベケベケベケベン!キュイイイ〜ン」さすがの正吾も跳ね起きた。

「なんだ!何がおきたんだ?」

キョロキョロする正吾に弁天は訴えた。

「腹が減つたぞ!ちゃんと神にお供え物をせんかい」

まだ寝惚けまなこの正吾はつぶやいた。

「ええつ?神様も飯食つのかよ」

「あたり前じゃ!酒と肴でよい」仕方なく正吾はキッチンから料理用の日本酒とおせちの残りのかまぼこを持ってきた。

「おお!来たか来たか」正吾は喜ぶ弁天の顔をマジマジと見た。

お猪口に吸い付きチュウチュウ音をたててうまそうに呑んでいる。

「か:可愛い!弁ちゃん、普通サイズならアイドルも夢じゃないかも?」

弁天はかまぼこのピンクの部分にかぶりつきながら

「そうじゃ、妾は天界のアイドルじゃぞ。ようわかつたのう」と、しれっとしている。

「はあ〜神様の世界って一体どんなかね?想像つかないや」

弁天はそんな正吾に

「お前もはよう朝げを済ませて来い。学校に遅れるぞ!」と言つとまたかまぼこにかぶりついた。

「弁ちゃん、隠れてたほうがいいんじゃない？」

弁天は正吾の肩に腰掛け、気持ちよさそうに脚をブラブラさせていた。

「どうせ他の人間には見えんのだから気にするな」

「そつちが気にしなくても俺が気になるんだよな……」

弁天は正吾の耳たぶを引つ張り

「何か言ったか？」とにらんでいる。「おはよう町田君、今日は早いのね」

正吾の前の席の佐山チカが話しかけてきた。

「お…おはよう」

正吾が伏し目がちに小声で言うのを見ていた弁天は机の上にどっかり腰をおろし

「もつと大きな声でハキハキと！」とけしかけた。

「あくもうひとり母ちゃんが増えた気分だ」と正吾がつぶやくのに「母ちゃんではない。トレーナーじゃ！トレーナー」と返してきた。こりゃあ面倒なもんしよいこんだかも？

「今日は授業参観じゃ！お前の秘められた才能がなんなのか見極めるぞい」

正吾の心配をよそに弁天はなにやら楽しそうだ。「きりーっ！礼、着席」

今日の日直が号令をかける。「おはようございます。今日から最後の進路相談が始まりますね。今日の予定になっている人は放課後忘れないで残ってね。はい！では朝礼は以上です」朝礼が終わるといつもの奴らが正吾の机をとりかこんだ。

「よう、正吾。今日もシケたツラしてんなあ。ほれ、なにやってんの早く出せよアルバイト料」正吾はズボンのポケットから500円玉を取り出すとそいつらに渡した。

「よゝし！今日は俺らがお前を守る。安心して暮らせ。じゃあな！」弁天はじつとその様子をみて不思議そうな顔をした。

「あれはなんじゃ？なぜあやつらに金を払う。おや、あつちでも金を払ってるやつがおるのお」正吾は小声で

「いわゆるカツアゲってやつだよ。あゝあ今月のこずかいもつないよ」

それを聞いた弁天の髪はみるみるうちに逆立ち、恐ろしい形相に変わった。

「妾は悔しいぞ！なぜ500円なのだ。妾なぞたった350円だというに。もう許さん！」

そついうと弁天は更に小さくなり、正吾の鼻の穴に飛び込んだ。

「うわあ！弁ちゃん何すんの！？」

すると正吾はカクンと意識を失い、顔をあげた時には眼光するどくまるで別人のような表情に変わっていた。

「おい！おまえら、さっきの金かえせ！」

不良達が一斉に振り返った。

「あんだとてめえ、俺たちやお前を守ってやってんだ報酬もらうのがあたりまえだろ！」正吾はガハハと笑って

「おまえらみたいになへなちよこに守ってもらいたくなんかないね！せめて俺に勝つてからそついうんだな！」正吾はブレザーを脱ぎ捨て、不良達にとびかかって行った。

「上等だ！やってやるうじゃん」

数分後、正吾はのびている不良たちの襟首をつかんで、廊下に放り出した。

「バカ者めらが！神に逆らうなど百万年早いわ」正吾はガハハと笑うと、そのままぱったり倒れてしまった。

弁天は慌てて正吾の鼻の穴から這い出した。

「し、しまった。正吾！こりゃしっかりせんかい…あゝどうも妾は短気でいかん。つい禁忌を破って憑依してしまったわい」

正吾が目を覚めたのは保健室のベッドの上だった。

「あれ、俺どうしてここにいるわけ…？もしかして弁ちゃん！？」

正吾の腹の上で弁天が正座してかしまっていた。

「すまん正吾！つい禁忌を破ってしまった」正吾はガバツと布団をはぐと

「もしかして…俺の身体に憑依した？それで一体何やらかしたんだよ？」「いやあくすまん！ついあの不良どもを懲らしめてしまった…ああいう弱いものイジメするやからは神として黙ってみていられなかった」しみじみと語る弁天の様子に正吾もそれ以上責めることはしなかった。「まあ弁ちゃんには神様だからな…仕方ないか。でもさ、こんなに疲れるなんて相当エネルギーがとられちゃうんだな。こんな事たびたびあったら俺早死にしちゃうよ。あんまりやらないでね！」

弁天は目をウルウルさせて

「正吾お前は心が広いのお。しかし強い男ではないな…なににも妾は喧嘩が強いとかそういう事を言ってるんじゃないぞ。負けるとわかってても間違ってると思うなら、立ち向かっていく勇気が欲しぞよ。強い男とは弱者に優しいものじゃ」

正吾はそれを聞くと

「そうだね、俺は弱虫だよ。だけどそんなスーパーヒーロー現代じゃ流行らないんだよな。どうせ誰も守ってなんかくれないぜ？だつたらたら大人しく目立たないでいたほうが利口な生き方だと思わない？」弁天はそれを聞き、一気に瞳が乾燥した。

「こいつ冷めとる…冷めきつとる。こいつの魂に火をつけるのは並大抵ではないのう」

腕組みしてぶつくさつぶやく弁天をよそに

「あゝ良く寝た！」と正吾は大きな欠伸をしながら保健室を出ていった。

## 弁ちゃんの授業参観！

正吾は教室にもどったが、そこには誰も居なかった。

「あつ、移動教室か！今は…もう4時間目？俺ずいぶん寝ちゃったんだな」

「なんの授業じゃ？」

「音楽だよ。あつ弁ちゃんって音楽の神様だったよね？じゃあ楽しいんじゃない？俺はだいつきらいだけど」弁天は渋い顔で正吾を見た。

「お前、音楽キライなのか？」

「うん…俺さ。人前で歌ったり、演奏したりするのが苦手なんだよ。見られてるって思うと全身固まっちゃうんだ」

「ふう〜ん。じゃあ聴くのはどうじゃ？音楽を聴いて楽しい気分にならんか？」

「ああ、それは大好き！CDも沢山もってるぜ」なるほどのう…  
弁天はニンマリ笑った。

「すみません。戻りました」

ガラスと音楽室の扉を開けると、とんでもない光景が広がっていた。

「あら〜。正吾君もういいの？」

正吾はあんぐりと口を開け音楽教師の有明を見た。

肩のあたりから若い侍の顔がギロツとこちらを見ている。

「あ、ああ…せ、先生こそ大丈夫ですか？」有明はニッコリ笑って「何言ってるの！私は見ての通りとっても元気よ。さあ、自分の席についてちょうだい」正吾はクラスメート達に絡みついている沢山の人やら動物やら、はたまた得体のしれない妖怪みたいなものに目を奪われフラフラしながら席に着いた。

一体これはどういうことだ？

この事態に狼狽している正吾に弁天が話しかけた。

「正吾、やっぱり見えちゃってるみたいじゃな」

正吾はコックリうなずいた。

小声で

「後でちゃんと説明してよね！」

と言うと弁天はブンブン首をふった。ハアもう何があっても驚かないや。

正吾は深いため息をついた。

「さあ、テストの続きをしましょう。ああ…町田君は最後にお問い合わせね。じゃあ永瀬君、続きをどうぞ」

ああ、そうだった！今日はアルトリコーダーのテストかあ。あつという間に正吾の番が来た。弁天が期待をこめた眼差しで見つめている。

リコーダーを持ち、立ち上がった。リコーダーを持つ手が小刻みに震えている。「……………」

「どうした正吾！はよう吹かんか」

「……………」

「ほれ！ほれどうした？」

「…ピョロロピリー」

「す、すみません。ちょっと緊張しちゃって」弁天は口をアングリ開けて正吾を見ている。正吾の顔はみるみるうちに真っ赤になり、うつむいてしまった。

見かねた有明が

「正吾君、もういいわよ。まだ体調も戻ってないみたいだし」

「は、はあすみません」正吾は椅子に腰をおろした。

その日の帰り道、正吾は弁天にたずねた。

「ねえ。あれはどういう事？」

「おお、あれのう。あれはじゃな、妾が憑依した後遺症みたいなも

のじゃ」「正吾はキョトンとしている。

「後遺症？それであの見えるものはなに？」

弁天はめんどくさそうに答えた。

「なにつて…みたままじゃが」

「それじゃあ分からないよ。やっぱり霊とか妖怪？」

弁天は頭を掻きながら

「まあそういう事じゃ」

と言うではないか。「心配いらんて。妾がついているからの！」弁

天はドンと正吾の胸を叩いた。

## 弁ちゃん貧乏神と張り合う！

今日は月曜日で、全体朝礼がある。

正吾は7組なので端のほうに並んでいた。

「弁ちゃん、なんでみんなこっち見てるわけ？」

正吾は恐々周りを見渡した。

生徒達、いや先生達もなのだが背後に見える幽霊達がみなこちらを凝視しているのだ。

「そんなの決まっとする！妾が神だからじゃ。みな我らに敬意を払っておる証ぞ」

ウワァ〜あんまり見ないでよう。

「あれ？あそこに弁ちゃんみたいなお小さい子がいる。うわ！すごい美女、なんだか弁ちゃんと違ってはかなげなおーラ感じるなあ」

弁ちゃんはそれを聞いてプリプリ怒っている。「なにを言う！妾は弁財天、福の神じゃ。あやつは貧乏神ぞ？我らの敵ではないか」「ええっ！？あんな美人が貧乏神。イメージと全然ちがうなあ」「あれ？とり憑かれてるのはうちのクラスの篠原かあ…？そっういえばアイツの親、派遣切りで大変だっついてたなあ。「貧乏神ってさ。どうやったら追い払えるの？」」

「本人がアイツを嫌いになればいいことじゃ」

「そんなの嫌いに決まってる！だっつて貧乏神なんだよ？」弁天はかぶりをふり

「それが上手くいかなから大変なのじゃ」

「ほれ、こっちに気付きおったわ」

その美少女はスウツとこちらに近寄ってきた。

「まあ、弁天じゃないの。久しぶりねえ！こちらがあなたのターゲツト？ウフフ可愛らしい方ね」

そっういうとその細い指を正吾の肩にふんわりと乗せた。

「ねえ、あなた。私のターゲツト篠原君は今とても可哀想な状態な

のよ。優しいあなたならきつと手を差しのべてくれるはず。お願いよ、そのポケットに入っているお金を彼に貸してあげて」と、目をウルウルさせて訴えるではないか。

「は、はい。僕でお役にたてるなら喜んで……」

正吾はポケットに手を突っ込み、有り金全部を握りしめた。

「ちよつと待て！妾の正吾に何をやる。とり憑こうと思つても無駄じゃぞ、妾がついているでな！あっちに行かんか、シツシツ」貧乏神はうつすらと微笑みながらまた篠原の背後にとり憑いた。

篠原は嬉しそうに彼女に笑いかけている。

「篠原にも見えているのか？」

弁天はうなずいた。

「神にとり憑かれた者は皆おなじじゃ。貧乏神でも神は神じゃ。もし憑依されておれば妾のことも見えるはずじゃぞ」

そう弁天が話していると篠原はこつちを振り返りニツコリと笑った。「どうやら見えてるようじゃの」正吾はひきつった笑みを浮かべた。「うん。どうやらお仲間みたいだ」全体朝礼が終わると生徒は一斉に教室に戻る。篠原は真っ直ぐに正吾の元にやってきた。

「正吾、その可愛い子は誰？」

「アハハ弁ちゃんって言うんだ。正式名は弁財天だっけ？」

弁天は篠原の肩を指差し

「お前、こやつが貧乏神と知ってとり憑かせておるのか？」

篠原は嬉しそうにうなずいた。

弁天は深いため息をつき

「ハアア完全に取り込まれておるわ、罪な女よのう」と嘆いた。「僕としては仲間が増えてうれしいな。もしかして篠原も福袋買ったの？」

篠原は不思議そうに答えた

「えっ何のこと？」とわからない様子だ。すると弁天が

「天照様が貧乏神など派遣するわけなかるう。大体、貧乏神は一族なのじゃ沢山姉妹がおるぞ！」と教えてくれた。

篠原は正吾に笑って言った。

「僕はね、彼女が大好きなんだ。とっても優しい子なんだよ可哀想な人を見るとすぐに助けようとするんだ。貧乏神なんて…きつと何かの間違いだよ」

弁天は哀れみの目で篠原を見ていた。

「さつ正吾、教室に戻ろうぞ。授業に遅れるぞ！」正吾は複雑な心境のまま教室に戻っていった。

1時間目は数学だ、正吾は先生に指されないようになるべく下を向いている事にした。

「この問題は…吉田、やってみる！」

「はい…」吉田は黒板の前に立つとスラスラと問題を解いていった。吉田の背後には鬚を結った商人らしき人物がとり憑いている。

正吾はそれを見て合点がいった。

「なるほど！計算が得意なわけだ」

つい声を出してしまった正吾を先生は見逃さなかった。

「なんだ正吾、お前もやってみるか？じゃあ…これをやってみる」

ウゲツ！全然わかんないよ。

「弁ちゃん！頼むよ」正吾は小声で頼んだが弁天は全く取り合わない

「妾はそんなもの知らん！計算は苦手での」

ウソッ！

「正吾、どうした。ギブアップか？」

「ハイ…すみません」

「では、これを解ける者！」

篠原がハイ！と手を上げた。

「おっ篠原、じゃあお前やってみる」

肩に貧乏神を乗せた篠原はあつというまに解いてみせた。

「正解だ！よくこれが解けたな。かなり難しい問題だぞ。よし、席に着いて」

貧乏神はフフンと鼻を鳴らし正吾を見ている。

「くう〜っおのれ貧乏神め！正吾、あやつらに負けるわけにはいかん。弁天の誇りにかけてお前を天才に育てるからな。覚悟しいや」

正吾は神様の意地の張り合いに付き合わされるのは懲り懲りとはかりに大きなため息をついた。

弁ちゃん才能を見つける！

昼休み、弁天は作戦会議をするからと正吾をだれもない音楽室に誘った。

「おお！やはりここは落ち着くのう」

正吾は広い教室にどつかりと腰をおろした。

「そういえば弁ちゃん、そのギターカッコイイよね。ちゃんと弾いたの聞いた事ないよ。今なら誰もいないし弾いてみてくれない？俺、結構音楽には煩いんだぜ！」

「おお！そうじゃったな」

弁天はアコースティックギターを思う存分掻き鳴らした。「どうじや！ハートが熱くなるであろう？」正吾はその演奏に鳥肌たつほどの感動を覚えた。

「うん！一気に熱くなったよ。俺もそんなふうに弾けたらなあ…」

弁天はその言葉を聞き逃さなかった。

「正吾よ、先ほど隣の準備室にたくくさんの楽器があるのを見たぞ。アコースティックギターもあつたようじゃが？」

「ああ、うん！軽音部のやつだ」

弁天の目がパアツと輝き

「よし、ちよつと借りようぞ。持ってきてたも！」

正吾は隣の部屋に行くとドラムの隣に立て掛けてあるギターをとると、音楽室に戻っていった。

「あつたよ！」

「おお、よしよしそれでよい」正吾はぎこちなくギターを抱えると弦に触れた。

「正吾よ、まずはチューニングじゃ。そのままでは弾けぬぞ。すべては基本からじゃ、しっかり身につけよ！」正吾は弁天の言つとおりに従った。

「よし、これでいいじゃろう。妾のは神器じゃからそんな面倒な作業は要らんがな」

正吾は弁天のギターをみて

「見た目は変わらないけどやっぱり特別製なんだね」マジマジと眺めた。

「もちろんじゃ。正吾にも自分専用のものが必要じゃの。とりあえず今日はそれで練習じゃ」

弁天は手とり足とり教えたが正吾はすぐに音をあげた。

「あゝ！俺、才能無いな」

弁天はその言葉を聞き

「ある！絶対にあるぞ。お前の指を見てこれは、と直感した。妾を信じよ。よいな？」

と、励ました。

正吾はうなずくと

「弁ちゃん、ちょっと弾いてみてよ」とお願いした。

「おお、よいぞ！」

弁天はアップテンポの曲を爪弾き始めた。

それに合わせ正吾は自分のギターを弾くふりをしている。

「弁ちゃん、これエアギターって言うんだぜ、気分爽快、イエイ！」

弁天は呆れて

「なんじゃなんじゃ？弾くふりをしとるだけではないか」

正吾はかまわずノリノリでギターを振り回している。

二人は音楽室のドアの隙間から見ている目があることに気付いていなかった。「そうだ！弁ちゃん、作戦会議するんだったね」

正吾は手を止めて弁天の方に向きなおった。

「それならもう済んだわ」

「えっ？」正吾はキョトンとしている。

「そちは天才ギタリストに決定じゃ！」

「えっ？ええゝ！？」弁天は正吾の絶叫に耳をふさぎ

「煩いの〜！なんぞ不満か？」  
と正吾に問いかけた。

「いや、そりゃあそうなれたら嬉しいけど…俺、自信ないなあ」  
弁天はギャハハと笑い

「お前は音楽の神が選んだ男！大丈夫じゃ」と太鼓判を押した。

正吾は自信無さげにあたまを搔いた。

「正吾！まずはギターを買わねばならぬ。お前にふさわしいものを  
探しに行くぞい」

弁天は正吾の肩に飛び乗った。

二人は学校から帰ると早速相談を始めた。

「正吾、金はあるのか？」

「今月の小遣いはもうないけどお年玉があるよ」

正吾はピンクのブタの貯金箱を裏返して穴からお札を引き出した。

「ええと…4万3千円だな」

「よし！それだけあれば充分じゃ」

正吾はホッと胸をなでおろし、パソコンの前に座った。

「ん？何をしておる」

「インターネットを見るんだよ。これなら色々情報集められるから  
ね…どれどれ、お！これなんて新品で1万円ポッキリ。あっこれ  
はヴィンテージで…120万？楽器ってピンキリだなあ」

弁天はパソコン画面に釘付けになっている正吾に向かって

「正吾よ、楽器にもくせがあつてな。新品でもくせはあるし、中古  
なら尚更じゃ。それに相性もみんと！」

正吾はウ〜ンと唸った。

「楽器も奥が深いね〜」

「その通りじゃ。しかも物にはすべて作り手の念や持ち主の念、様

々なおもいが詰まっておる。まあ妾が見立ててやるから心配はいらんがな」

二人は相談し、まずは近所で探してみる事にした。

## 弁ちゃん掘り出し物発見！

二人はまず百貨店の楽器売り場に行ってみる事にした。

ショーウインドウにはキラキラのトランペットやアルトサクスが並び、正吾はホウとため息をついた。

「カッコいいなあ。俺も上手くなってセッションとかしてえ」

「こりゃ正吾！寄り道してる暇はないぞ。あっちじゃあっち！」  
そこにはズラリとギターが並んでいた。

正吾はその内の一つを取りだし構えてみた。

「弁ちゃん、これなんてどう？値段も3万8千円で妥当なところじゃない」

弁天はブンブン首を振って

「ダメじゃダメじゃ、どれもこれも気に入らん！」とご機嫌斜めだ。

「こんなに沢山あるのにダメかあ」

弁天はうなずいた。

「どれも魂が宿っておらん。空っぽじゃ！よいか正吾、よい楽器は皆生きておるのじゃ。悲しい曲を弾けば泣き、楽しい曲を弾けば笑い声をたてるそんな名器がきつとある。さあ、探しに行こう！」

探しに行こうったってどこに行けばいいんだよ…。正吾は途方にくれた。

「お？そうだ！骨董市に行ってみようよ。掘り出し物があるかも？」

弁天の目が輝いた。

「よし！それはよいアイデアじゃ、行ってみようぞ」

骨董市は沢山の人で賑わっていた。どちらかというフリーマーケットといった感じだが所々に古びた皿や掛軸などが置いてあるのが見える。

「ねえ弁ちゃん」

「なんじゃ正吾？」

「どれが本物でどれが偽物が直ぐにわかるね。」

「フッフそうであろう？ほれ、あの掛軸をみよ鯉が元気に跳ねておるぞ」

正吾の目にも水しぶきがあがっているのまで見えていた。

「作者の念ってやつだね」

「そうじゃ。ここで見つかるよいが…」

二人は片っ端から店を見て歩いた。

「アゝもう脚が棒だよ。少し休ませて」

「そうじゃの、妾も少々疲れたわい。あそこでだんごでも買ってきてたも」

「仕方ないなもう…」正吾が店先にいくとだんご屋の若旦那が声をかけてきた。

「ずいぶん若いのに骨董に興味があるとはみあげたもんだね。それともなにか探しもんかい？」

「実は、ギターを探してるんです。おじさんどこかい店知ってます？」

若旦那はウーンと唸りポンと手を叩いた。

「そうそう、この裏通りに確か古い楽器ばかり集めた店があるよ。あんまり客が入ってるの見たことないけどね。試しに行ってみちゃあどうだい？」

「え！？ありがとうございます。早速行ってみますよ」  
若旦那は声をひそめて

「ただし、あそこの店主は相当ひねくれもんだから気をつけるよ」とアドバイスをくれた。

正吾と弁天はだんごをかじりながらその店に行ってみる事にした。

表通りは賑やかなのに一本裏の道に入ると人気もなく、なんだか怪しい店が沢山あった。

「うわぁ弁ちゃんこれ見てよ！猿の脳ミソだって、きもちわるっ」

正吾は薄汚れたウインドーに並ぶウサギの脚だの亀の甲羅だのを取り扱っている奇妙な店の隣に森本楽器店という古びた店を見つけた。

「ここみたいだね…入ってみようか？」

弁天は正吾のセーターをギュツと握りしめた。

「ここじゃここじゃ、間違いない！店の中から妖気が流れ出ているので」

正吾は震える足取りで恐る恐る中に入ってしまった。

そこには輝きを失ったトランプットやトロンボーン。そして埃をかぶった無数のギターが沢山立て掛けてあった。

「うわぁ。どれも古そうだね、これほんとにまだ使えるのかな？」

正吾がどれにするか迷っていると、弁天が急に肩から飛び降りて棚の上によじ登りだした。

「正吾、何を見ておる！あの棚の上のケースをとるのじゃ！」

「えっ、これ？」

正吾は背伸びをして真っ白く埃を被っているケースをそつと降ろした。

脇の金具を外し開いてみると、そこには艶やかにかがやく真っ黒なギターが入っていた。表面にはらでん細工の揚羽蝶が美しく舞っていた。

「なんて綺麗なギターなんだ。まるで芸術品だよ」

正吾がケースからとりだそうとしたその瞬間、大きな手にガツチリと腕をつかまれてしまった。

「こら、小僧！大事な売り物に勝手に触るな」

そこにはまるで海坊主のような大きな男が立っていたのだった。

「す、すみません。あんまり綺麗だったもので…」海坊主は正吾の顔をじつと見た。

「しかしお前、よくこれに目がいったな。目立たないところに置いた筈だが？」

正吾はしどろもどろに

「え〜と、あの〜このギターが僕を呼んだ気がして…」

実はそう感じたのは弁天なのだが正直に言うわけにもゆくまい。

「ほう、面白い事をいう坊主だな。で？これが気にいったか」

正吾は大きく返事をした。

「は、はい！とても気に入りました」

海坊主はガハハと笑った。

「お前なかなか道具を見る目があるな…しかし、このギターはなかなか気難しくてな。よっぽどの弾き手でないといい音を奏でてはくれないぞ？それでもいいなら売ってやるう」正吾は嬉しさのあまりとびあがった。

「100万だ」

「はあ？」

「現金で100万持ってこい、明日までにな」正吾は風船が萎んだようにがっかりした。

「そんなの無理ですよ」

「その代わりといっちゃんあんだが、このギターを貸してやるよ。

これを弾いて稼げばいいさ。明日は日曜日だし、学校は休みだろ？

明日の朝これをとりに来い！いいな？」

弁天はガッツポーズをきめて言った。

「正吾、この弁財天様に任せておけ！」

その言葉を聞き、正吾はこの話にのることに決めた。

「わかりました！やってみます」

## 弁ちゃん路上ライブ！

張り切る弁天にのせられてつい

「やってみます！」と返事をしてしまった正吾だったが、さすがに不安になってきた。

「弁ちゃん、何か作戦あるの？」

弁天はムフフと笑って

「あれじゃ、この前正吾がやっておったエアギターとかいうやつ、あれをやればよい」

「ええっ！？俺、人前でなんて出来ないよ」弁天は鼻の穴をふくらませ

「正吾は揚羽が欲しくはないのか？」と聞いた。

「揚羽？」

「あのギターの名じゃ。そう言っておつたらう」

正吾は首をかしげた。

「俺には聞こえなかつたけど…」

「ごちゃごちゃ煩いのう。とにかく100万じゃぞ！やるしかあるまい」

二人は次の日の朝、森本楽器店に出掛けていった。

「正吾、なんじゃそれは？妾が入っていたミカンの空き缶かのう？」

「そうだよ。これを道に置いてお金を入れてもらうんだよ」

「なんだか御利益ありそうだから持ってきた」

嬉しそうに話す正吾を横目に弁天は小さく

「ただの空き缶なんじゃが…」  
とつぶやいた。

そっこうするうちに森本楽器店の前に着いた。

中に入ると、店主の海坊主が新聞片手にタバコをふかしているのが見えた。

「おはようございます!」

正吾が元氣よく挨拶すると店主は驚いて顔をあげた。

「坊主、まさか本当に来るとはな」

「えっ!?!?あの話、嘘だったんですか?」

店主はギターをケースからとりだして正吾に手渡した。

「男の約束に二言はねえよ」

店主はケースから揚羽を取りだして正吾に渡した。

「まあ頑張ってみる事だな。そうそう一つ言っておくが、こいつを欲しいという奴は今までもいたが弾きこなした奴は1人もいなかったぜ」

店主はニヤニヤ笑って

「そうだな期限は今夜の10時にしよう。それまでにちゃんと戻って来いよ。それから揚羽を持ってトンズラしやがったら間違いなく酷い目にあうぜ。これは脅しじゃなく警告だ。このギターは揚羽と言ってなその昔有名なギタリストが使っていたものらしい。そいつは原因不明の死を遂げてな、今でもこのギターにその魂は入りこんでるって噂だよ」

正吾の顔はそれを聞いて一気に青ざめたが、正吾自身どうしようもなくこの揚羽というギターに惹かれているのも事実だった。

「そうですか…でも、俺どうやらこいつに惚れちゃったみたいなんです。まずは諦めないでアタックしてみますよ」

店主は嬉しそうに

「なかなか言うじゃないか。じゃあ10時だぞ!時間を無駄にするな早く行け」と正吾の肩をポンと叩いた。

店を出た二人はまず近くの公園に来た。

「正吾、早速じゃが弾いてみよ」

正吾は弦を鳴らしたつもりだったが、ウンともスンともいわない。

「おっかしいなあ、あれ?やっぱりあのオヤジの言う事はほんとなのかあ?」

弁天はなにを思ったか揚羽に話かけた。

「のう揚羽よ、なぜ鳴らさんのじゃ？やはり正吾ではもの足りんかのう」

すると揚羽から声が聞こえてきた。

「今のであなたがどんなに下手かわかつちやったわ。私…最高の弾き手を探してるの。どうか私の事は諦めてちょうだい」

「揚羽よ、よく聞け。妾は音楽の神ぞ！その妾が頼んでおるのじや。なんとかならんか？」

しばらくして揚羽は答えた。

「…音楽の神であるあなた様にならお仕え致します」

弁天はウームと唸り、正吾に聞いた。

「かくなる上は妾が正吾に憑依するしかすべはないのう。今すぐ正吾に上手くなれといってもそれは無理じゃ。いかがする？」

正吾はキツパリと答えた。

「今はそうするしかなさそうだね。でもいずれきつと揚羽に俺を認めさせてやる！待ってるよ揚羽」

「よし！ぜんは急げじゃ。正吾、いくぞい」

弁天は正吾の鼻の穴からスルスルと入って行った。

正吾は意識を失ったがしばらくするとカツと目を見開いた。

「さあて揚羽よ、人間どもを驚かせにゆこう！」

正吾に憑依した弁天はあらかじめ計画していた通り、駅前の広場に向かった。

日曜日ということもあって、カップルや家族連れでこったがえしている。

「おおここか、なるほど人間がたんとおるの」

弁天は弦を指で押さえた。

## 弁ちゃん恵比寿と再会する！

弦の上を滑るように指が流れてゆく。

周りにいる人の足が一瞬にして固まり、皆正吾に注目した。

バス待ちをしていた女子高生らしい一団が駆けつけてきて正吾のギターに聞き入っている。

あとは人が人を呼び、あつという間に人垣が出来た。

さすがに揚羽じゃ、よい音じゃのう…

弁天は揚羽の響きに満足した表情を浮かべた。

一曲弾き終わったがその場はシーンと静まり返っている。弁天が

「えっ!？」と心配な表情を浮かべると人垣から割れんばかりの拍手と歓声がまきおこった。

「ホホッ気分がよいのう。さあ、もう一曲聞きたい者はこのカンカンにお金を入れてたも！」

空き缶の中はあつという間に小銭でいっぱいになり周りにも沢山こぼれている。弁天はそれを必死にかき集めると、次の曲を奏で始めた。

「おい、あれ正吾じゃんか！」その人垣の中にクラスメート達の姿があつたが、もちろんそんなこととはつゆしらず弁天の野外ライブ会場と化した駅前広場は寒空の中、人々の熱気で溢れていた。

会場の盛り上がりが最高潮をむかえようとした瞬間、警官達が駆けつけてきた。

「ちよつと君、こつちに来なさい」

まずい！

弁天は金をかき集め人ごみに紛れこんだ。

「ハア、危ないところだった…随分金も集まったことだし、少し休むとするかの」弁天はスルスルと正吾の鼻の穴から出てきた。

「正吾！起きろ！」

正吾は弁天に力いっぱい叩かれ目を覚ました。

「ウアア疲れた〜」

「これを見よ、ライブは大成功じゃ！いくらあるか数えるぞい」

正吾はずっしりと重い缶とポケットいっぱいの小銭をジャラジャラと出してみた。

「お！千円札もある。すごいな弁ちゃん

さてさて…おいくらになりましたかね」

「ええと……4万8300円。全然足りないよ〜！」

と正吾が叫ぶと、後ろから誰かが正吾の肩をトントン叩くではないか。

「ヒヤア！おまわりさんもうしません。もうしませんからあ〜」

「ウフフ、あなた！ちよつと私は警察じゃないってば」

正吾が恐る恐る後ろを振り返ると、そこには聖アンナ学院の制服を着た髪の長い女の子が立っていた。

「君…だれ？」

「私は安西カリン。そこにいる弁天様に用があるの」

正吾は驚いて目を見開いた。

「弁ちゃんのお知り合い？」「どうやらそうらしいのう…隠れておらんで出てこい！」

すると女の子の髪をかき分け小さな男の子が出てきた。

弁天と同じ15、6歳位に見える。

「やはり恵比寿、お前か！」

恵比寿はポリポリと頭をかきながら照れくさそうにしている。

「探したよ弁天！さつき君のギターが聴こえてきた時は夢かと思っ  
た。会いたかったよ〜」

恵比寿は今にも弁天に抱きつきそうな勢いだ。

「ウワア、このストーリーカーめ！近付くでない」

「す、すとーカー？」正吾とカリンは声を揃えて叫び声をあげた。

「ストーリーカーだなんて酷いな。僕ら仲間だろ？」恵比寿はカリンか

ら飛び降りて小銭の山の前に座った。

「弁天！もしかして僕の力が必要なんじゃない？もしそうなら遠慮なく言ってくれよ」

正吾は満面の笑みで

「恵比寿くんつてもしかしてあの七福神の？」とカリンに聞いた。

「ウフフそうよ。おかげでうちも年末ジャンボ宝くじ一等当選だったんだから！」「やつぱり君も福袋買ったのかい？」

「ええそうよ。私達ツイてるわよね」

あゝ！地獄に仏とはまさにこの事だあ。

正吾がしみじみしているとカリンが

「でも…どうやらあなたの弁ちゃんは恵比寿くんが嫌いみたいね」と不吉なことを言うではないか。

「弁ちゃん、ここはひとつ恵比寿くんに助けて貰おうよ。一日に100万円なんて無理だつて」

弁天はツンと横を向いたままだ。

「こいつに借りなど作りたくないわい！」

見かねたカリンが恵比寿にたずねた。

「ちよつと恵比寿くん、あなたなんでこんなに嫌われちゃったの？こんなに弁天様が怒るなんてよつぽどの事よ。訳は知らないけど悪い事をしたならちゃんと謝らなくちゃ！」

恵比寿がモジモジしていると弁天が急に叫んだ。

「そうじゃ、そうじゃ！我ら七福神は貴様のせいだ人間界に落とされたのじゃからその償いをしてもらおう。それだったらかまわん。どうじゃ？妾にゆるして欲しいか恵比寿よ」

恵比寿は健気にもブンブン首を振って、目をウルウルさせている。それを見ていた正吾は

「やるな〜弁ちゃん！」とガッツポーズをきめた。

## 弁ちゃんの資金増設計画！

「さて、問題はどうかやって金を稼ぐかじゃな」

弁天がそう言う

「そのお金、私に貸してくれませんか？」とカリンが申し出た。

「ホッ、お主にか？」

「ええ。数十倍に増やしてみせますわ」

隣で恵比寿がコクコクうなずいている。

「うち、このすぐそばなんです。まずは場所を移動しましょう」

正吾たちはカリンの家にお邪魔することにした。

「ええっ！？ここなの？」

塀がどこまでも続き入り口がなかなか見えて来ない。

「昔の大名屋敷を買い取ったの。なんせ古い建物だから色んなものがあるわよ。」

正吾は恐る恐る聞いた。

「いろんなものって何？」

「ウッフ見ればわかるわよ」

大きな門をくぐり屋敷に上がった。

「お邪魔しまゝす」

ギシギシ鳴る廊下を歩いていくと、

「キヤツキヤツ」と子供の笑い声やパタパタ走る足音が聞こえてきた。

「誰か遊びにきてるの？」

正吾が聞くと弁天が答えた。

「座敷わらしじゃな。古い屋敷には大抵いるからの。心配いらんぞイタズラするくらいで悪いものではないからの。恵比寿はあのカギ共とは昔から仲がよいのじゃ。レベルが一緒に幼児並みということかの」

それを聞いた恵比寿は

「相変わらず口が悪いな弁天は。そうやって僕の気を惹こうだなんて可愛いやつ」

弁天は頭から湯気がでそうなくらい怒っている。「はあく？なにを言っとるかこの勘違い野郎め！何をどう考えたらそういうことになるのじゃ？」

正吾とカリンはそんな二人は放っておいてカリンの部屋のパソコンの前に座った。

パソコンを開くと株式トレーディングの画面が出てきた。

「さて、やるわよ。任せておいて」

カリンは早速マウスを動かし始めた。

「株かあ。これって賭け事に近いよね。大丈夫なの？」

カリンは不敵に笑った。

「任せてちょうだい。これでもだいぶ腕をあげたんだから！あなたはギターの修行中なのね。私はこれを修行してるってわけなのよ」

正吾はなるほど、と画面の数字を睨み付けた。

あっという間に数字が上がりました。

「す、すげえ。さすが恵比寿に選ばただけあるね」

カリンは嬉しそうに無邪気に笑った。

か、可愛いっ！

正吾がデレデレ鼻をのぼしていると玄関の方から声が聞こえてきた。

「ごめんください！」

「カリンさん、玄関に誰か来たみたいだよ」正吾はカリンにそう告げたが

「ごめんなさい。今、手が離せないの代わりに出てくれる？」

というので、正吾は玄関にむかった、

「ムムッ何やら嫌な妖気が流れこんできたぞい」

正吾が玄関に着いてみると、そこにはクラスメートの篠原が立っていた。

「あれ、篠原じゃん。ここに何の用事？」

「俺の家ここの後ろだからさ、回覧板もってきたんだ。町田こそここで何やってるんだ？」

「え！？えつとあの〜カリンさんと知り合いで遊びに来てるんだ」  
篠原の肩には相変わらず美人な貧乏神が乗っていた。

「あら、弁天様はどちらに？」

貧乏神が正吾に話しかけてきた。

「弁ちゃんなら恵比寿君と一緒にだよ」

そう正吾が話すと貧乏神の表情が変わった。

「私達も上がらせていただきましようよ。皆さんにご挨拶したいわ」

篠原は貧乏神に言った。

「みなさんじゃなくて恵比寿君だろ？弁天様がライバルじゃあ君も大変だね」

正吾は目を丸くして驚いた。

「ええ〜！貧乏神が福の神に恋？」

貧乏神は無然として

「いけませんか？」

と正吾をにらんだ。

「い、いやあ〜。頑張つてね」

と言うと。貧乏神は嬉しそうにニッコリ笑った。

「さあ、二人共上がっておいでよ」

廊下を渡っていくと、座敷わらしたちがザワザワ騒ぎだした。

「帰れ！帰れ！」

と声を合わせ大ブーイングだ。

「貧さんとわらし達は昔から仲が悪いらしいよ」

と篠原は正吾に説明した。

「ふうん、そうなんだ？」

正吾は襖を開けた。

「こんにちは」

篠原が挨拶すると弁天は驚いた顔で正吾を叱った。

「こりゃ！なぜこいつらを中に入れたのだ。そんなことしたら…あ

「あああ！これを見よ！」

画面の数字はみるみる下がって行きあつという間にゼロになってしまった。

「いやあゝ、もうダメよゝ！」

カリンはなんとかしようともがいたが、どうにもならずガツクリと肩をおとした。

「正吾、お前というやつは！貧乏神を家に入れたらどうなるかわかりそうなもんじゃが……」

「……ごめん！まさかこんな事になるなんて」

恵比寿はポツリとつぶやいた。

「手持ち金はゼロか……」

弁天はしばらく考えて口を開いた。

「やむを得ん！恵比寿、作戦その2じゃ。お前の力を貸してくれ！」

弁天は正吾の肩に飛び乗った。

## 弁ちゃんの作戦その2！

「弁ちゃん、もう一文無しなんだよ。今度はどうやって稼ぐつもり？」

正吾は肩をおとし意気消沈している。

「そうがっかりするでない！我らには揚羽という武器があるではないか。そして恵比寿というボーカルもいるしの」

その言葉を聞き、皆驚いた顔で恵比寿をみた。

「ええっ！？恵比寿君、私それ初耳だけど」カリンは恵比寿にそういうと

「だってそんなの言う必要ないじゃない？」と、とぼけている。

「こやつはなトレジャーシップというグループのボーカルでな。なかなか良い声じゃぞ。元々妾も含めて7人のユニットでな」

正吾は残りのメンバーがどこにいるのか気になった。

「ねえ、他のメンバーはどこにいるの？」

弁天はため息をついて

「さあな、多分今頃我らと同じくターゲットを天才に育てるべく奮闘しておるだろうよ」

「なるほど…：なんだか色々わけがありそうね。それは後で聞かせてもらうとして、今は時間がないわ。早速弁天様の計画を聞かせてよ」カリンは弁天を促した。

「おお、そうであったな。とりあえず我らにはもう音楽しか残っておらん。恵比寿！二人で組むしか道はないぞ」

「ああ、どうやら他に方法はなさそうだしな。と、いうわけだカリンお前に憑依させてもらうぞ」

カリンは慌てた顔で恵比寿を見た。

「ええっ！私が歌うの？」

「正確にはお前を通して俺が歌うんだがな」

恵比寿はそう言うと、

「どんな具合かちょっとやってみようぜ」

と言ってすかさずカリンの鼻に潜り込んだ。それを見た弁天も、では我らもやってみるかの」

と言つて慌てる正吾を無視して鼻の中に勢いよく飛び込んだ。

「よし！憑依完了。そっちはどうだ？」

カリンに憑依した恵比寿は、正吾の姿になった弁天に声をかけた。

「こっちもOKじゃ！」

弁天がまずリズムをとり、恵比寿がスローなバラードを歌い始めた。甘く切ないその声は、カリンを通して屋敷中に響き渡っている。いつの間にか座敷わらしも集まって来てその歌声に聞き入っていた。その時、

肩に座っている貧乏神の目から涙が一滴ポタリと落ちるのを篠原は見てしまった。…貧さん、恵比寿君がそんなに好きなのか？

篠原はこの純粋な気持ちをもつ貧乏神がさらに好きになった。

健気だな…。

がんばれよ！貧さん…

貧乏神の恋心をすっかり揺すぶってしまった事などつゆしらず曲は揚羽のソロのエンディングで幕を閉じた。

「凄いよ！こんなに感動したの久しぶりだ。これはいける！絶対いけるよ」

篠原は絶賛した。

「だだよ！良かったな。じゃあ早速場所を変えてライブといくか？」  
恵比寿がそう誘うと弁天はうなずき

「時間もないことじゃ。骨董市場にいくかの」  
と相談した。

「いいアイデアだな。今日は人もいっぱい出てるだろう。じゃあ移動するか？」

弁天は揚羽を担ぎ上げ、篠原達に声をかけた。

「お前達も行くか？」篠原は首を横に振った。

「俺達は遠慮しておくよ。結果は後で報告してくれ。健闘を祈る！」  
弁天はガッツポーズをきめた。

「おお！任せておけ。がっぽり儲けてくるからな」

弁天は屋敷を出るとポツリとつぶやいた。

「毘沙門、どこにいるのかう……」

それを聞いた恵比寿は苦い顔をしたが、聞かぬふりをした。

「おい弁天、曲は何をやる？」

弁天はハツと我に返った。

「そうじゃのう。まずはノリのいいやつにしようぞ！目一杯盛り上げてからバラードで締めよう」

「それでいくか！二人で組むのも久しぶりだな」

「ああ、いつもアイツらが一緒だったからのう」

恵比寿は弁天の少し淋しげな顔を見て何か考えているようだった。

「どうした、恵比寿？」

恵比寿はハツとして弁天を見た。

「いや、なんでもない！さあ着いたぜ」

骨董市場は人で溢れ返っていた。

「今日はまたずいぶん人が多いのう」

「あっち側をしてみる！今日はフリーマーケットの開催日も重なってるみたいだな」

弁天はニンマリした。

「ホホッ好都合じゃな」

「俺達の音楽を人間達に聞かせてやろうぜ！」

恵比寿と弁天は人ごみを掻き分けて行った。

弁ちゃんスカウトされる！

二人は市場の中央まで進んで行き、空き缶を置いた。

「弁天、準備はいいか？」

「おお！いつでもよいぞ」

弁天は勢いよくギターを鳴らした。

アップテンポな曲で周りの人々をまず振り向かせた。

次に恵比寿の歌声に人々の足は完全に止まる。

「誰だ？なんていうバンド？スゲー！」

あちこちからざわめきが起こり、誰かが手拍子をとりはじめた。

それはさざ波のように拡がりまるでコンサート会場さながらの盛り上がりを見せている。

その中にある森本楽器店の店主の姿もあった。

「一体あいつら何者なんだ…あの揚羽を鳴らせるなんて」

盛り上がりが最高潮に達したところ、弁天は甘く切なくギターを鳴らし恵比寿は透明感のある歌声で人々の胸を熱くした。

二人は曲を終えギターをおろすと、

弁天は声を張り上げた

「どうであつたかの？もつと聞きたくばこのカンカンに愛の寄付を頼むぞ！」

一斉に投げ込まれる雨のようなお金に二人は

「イタツ！痛い！力いっぱい投げるでない」

と文句を言いながらも満面の笑みだ。

そんな中、人垣を押し退け高級な毛皮のコートをまとった小さなお婆ちゃんが近付いてきた。

おもむろにバーキンのバックから札束を取り出している。

「あなたたちとっても良かったわよ。こんなに興奮したのは久しぶりだわ。これは今の私の気持ち、受け取ってちょうだい」

弁天がそれを受け取ろうとすると

「ただし！あなた達が誰なのか知りたいわ」と弁天をじつと見た。

「なんじゃそんな事か。妾はべ…な、何をする！」

恵比寿が呆れた顔で弁天を制した。

「お…そうであった！俺は町田正吾じゃ」  
老婆はうなずいた。

「あなたは？」

恵比寿はニツコリ微笑み

「安西カリンですわ」

と答えた。

「私はこういう者よ」恵比寿は差し出された名刺を受け取った。

「芸能プロダクション？」

「ええ。スターダストという会社よ、私は社長の松下よし子というの。よろしくね」

「もしかしてこれって…スカウトってやつですか？」

恵比寿が聞くと

「そうよ」とハッキリ言った。

「あなた達の音楽は…」

よし子は何か言いかけたが口を閉じた。

「いいえ…今それを言うのはやめておきましょう。今日は九谷焼のお皿を探しに来ただけけど、そんなものよりずっと凄いお宝を発見したわ」よし子はニツコリ笑った。

「また会いましょう。必ず連絡してね！ 待っているわ」

よし子はそう言うのと去っていった。

「弁天、なんだかへんなことになっちゃったな」

恵比寿がそういうと弁天はニヤリと笑い

「一石二鳥とはこの事じゃ！面白くなってきたぞい」とつぶやいた。  
二人は場所を変え、市場の外れの土手に腰をおろすと

「さてと、もとの戻るとするかの」「うっ！っ、疲れた」

弁天が抜け出した正吾の体はすっかり消耗してしまっていた。

「ほんとね。もう、動けないわあ〜！」

カリンもすっかりバテてしまっている。

「まあ、そういうな。この金をみよ！これなら揚羽を買う事ができようぞ」

「まずは数えてみましょうよ」

カリンは早速数えはじめた。

それを横目に弁天は正吾に話しかけた。

「正吾、これをやる」弁天は正吾に名刺を差し出した。

「なんだい？これ。ええと…なになに、スターダストプロダクション？」

「なにやらスカウトとか言っておった」

正吾は目を丸くした。

「ちよつと待つてよ。そんなの無理に決まってるよ。弾いたのは弁ちゃんじゃ俺じゃないんだ。そうでしょ？」

弁天はニヤリと笑って

「そうじゃな。だが足掛かりにはなった。チャンスはやったぞ！後はお前が実力をつければよいだけじゃ」

「フウ。全く簡単に言ってくれるよ」

弁天は正吾の頭をナデナデして

「慌てるでない。妾が一年びつちりコーチするんじゃから心配ないわ」と言った。

「一年？それってどういうこと？」

正吾が弁天に問うと、金を数え終えたカリンは意外そうな顔で正吾に言った。

「あら、弁天様から聞いてないの？神様がターゲットの世話をする

のは一年間なんですって。来年はまた違う人材を育てなくちゃならないの。だから私達も頑張らないとせつかくのチャンスをもたに出  
来なくなるわよ」

「俺、そんなの聞いてないよ。本当なの？」

弁天はうなずいた。

「本当じゃ。だから時間は無駄に出来ん！これから毎日特訓じゃ。

覚悟しておけよ！」

正吾は拳を握りしめた。

弁ちゃん揚羽を説得する！

正吾はずっと弁天は側にいてくれるものと勝手に思い込んでいた。一年か…そんなのあつという間じゃないか！

「どうした正吾？ボウツとしてる暇はないぞい。もう少しで約束の時間じゃ」

正吾はハツと我にかえた。

「そ、そうだね。カリンさんお金足りたかい？」

「ダメよ…全然足りない。あと30万も足りないわよどうする？」  
弁天は腕組みして暫し考えた。

「よし！あとは値切る他ないのう。カリン頼むぞよ」

「えっ、私!？」

弁天は深くうなずいた。

「男はだれしも美人に頼まれたら断れぬものよ…そうであろう？」

弁天は恵比寿と正吾をチラリと見た。

二人とも反論出来ないようだ。

「では早速参るぞ！」

フワフワ飛んでいく弁天を追って一同は森本楽器店の前まで来た。

「じゃあカリンさん、頼みますよ！」

「いやよ。私そういうの苦手なの」

正吾はカリンの肩に両手をおき、じつとカリンの目を見た。

「カリンさん、あなたは綺麗だ。俺最初に見た時からなんて美人なんだろうって思った。絶対君なら大丈夫、お願いします！」

正吾の熱意に負けカリンは仕方なくうなずいた。

「こんにちは！」

店の奥から店主がニユツと顔を出した。

「おお！おまえら待ってたぞ。どうだ金は出来たのか？」

サンダルをはき、店先まで出てきた店主は二人を見下ろし揚羽に目を留めた。

「は、はあそれが…」正吾が声をおとすと、店主はニツコリと笑い「さっきの見てたぞ。凄かったな！」

と正吾の背をバシバシ叩いた。

「いやあ。揚羽の音を初めて聞いたぜ！さすがに伝説のギター。胸が震えるほど感動したよ。そっちの姉ちゃんもまた美人だしい声出しやがる」

カリンはここぞとばかりに店主に頼み込んだ

「あおう。この揚羽なんですがやっぱり100万円でないダメですか？私達、一生懸命演奏して稼いだけとあと30万足りないんです。まけて下さい！お願いします」

「ダメだ！それはそれ…約束は約束だからな」

「そこをなんとかお願いします！」

二人は深々とお辞儀した。

「しかしまあ、この先揚羽を弾けるやつが現れるとも思えないしな…おまえらに売ってやりたいのも山々だ。だからツケにしようというや。おまえらさっき、スターダストの社長と喋ってただろう？あれ、スカウトだったんと違うんか？」

「そ、そうです」

正吾は小さな声でつぶやいた。

「おまえら、絶対ビツクになれるよ！だから出世払いつてことではないなら売ってやるぞ。利子は100万だ。どうだ、いい話だろう？」  
正吾は慌てた

「利子が100万なんて横暴ですよ！」

店主はニヤリと笑い

「なんだ、自信がないのか？」

と問いかけた。

「いいえ！それで結構です。揚羽を売って下さい」

正吾はギョツとした顔でカリンを見た。

「カ、カリンさん？」

「正吾君、あなた男でしょ？売られた喧嘩は買わなきゃダメよ！」

「ハハハ威勢のいい姉ちゃんだ！よし、持っていていけ。ああ、それからメジャーになったらこの森本楽器店の宣伝頼むぜ！ここにある楽器はみんな凄い代物ばかりだ。」

正吾はニツコリ笑って

「分かりました。俺たちきつと有名になってみせます！」  
と宣言して店を出た。

「やったな正吾！これでやっと揚羽はお前のものじゃ」

弁天はそういうが問題はこれからだと正吾は揚羽を撫でた。

「揚羽、これからよろしく頼むぜ。それからカリンさん、恵比寿君どうもありがとうございました。君達の協力のおかげだよ」

恵比寿は正吾の肩に飛び乗って

「いやあ。弁天のためならいつでも協力するぜ！なんせ弁天は俺の恋人なんだから。これからも困ったことがあったらこの恵比寿様になんでも言ってくれ」と胸を叩いた。

それを聞いた弁天はブリブリ怒りだし

「誰がお前の恋人じゃ〜！ふざけるのもたいがいにせい！」と顔を真っ赤にさせ息巻いている。カリンはプツと吹き出して

「まあ良かったじゃない。後は正吾が揚羽に認めて貰えるようにしつかり実力をつけないとね」

と正吾の持つている揚羽を見た。

「そうじゃそうじゃ！挨拶がわりにちょっと弾いてみよ」

正吾はうなずき揚羽の弦を鳴らしてみた。

「痛い！何するの？」正吾はキョロキョロ周りを見回した。

「カリンさん、今何か言った？」

「いいえ、私じゃないわよ」

正吾はもう一度弦を鳴らしてみた。

「この下手くそ！私はあなたがマスターだなんて認めてないわよ」

弁天は揚羽に言った。

「揚羽よ、この者は音楽の神である妾が選んだ人間じゃ。きつとお前にふさわしい奏者になる。どうか協力してやってはくれまいか？」  
正吾は驚いた。

「今の揚羽が言ったの？ビックリしたよ」

「正吾よ、この揚羽は魂をもっておる。だからこそあんなに人の胸をうつ演奏ができるのじゃ。お前はまず揚羽に自分の主人にふさわしい男であると認めてもらわねばならぬぞよ」

正吾は真剣に揚羽と向かいあうことを決心した。

## 弁ちゃんテレビに映る！

カリンは正吾に提案した。

「正吾君楽しかったわ！またやりましょうよ。今度はお互いに神様抜きでね。私もボイストレーニングやってみるわ。ウフフなんだかはまっちゃったみたい。私も頑張るからあなたもしっかり特訓してね。とりあえず今週はお互い別々に練習してみて来週からはうちでやりましょうよ。使っていない蔵があるからそこを使いましょう」カリンはすっかりその気になったようだ。

「カリンさんが一緒なら鬼に金棒だよ。しっかり練習してくるからね！じゃあまた来週」

カリン達に別れをつけ二人は家路についた。

「母ちゃんただいま！」

玄関の戸をガラリと開けると台所の方で

「お帰り〜」と母のユカリの声が帰ってきた。

「まったく受験生とは思えないね。今何時だと思ってるの？遊ぶのもたいがいにしないと後で泣きを見るよ」

ユカリがそう言うのも仕方ない。受験まであと2か月もないのだ。

正吾は揚羽を押し入れに隠し、居間のコタツに脚を突っ込んだ。

「今日の夕飯なに〜？」

正吾がテレビをつけると、姉の和美がリモコンのチャンネルを押した。

「あれ？これって骨董市場だね。お祭りだったからテレビ局来てたんだ！誰か知ってる人映ってないかなあ？」

正吾は持っていたミカンをポロリと落とした。

テレビにはまず、市場の様子が映っていてそれから正吾達の野外ライブが映し出された。

「うわっ！芸能人も来てたんだ。誰だろ？なんか見たことあるような…」

和美はじつと画面を見つめた。

テレビ画面には豆粒大のカリンと正吾が映っている。

正吾の額からは汗が流れ落ちた。

豆粒大だった二人にカメラはズームで近付いてきた。

「ああっ！カリンじゃないの。歌ってるの安西カリンだわ」

正吾はギョツとして和美に聞いた。

「姉ちゃんの知り合い？」

和美は興奮状態だ。

「知ってるも何も同じクラスの子だよ！凄いじゃんテレビに映るなんてさ…あれ？隣でギター弾いてるのって…まさか正吾あんなの！？」

正吾は慌てて和美の口をふさいだ。

ユカリに知られたら大変だ。

「ムググ…やっぱりあんななんだ？」

正吾は観念してうなずいた。

「大丈夫だよ！母さんには秘密にしといてあげる。でも、なんであんながカリンとバンド組んでるわけ？いつ知り合ったのよ？大体あんなギターなんて弾けたっけ？」

和美の質問攻撃にタジタジになっている正吾を横目に、和美はさすがビデオの録画ボタンを押した。

「あんたがテレビに映るなんて」。録画しとかなくちゃね」

和美はめっちゃめっちゃ嬉しそうだ。

そっいえばこいつの小学生の時の夢って芸能界に入ってアイドルになる、だったな。

まったくミィハーなんだから！

「それで？なんていうグループ名にしたの？」

正吾は小声でつぶやいた。

「そんなのまだないよ。俺達、あれが初めての演奏だからさ」

「ふうん。でもなんだかずいぶん盛り上がったみたいじゃない？」

「うん！あの興奮は忘れられないよ。だから俺、本気でやってみることにした。実はあの時芸能プロダクションからスカウトされたんだ」

和美は脚をバタバタさせて喜んでいる。

「やったじゃん！それでなんていうプロダクション？」

正吾は名刺を取り出した。

「ほら…これ」

和美はその名刺を見てまたまた興奮している。

「スターダストって有名人が沢山所属してる一流どころよ！弟が芸能人だなんて…ああ夢みたい」

和美はすっかり夢見心地だ。

「大げさなんだよ姉ちゃん。俺らはまだまだこれからだから…とにかく母ちゃんには内緒にしといてよ！心配するからさ」

どうやら和美は味方になってくれたようだ。コクコクうなずきご機嫌な様子で部屋を出ていった。

「正吾よ。大変なことになったのう…まさかテレビ局が来ていたとはな」

弁天は心配そうに正吾の顔をのぞきこんだ。

「仕方ないさ。とにかく今は余計なことは考えなくて特訓あるのみ！」

弁天はそんな正吾を嬉しげに眺めていた。

「正吾、お主変わったのう」

「そうかなあ？自分じゃわからないけど」「いや、変わったぞ。妾と出逢ったばかりの頃のお前はもっと醒めた目をしておった」

正吾は照れくさそうに

「俺が変わったのは弁ちゃんのおかげだよ。弁ちゃんが俺に夢中になれるものをくれたから」と弁天に感謝の言葉をかけると弁天は潤んでくる目をこすり、

「よし、では部屋に戻って練習じゃ！」と元気よく声を張り上げた。

## 弁ちゃん揚羽と対決する！

正吾は部屋のドアを閉めると早速揚羽を押し入れから出してきた。

「弁ちゃん、やっぱり夜は練習できないよ。母ちゃんには内緒な訳だし近所迷惑になるしね。今晚は揚羽とちゃんと話しあってみることにする。下手くそだからこそ練習したいのに揚羽が音を出してくれなきゃ練習にもならないからね」

弁天はうなずいた。

「そうじゃな。揚羽と仲良くなるのが先じゃった」

正吾は揚羽を立て掛けて正面に座った。

「揚羽、俺一生懸命練習してきつと一流のプレイヤーになってみせるよ。そのためならどんな事でもする！どうか俺に力を貸してくれないか？」

弁天は黙って成り行きを見守った。

「…私、弁天様に弾いてもらいたい。あなたじゃイヤよ！私からもお願いしたい。弁天様、私の持ち主になっては頂けませんか？あなた以上に私を弾きこなせる方は他にいません」

弁天はため息をついた。

「さてさて、困った事じゃのう。揚羽よ妾にはすでにこの雷電という相方がおるのじゃ。妾にとって雷電以上のギターはないと思っておる」

弁天は雷電を愛しげに見つめた。

「人間が作ったギターの分際で何を言うか。身の程しらずもいとこだ！」

正吾は雷電の声を初めて聞いた。

「揚羽は雷電の演奏を聴いた事が無かったね。どうだろう？明日の放課後音楽室で雷電を弾いてみてくれない？」

正吾は弁天に頼みこんだ。

「そうじゃな。揚羽よまずは聴いてみるがよいぞ！さすれば納得が

いくじやるつて」

「揚羽、もし雷電が君よりいい音を出したらなら俺と組んでよ！俺君となら弁ちゃん達を凌ぐ自信あるんだ」

正吾は一か八かの賭に出た。

「プププッあなたその自信は一体どこから湧いてくるの？」

揚羽は正吾のハツタリに思わずふきだした。

「でも…気に入ったわ。こんな生意気な子見たことない」

正吾はニンマリ笑い

「じゃあ約束だからね！もし君が雷電に負けたら君は俺に協力すること！」

「いいわよ。では明日を楽しみにしているわ」

正吾は押し入れに揚羽を戻して戸を閉めると、ニヤニヤしている弁天とハイタッチした。

「うまい事いったのう。しかし揚羽のプライドの高さにも驚いたわ！それから正吾、お前のハツタリにもな」

「ハツタリじゃないよ。本当にそんな気がするんだ。揚羽と組めば怖いものなんかない」弁天は嬉しそうにうなずいた。

「それほど惚れ込める相手に巡り会えて良かったのう。フッフ明日が楽しみじゃわい」

正吾はとりあえず揚羽をゲット出来て安心したのかその夜はぐっすりと眠る事が出来た。次の日の朝、正吾は息がつけず苦しくなって目が覚めた。

「やっと起きたのう全く手がやけるわい」

「弁ちゃん、俺を殺す気？窒息するかと思ったよ！」

弁天は正吾をにらみつけ

「何を言つか、妾の手を見よ、お前のヨダレと鼻水でベタベタじゃ！おお気持が悪い。早く支度して学校に行くぞい」

正吾は揚羽を持ち、そつと裏口から出ていった。

「お？あそこに貧乏神がおるぞ」

正吾達の少し前をクラスメートの篠原が歩いているのが見えた。

正吾は篠原のところに駆けて行った。

「オゝイ篠原、おはよう！」

「おはよう！あれ、もしかしてそれが揚羽なのかい？じゃあ作戦は成功したんだね。おめでとう」

正吾は満面の笑みで

「ありがとう」と返した。

「テレビ観たよ！凄かったね。学校でもきつと騒ぎになってるよ。覚悟しといたほうがいいんじゃない？」

正吾はげんなりした顔で

「それは困る！だって実際あれは弁ちゃんと恵比寿くんで俺達じゃないんだ」といったが篠原は涼しい顔で

「バカだな。そんな言い訳通じないよ。もうこうなったら1日も早くホントの実力をつけるしかないね」

と厳しい意見をきかせてくれた。

「あゝあ全くその通りだよ。ところで今日の放課後、弁天の持つてるギター雷電と揚羽の対決があるんだ。見にこない？」

「対決？一体何があつたんだ？」

正吾は訳を話した。

「なるほどそれは面白そうだ。ぜひ拝聴させてもらつよ。じゃあ俺が審査員つてわけだね」

「そういうこと！」

「わかったよ。えこひいき無しでちゃんと審査するからね」

「うん。よろしく頼む！」

二人並んで校門をくぐっていくと、正吾の足は自然と遅くなっていた。

「おい町田！昨日テレビ出てただろ？」

「あ、ああ。」

「スゲエな！後で生演奏頼むよ」

クラスメート達が次々正吾に声をかけてくる。

弁天は正吾に

「お前はほんとにプレッシャーに弱い男じゃのう」と呆れ顔で話しかけた。

「俺、ホントに目立つの嫌いなんだよ。まったく気が重いつたらないよ」

弁天はそれを聞き正吾の頭をパシンと叩いた

「イタツ！なんだよ弁ちゃん」

篠原の肩に座っている貧乏神がびっくりしている。

「情けない！この前の野外ライブを思いだせ。お前にはまず舞台度胸をつけねばならんな、それでなければプロにはなれん！まずは憑依状態でもかまわんからとにかく人前に入る練習をするぞ」

正吾嫌な予感で顔をしかめていると、正吾に代わって篠原が弁天にたずねた。

「それで一体どうするつもりなんだい？」

弁天はフフフと笑い、

「今日の実験を学校の生徒達に見せてやるうではないか」と言うではないか。二人はさすがに声を合わせ

「ええ〜っ!？」と絶叫した。

## 弁ちゃん雷電を泣かせる！

正吾は学校に着くと、まずは音楽教師の有明のところに行き音楽室に揚羽を置かせてもらった。

「先生ありがとうございます」

「いいのよ。でも町田君がギターを弾くなんて知らなかったわ」

正吾はポツと顔を赤らめた。

「まだ初心者ですから。あの～もうひとつお願いが：今日の放課後、音楽室を借りたいんです。ここで少しギターの練習をさせて貰えませんか？」

「お安いご用意よ。どうぞ使ってちょうだい」

「ありがとうございます！」

弁天がニコニコして正吾に話しかけた。

「良かったのう正吾。後は学校の皆さんに聴きにきてもらうように宣伝しないとない！」

「でも一体どうやって？」

「それは後から考えるとして教室に戻らんとまずいんじゃないの？」

「うわ！朝礼始まっちゃうよ。急いで戻ろっ」

正吾が教室のドアを開けるとクラスメート達が待っていましたとばかりにワラワラと集まってきた。

「正吾見たぜ、テレビ！なんだよバンド組んでたなんて知らなかったぜ」

「町田君、私駅前の公園でライブやってたの見たよ。かつこよかつたなあ～！」

正吾は顔を真っ赤にしてうつむいてしまっている。

「正吾！照れている場合じゃないぞい。宣伝するなら今しかないぞ」  
弁天がそういうので正吾は顔をあげ、クラスメイト達に呼び掛けた。  
「あのう実は今日の放課後、音楽室でギターの弾き比べをするんだ。  
みんなも良かったら聴きに來ない？どっちのギターが良い音出するか  
意見聞きたいんだ」

「やった！いいのか？絶対行くぜ。ところでテレビに出たあの美人  
ボーカルは來ないのか？」

「ああ、カリンさんか…。どうしようかな？うーん、連絡してみる  
よ」

そんな話して盛り上がっていると担任教師が入ってきた。

「こら！みんな自分の席に着きなさい」

みんな自分の席に戻り係の掛け声で起立した。

「礼、着席！」

担任の海原はニコニコして

「おい町田、お前なかなかやるじゃないか。先生もテレビ見てたぞ  
！職員室でもその話してもちきりだった。あのおとなしい町田君が  
？つてなあ」

「先生！今日の放課後、音楽室で町田君のライブがあるんですよ。  
先生も聴きにきたら？」

佐山チカがそう言うと

「おお！そうなのか？じゃあ先生達にも言っておこう。みなさん聴  
きたがつていたぞ」と、段々話は大きくなっていく様子に正吾はた  
だオロオロするばかりだった。

そして放課後…

「ずいぶん集まったものじゃのう」

音楽室の座席はすべて埋まり、立ち見の人までいる様子に正吾の足

はすくんでしまった。

「カリンさん、そろそろ来るころだな」

篠原は舞台裏の手伝いをしてくれるつもりらしい。

カリンさんに連絡してくれたのも篠原だった。

「ごめん、ごめん遅くなっちゃったね」

カリンは息を切らして音楽準備室に駆け込んできた。

「役者は揃ったの、では早速憑依するでな。恵比寿、ではいくぞ！」  
弁天と恵比寿はそれぞれの肉体に憑依し、音楽室に入ってしまった。

弁天の両手には2本のギターがある。

「今日はお集まりのみなさんに、この2本のギターの演奏を聴いて頂きたい。そしてどちらが好みか聞かせて欲しいのじゃ。この2本のギターはどちらも伝説のギターと言われておる素晴らしき逸品じゃぞい。判断は難しいと思うが正直な意見を聞かせてくれ」  
弁天がそう言うと、恵比寿はうなずき

「同じ曲を演奏するので、良かったと思う方に手をあげてください。ではまずこの揚羽というギターから演奏します」  
弁天は揚羽を掲げてみせた。

「ではいくぞい！」

弁天はまずアップテンポの、ノリのよい曲を演奏した。恵比寿は声を張り上げ、観衆は手拍子でそれに応える。揚羽はそれに呼応して踊るように楽しい演奏をしてみせた。

曲が終わると割れんばかりの拍手が起こった。

「よし、では次に雷電というギターで同じ曲を演奏します」

恵比寿は弁天に目で合図を送り、テンポをとった。  
雷電の重低音が響き渡る。

恵比寿の張り上げる歌声に絡みつくように雷電の演奏は一体となり観衆のハートを熱く盛り上げた。

観衆は立ち上がり体はリズムに乗って動き出す。曲が終わるとアンコールの声がかかった。

「みんな、ありがとう！では今度はバラードを聴いてください。まずは揚羽からです。」

弁天の指は揚羽の弦をゆっくりを弾き、物憂げな声で歌う恵比寿に寄り添うように、寂しい女心の切なさをうまく表現させていた。

「では、雷電で同じ曲いきます！」

雷電は泣いていた。恵比寿の哀しい歌に、そして心に一緒に泣いた。それが聴く者の心を揺さぶり、同時に恋の切なさそして喜びまで見事に表現してみせた。

音楽室のあちこちからすすり泣きが聞こえてくる。

「どうやら勝負は決まったようだな…挙手は必要あるまい。どうじや揚羽？」

「……どうやらそのようですね」

揚羽は負けを認めた。

「お集まりのみなさん。今日はどうもありがとうございました！これから私達、メジャーデビュー目指して頑張っていきます。これからもどうか応援してください！」

二人はペコリと頭を下げた。

## 弁ちゃん九尾の背中に乗る！

弁天と恵比寿は二人の体から抜け出した。

「ふう。終わったのう」

「ああ、やっぱり弁天には雷電しかいないな！」

恵比寿がそう言うのとグツタリしていた正吾もうなずいた。

「揚羽、約束だ！俺のパートナーになってくれ。俺達二人で弁天達をギャフンと言わせてやろうぜ！」

「…仕方がないわね。あなたそれだけいうからには絶対私を弾きこなせるようになってよ！そうでなかったら許さないからね」正吾はニツカリ笑って

「任せとけて！」

と胸を叩いてみせた。

「これからが本番ね。しつかりやりましょう」

カリンがそう言うのと正吾はうなずいて

「カリンさん、早速だけどやっぱり君のところで練習させてくれない？うちの環境じゃ無理みたいなんだ」と話すと

カリンは

「分かったわ。ここで練習ってわけにもいかなかったしね。みんなの目があるとこじゃあやりにくいでしょ？早速これからいらっしやいよ」と快く了解してくれた。

「揚羽ちゃん、正吾君を頼むわね」

カリンが揚羽に頭を下げると

「こちらこそよろしく。ギターはボーカルとの相性も大切よ！あなたにも厳しく指導するからしつかりついてきてちょうだい」と逆にお願いされてしまった。

恵比寿はクスクス笑って

「こりゃあ大変だな」とつぶやいた。

練習場所の倉は安西邸の後ろ側に3棟並んで建っていた。

「うわぁ。歴史を感じるねえ」

正吾がため息をつく

「ウフフ。ほとんど開けたことないのよ。昔の骨董品ばかりだから…一番左手の倉の下側は空いてるからそこでどう？こつみえても中は結構広いのよ。外に音も漏れないから大丈夫よ」

倉の入り口の鍵を開けるとギイツと重い扉が開き、モワーツと白いホコリが舞い上がった

「ゲホゲホツす、すごいホコリだね」

「もう何年も開けてないから…ケホツまずは掃除しないと使えないわね」

二人は換気のため倉の小窓をあけた。

一階はがらんと広い空間が広がっていて端のほうには二階にあがるはしごが掛けてあった。

正吾は真つ暗な二階を下からのぞくとブルツと身震いした。

「弁ちゃん、なんだか二階から妖気を感じるけどもしかして何かいる？」

「こんな古い倉なんじゃから居ない方がおかしいわい。なんじゃ、もしかして怖いのか？」

「そりゃあ怖いよ。ねえカリンさん？」

カリンはニヤニヤしながら

「あゝら私は平気よ。もう慣れちゃったもの」

「女は肝つ玉太いからな…男は繊細な生き物なんだよ。ね？恵比寿君」

恵比寿は深くくうなずいた。

「さて掃除はこれくらいにして練習を始めるとするかの！」

弁天は正吾を古い椅子に腰掛けさせた。

「カリン、お前はこつちで発声練習だ」

恵比寿はカリンを呼び壁際に立たせた。

「まずは指慣らしに簡単な曲からやろう。妾が雷電を弾くから後に

続け。よいな？」

正吾は真剣な顔つきでじつと雷電の弦をつま弾く弁天の指先を凝視した。

「どうじゃ？まずここまで弾いてみよ。ワンフレーズだから難しくはないはずじゃ」

正吾はぎこちなく揚羽の弦を弾いた。

「ポロン」

「あっ！音が鳴った。揚羽サンキュー」

「約束だから…。早く弾きなさいよ！」

正吾は弁天を真似てゆっくりではあつたがしっかりと1音1音弾いていった。

「フム、なかなか良いではないか。なあ揚羽よ？」

「そうね。筋は悪くなさそうだわ」

その時、二階から白い煙のようなものがシュルシュルと降りてきて正吾の足元にまわりついた。

「うわ！何これ？弁ちゃん助けてよ〜！」

弁天はその白いものにヒョイと飛び乗った。

「なんじゃ？九尾の狐ではないか。どうやら正吾のギターにつられてやってきたようじゃが」

正吾は恐る恐るその白いものをじっとみた。それは雪のように真っ白な狐で尻尾は9本もあり、まるで孔雀の羽のように優雅に広がっていた。

「これって悪い妖怪じゃないよね？」

弁ちゃんは狐を撫でながら

「こやつは幸運を運んでくる狐じゃ！どうやら正吾のギターの音が好きなようじゃな」と説明した。

「そうなの？俺のファン第1号だな。九ちゃんよろしくね」

正吾は怖々狐の背を撫でた。

九ちゃんは気持ち良さそうに目を細めている。

「可愛いわねえ。私にも触らせて！」

カリンが触ろうとすると九ちゃんはサツと物陰に隠れてしまった。

「ハハハどうやらカリンの事はお気に召さないようだな」

恵比寿がそう言うとかリンはほっぺたをプウツと膨らませ。

「ええ〜？なんでよう」

と拗ねてしまった。

「さあさあそれより練習じゃ！カリンもしっかり腹筋を鍛えんとな。

恵比寿、甘やかすなよ」

弁天は恵比寿をにらんだ。

「ハイハイわかってますよ！…！ということだ。カリンしっかりな！」

「ハアーイ！」と返事しながらもカリンの目は可愛らしい九ちゃんに釘付けになっていた。

## 弁ちゃん猫又退治！

正吾はとりあえず弁天から合格点を貰い、今日の練習を終えた。

「どうじゃ揚羽よ、なかなか仕込みがいがあるじゃろう？」

「まあ、これからだわね」

「カリンはまだまだ腹筋が足りないな。寝る前に毎日やれよ！」

恵比寿は厳しく言い渡すと、カリンは口を尖らせ

「ハア〜イ」と返事した。

「じゃあまた明日学校帰りに寄らせてもらっよ」

「ええ、待ってるわ」

正吾が帰ろうとする時物陰から九ちゃんが出てきて弁天の前で寝そべった。「ホツ妾に乗れと言っとるの！どうやら我らについて来るつもりのようにゃ」

「すっかりなついちゃったな。仕方ない連れて帰ろうよ。どうせ俺達にしか見えないんだしさ」

それを聞くと弁天は早速九ちゃんにまたがった。

「なかなか良い乗り心地じゃのう」

弁天はすっかりご満悦だ。

「今日の練習でなんとなく感覚はつかんだ気がする。やっぱり揚羽との相性はバツチリだよ。ね？揚羽」

「そういうことは一曲弾けるようになってから言ってちょうだい！」

「そうじゃそうじゃ揚羽の言う通りじゃぞ」

「チエツ厳しいなあ。俺は誉められると伸びるタイプなのに…」

「ん？何か言っただかの」

「アハハなんでもないよ。しかし九ちゃんは幸運を運ぶ聖獣なんだよね。だったらなんだか良いことありそうじゃない？」

「さあ、どうであろうのう。そのうちわかるじやろう」

二人が話しているうちに家の前に到着した。

「ただいま〜！」

二人が家の中にあがると、すでに父の健一が会社から戻っていた。

「正吾、遅かったじゃないか。受験も近いんだから早く帰って勉強しろよ」

「うん。図書館で勉強してきたんだ。家だと集中出来なくてさ」

正吾はそう言って父の方に振り返った。

「!?!と、父さん。どうしたの?」

健一は不思議な顔で正吾を見た。

「ん?何が?」

「とと…父さんの首におつきな猫が巻きついてるよ!」

健一は笑って

「何寝ぼけてるんだ?そんなわけないだろう。そういえば最近肩こりがひどくてな。後でもんでくれ」

正吾が弁天の方を見ると弁天は何やら考えているようだった。

九ちゃんは

「フウウ〜!」と唸り、尻尾は扇状に開いている。

「正吾よ、あれは猫又という妖怪じゃ。尻尾が二本あるじやろう?しかも黒猫とは…猫又の中でも最強の部類じゃ。さてどうしたものかのう…」

まず夕食を済ませるとまだビールを飲みながらテレビを見ている健一に、最近変わったことがなかったか聞きただした。

「変わったこと?そうだなあ…あったあった!でもこれはお前に話すにはちよつと…」

「なんだよ、やっぱり何かあったんだ！俺に話してよ」

健一は難しい顔をして話した。

「実は昨日の朝なんだけど…父さん会社に行くとき、その公園をいつも通っていくだろ？その時えらいものを見つけちゃってね」

正吾は身を乗り出した。

「なんだよ、そのえらいものって？」

「…うん。お腹を割られて死んでる猫の死体だよ。周りに子猫の死体も何匹か転がって…酷い有り様だったんだ。父さん、あんまりかわいそうで死体を集めて公園の隅に埋めてやったんだ…まったく酷い人間もいるものだよ」

正吾は深くため息をついた。

「そうか、そんな事があつたんだね」

「でもなんでそんな事聞くんだけ？」

怪訝そうに健一は正吾の顔をのぞきこんだ。

「ううん。なんでもない、嫌な事思い出させてごめんね！」

正吾はそう言つと自分の部屋に戻って行つた。

「フウ、どうしよう弁ちゃん。だいぶ怨みは深いよ！でもなんで父さんにとり憑いてるんだ？」

「多分、人間すべてを憎んでおるのだろう。たまたま通りかかった父君の不運じゃな」

「そんな…なんとか助けなきゃ」

「そうじゃな。猫又は人間の生気を吸いとる。このままでは命にかかわるでな。まずは夜更けまで待とう、行動はそれからじゃ！」  
そして真夜中…

弁天はすっかり寝込んでいる正吾を叩き起こした。

「正吾、起きろ！猫又を呼んでくるでな」

正吾はその言葉でパツチリと目を覚ました。

「そんなに素直に言うことを聞いてくれるの？」

「猫又は元々長い間飼っていた猫であったものが多いのじゃ。だから人語も解せるし、コミュニケーションはとりやすい。ちよっと待っていい呼んでくる」

弁天はふわふわと飛んでいった。

しばらくすると真っ黒い巨大な猫又がのっそりと正吾の部屋に入ってきた。

「す、凄い迫力だな…」

正吾は思わず隣の九ちゃんにギョツとしがみついた。

「お主か、私に用があるというのは？」

正吾は恐ろしさで震えながらも返事をした。

「は、はい！そうです。お願いがあります。うちの父にとり憑くのは止めてください」

猫又は金色に光る目を細めた。

「嫌じゃ！と言ったら？」

正吾は拳に力を込めた。

「どうしてです？なんであなたたちを哀れと思って埋葬した父に仇をなすのですか？恨まれるような事はしてないじゃないですか！」

「…確かに。しかし私は人間すべてに絶望してしまった。人間は勝手だ！自分の都合が悪ければ手のひらをかえすように冷酷になる！我々のことなどおもちゃくらいにしか思っておらんだろう。できれば妊娠している私の腹を掻き裂き腹の子をむしりとるなどできるわけないわ！私は赦さん、決して人間どもを赦してやらん！」

そう言うと猫又はこちらを睨み付け、全身の毛を逆立てた。

「まずいぞ正吾！猫又め、正気を失つとる」

「フウウー！！」

隣でおとなしくしていた九ちゃんの全身が青白い光で包まれている。

跳びかかる猫又に九ちゃんは体当たりをくらわせた。

二匹はお互いを牽制しあいながら段々距離をつめていく。

そして二匹は取っ組み合いになり一つの塊のようになった。

それを見た正吾はすかさず揚羽を爪弾き始めた。

ポロポロ溢れる音符は不思議なメロディを奏でている。それを聴いた二匹のもののは力が抜けてしまい、とうとうグツタリと重なりあってしまった。

「不思議じゃ。二匹の顔が穏やかになっておる。どうやら正吾のギターはものけを癒す効果があるようじゃの」

正吾はやつと鎮まった猫又のそばに行き抱きしめて背中柔らかい毛を撫でた。

「ごめんよ。ごめん」猫又は一筋涙を流し、一瞬光を放った後スウツと消えていった。

「どつやらあの世に帰って行ったようじゃの……」

正吾は甘えてすりよる九ちゃんを抱き上げて静かに微笑んだ。

## 弁ちゃん孤鈴を叱る！

うっん…お、重い！

正吾は腕の痺れを感じて目が覚めた。

昨夜は猫又の一件があつたからなあ…疲れが取れてないや。

正吾はふと隣を見るとなんとそこには可愛らしい女の子がしどけない格好で眠っているではないか。

「き、きき君誰？なんで俺の隣で寝てるの？」

正吾は跳び起きて眠そうに目を擦っている彼女を見た。

「…キユウン」

彼女は変な鳴き声を残してまた布団の中に潜りこんでしまった。

「ま、まさかまた妖怪？弁ちゃん弁ちゃん！起きてくれよ」

正吾はスポーツタオルを布団にして寝ている弁天をツンツンつついた。

「なんじゃ正吾、お前が先に起きるなど珍しいのう」

「た、大変だよ！俺の布団に誰がいる。もしかしてまた妖怪かも？」

弁天はボリボリ背中を掻いてから面倒くさそうに正吾に言った。

「布団をめくってみよ。それでは見えぬではないか」

「それもそうだね」

正吾は近くにあったバドミントンのラケットを握ると、布団の端をそつとめくりあげた。

すると白い着物からスウツと伸びた両足がのぞき、正吾の顔は思わず赤らんだ。

「こりゃ正吾、さつさとせんか！」

急かす弁天に後押しされて正吾は思い切り布団を剥いだ。

「うっん良く寝た。もう朝でしたか」

背伸びをしてこちらを向いた彼女の頭には白い耳がピンと立っているではないか。

「ああっ！もしかして君、九ちゃんなの？」彼女は手の甲をピンク

の舌でペロペロなめている。

「これ九尾、一体なんのつもりじゃ？」

九尾は潤んだ瞳で正吾をじっと見つめ

「私、すっかり正吾様のファンになってしまいました。昨日もあんなに荒れていた猫又が正吾様のギターにはいちころだったではありませんか！もう私、正吾様の魅力には抗えせんわ。これからは常にお側にいてお守りいたします」と告白した。

正吾はそれを聞きすっかり舞い上がってしまったている。

「エへへ、俺そんなにカツコ良かった？」

「そりゃあもう最高でしたわ！あの音色、そして凛々しいあなたのお姿！もう、もう九尾はあなたに惚れてしまいました」  
そういうと九尾は正吾に抱きついた。

「ええい、離れる！離れるというに！」

「まったく面倒なことになったのう。とりあえず正吾、学校に行くぞ！ぐずぐずしてたら遅刻してしまう」

正吾は目覚まし時計を手に取ると

「うわあ！ヤバイよ。すぐに着替えなくちゃ」

弁天は九尾をギロリと睨み

「大人しく待っておれよ。よいな！」

と釘をさした。

「じゃあ行つてきまゝす！」

正吾は食パンをくわえて家をとびだした。

「ああ、弁ちゃんなんかならない？神のお力でさ」

「甘えるでない！お前が九尾とイチャイチャしてるからこうなるのだ。さっさと走らんか！」

正吾は息を切らしながら教室に滑りこんだ。

「な、なんとか間に合ったあ」

正吾が席になだれこむと同時にチャイムが鳴った。

「きりーっ！礼、着席」

朝の挨拶をすませると担任の海原が口を開いた

「今日からこのクラスに入る転校生を紹介する。入りなさい」

「九条狐鈴と書きまして、くじょうこりんと申します。どうぞよろしく願いますわ」

転校生は黒板に達筆な文字を残してニッコリ笑った。

「こりんちゃんかぁ可愛いな」

クラスの男子はみな鼻の下を伸ばしている中で、正吾だけは呆然とこりんを見ていた。

「きゅ、九ちゃん…！」

先生は正吾の様子に気付き

「なんだ、町田の知り合いか？」とたずねた。

「ええと…ハアまあそうです」

消え入りそうな声でボソボソつぶやくと、こりんは

「はい、私正吾様の許嫁ですわ！」と言い切った。

「ええ…!？」

クラスメート達は目を丸くしてビックリしている。

「あ、あやつめ一本とられたわい」

弁天はしまったとばかりに天を仰ぎみた。

こりんはニコニコして狼狽える担任に席を正吾の隣にするよう交渉していた。

「ま、まあいいだろう…九条も学校に慣れるまで心細いだろうからな。じゃあ佐山、お前席を譲ってあげなさい」

「…はい、わかりました。どうぞ」

佐山チカは明らかに不機嫌な様子だ。

正吾はチカに

「ごめんな」と声をかけた。

「いいのよ。町田君が悪いんじゃないわ」

その様子を見ていた弁天は

「このおなご、どうやら正吾に気があるようじゃのう。ますます面倒な事になりそうじゃ」と、いまいちこの状況が分かっていない正吾にため息をついた。

## 弁ちゃん恋のキュービッドその1！

九尾はご機嫌で正吾の机に自分の机をくっつけて教科書をのぞきこんでいる。

その様子に呆れた弁天は九尾の頭を小突いて言った。

「こりゃ九尾！なにがこりんじゃ、しつこい女は嫌われるぞい。

見てみる、正吾が嫌がっているではないか」

九尾は目をウルウルさせてジイツと正吾を見つめた。

「正吾様…わたしつたら…ごめんなさい」

正吾はドギマギしながら

「そんな…俺、迷惑なんかじゃないよ。九ちゃん、心配してくれてるんだよね？ありがとう」

「しょ、正吾様…こりん嬉しい！」

弁天はこりゃあ言うだけ無駄だと悟り、正吾の事は九尾に任せて出掛ける事にした。

「正吾、妾は少し出掛けてくるからな」

「えっ、どこに行くの？」

「ちよつと気になる事があってな。なあに、学校の中じゃから大丈夫じゃ心配するな」

正吾は弁天に気をつけて行くように言ってみつからないよう小さく手をふった。

「さてと、あの侍と話でもしてくるかの。あのままじゃ音楽教師も行かず後家じゃ。同じ女としては黙っておれんどの」

弁天はフワフワと3階の音楽室に向かって飛んで行った。

「お、いたいた。相変わらさずべつたりと張り付いておるわ」

音楽教師の有明の背後には若くなかなかイケメンの侍がひっそりと寂しげな顔で寄り添っていた。

有明はそんな事にはまったく気付かない様子で次の授業の準備なの

か、プリントをホチキスでとめる作業に没頭している様子だ。

「おい！お前、一体そこで何をしておる。お前のせいで見る、このおなごについている守護霊が困っておるぞ」

若侍はギクツとした表情で弁天を見るとその場にひざまずいた。

「こ、これは弁財天様。見苦しいところをお見せして申し訳ございません」

「お前のしておる事はただのストーカーじゃぞ。なぜこの者にとり憑いておる？そなたはすでに死んでおるのじゃぞ、この者に懸想したところでどうにもなるまい」

若侍は唇を噛みしめ、苦悶の表情を浮かべた。

「はい、それは承知の上。私もこのひとに幸せになって頂きたい！だからこそ、つまらない男は私が寄せ付けないようにしているのですよ」

弁天はフウツとため息をついた。

「なにやらこみ入った事情があるようじゃのう。妾に話してみよ！相談に乗るでの」

若侍の表情がやっと和らいできた。

「このひとは私が昔愛した人の生まれ変わりなのです。私がこうしてさまよっている間に、この人はもう何回かの人生を生きているのですよ。」

同じ世に生まれたい…そして今度こそ添い遂げたいのです。どうすればよいのか教えてください」

弁天はポリポリと頭を掻いて

「それは無理じゃな！」と言い切った。

「なぜでございますか、あなた様は神なのです。出来ない事などございませぬ？」

弁天は呆れた顔で若侍を見て言った。

「このおなごを見よ！もうすっかりお前の事など忘れて新しい人生を送っておる。お前も男らしくスッパリと諦めて新しく生まれ変わるがよい。さすればきつと次の世で巡り逢える。それが縁というものじゃ。そんな風にしがみついてはただの悪霊でしかないぞ！」  
若侍はしばし考えこんでいたが、パツと何か考えが浮かんだらしく弁天の方に向き直った。

「では、一つお願いがあります。少しの間、彼女に私の姿が見えるようにして頂けませんか？」

「な、なんじゃと？」

弁天は鳩が豆鉄砲くらったように目をまん丸くさせて驚いた。

「私の存在に気付いて欲しいのです。こうして永い間思い続けてきたことを伝えたい…そうしたらきつと私は昇天出来ると思います」  
弁天はウーンと考えこんでしまった。

「きつとビツクリするぞ！いくらイケメンでも幽霊じゃからな…どうにか説明せねばならんじやろう。となると、やはり正吾の協力が必要じゃなあ…」

若侍は土下座して頼みこんだ。

「どうかお願い申し上げます！」

「フウ仕方あるまい、乗りかかった舟じゃ。今日の昼休みにでもまた来るから待っている」

「あ、ありがとうございます！」

礼を述べる若侍に手を振ると弁天はフワフワと音楽室をあとにした。

「問題は正吾じゃな。なんとか説得して、にわか霊能者を演じてもらわねばならぬ…嫌がるじやろうな」

そして休み時間…

弁天は正吾を屋上に誘い出した。

正吾の傍らには九尾が常に控えている。

「実はお前に頼みがあったな」

「どうしたの？あらたまつて」

弁天はモジモジと言い辛そうにしている。

「弁ちゃんの頼みとあらば俺、なんでもやるよ。なんたって弁ちゃんは俺の恩人なんだからさ」

九尾も隣でウンウンとうなずいている。

「そうか？実はな、音楽教師の有明にとり憑いている若侍と話してきたんじやが、奴めとんでもない注文をしてきてな…」

「ああ、あのお侍さんか…俺も気になっていたんだ」

弁ちゃんはここぞとばかりに正吾にお願いした。

「そこで、相談なんじやがどうであろう？奴め有明に自分の存在を知らせたいと言ってきた。自分の想いのたけを伝えて心おきなくあの世にゆきたいのじやという。有明がああ若侍を見ても驚かぬよう上手く正吾の口から説明してやってもらえまいか？」

正吾は他人事だと思っていいたら自分の名がでたので

「ええっ！俺が？」と狼狽えた。

## 弁ちゃん恋のキューピッドその2！

弁天はニンマリ笑って

「そうじゃ。正吾には霊能者の役をやってもらわねばならん」と言った。

「そんなの先生が信じるかなあ」

「俺が急にそんなこと言ったところで無理だよ。霊能者ってイメージじゃないでしょ？」正吾はハツとして隣の九尾の肩を叩いた。

「ここにいるじゃないか、その役にピッタリの子がさー！」

弁天はポンと手を叩いた。

「おお！九尾がいたのう。そういわれてみるとイメージピッタリじゃない。頼むぞ九尾」

九尾は嬉しそうに

「お役にたてれば光栄ですわ。やらせて頂きます！」と頼みをきいてくれた。

そして昼休み…

正吾は九尾を連れて職員室に行った。

「すみません。有明先生は？」

「あら、町田君。彼女があなたの婚約者？」保健室の鈴木先生は興味深々といった顔で九尾を見ている。

「可愛い子じゃないの。職員室でもちよっとした騒ぎだったのよ。町田君に婚約者がいただなんて」

正吾はトホホと思いながら

「ハ、ハア…：そうですか」

と力なく笑った。

「ちよっと待つてて。呼んでくるわね」

しばらくすると職員室の給湯室から有明が出てきた。

「あら、どうしたの？二人揃って」

正吾はギュツと拳を握りしめ、思いきって言った。

「先生、大切なお話があります。今時間ありますか？」

有明は首をかしげながら

「ええ、いいわよ。じゃあ音楽室でいいかしら？」

「はい！ありがとうございます」正吾は有明の後ろで頭を下げる若侍に微笑んだ。

音楽室は春を思わせる暖かい日の光が射し込んでいた。

一同は窓際の席に座ると正吾は緊張で咳払いした。

「せ、先生。驚かないで聞いてください。この九尾…じゃない九条さんは実は凄い能力があるんです」

有明は不思議そうに

「凄い能力？」と聞き返した。

「はい、そうなんです。いわゆる霊能力ってやつです」

そこで九尾がおもむろに口を開いた。

「先生、先生の背後に若い男の姿が見えます」

有明は恐怖で顔がひきつった。

「ええ！そ、それは確かなの？」

九尾は深くうなずいた。

「はい、間違いありません。若い美貌の侍がはっきりと見えています」  
有明は真剣な表情で

「なんで私に憑いてるの？何か怨みでもあるのかしら…」と九尾に聞いた。

九尾は首を左右に振り

「いいえ、それは違います。彼は先生の前世で恋人だったと言っています。先生を想うあまりに成仏できず苦しんで私に助けを求めたのです」と厳かに告げた。

「それで私はどうすればいいの？やっぱりお祓いとか受けないとダ

メなのかしらね」

九尾は有明の顔をジツト見つめ

「そんな事では根本的な解決にはなりません。彼は先生と話したがつています」

有明は途方に暮れた。

「話すって一体どうやって?」

「先生がいいと言ってくれれば彼は先生に姿を見せてくれますよ。どうですか?昔の恋人の姿を見たくありませんか?」

有明は明らかに困惑しているようで

「見たいわ…でも幽霊でしょ?ちよつと怖いなあ」

正吾は有明が躊躇しているのを見てこれは言うしかない判断した。

「先生、今恋人いますか?」

「いいえ…いないけど。どうして?」

正吾は

「やっぱり…」とつぶやき

「このままでは一生恋人ができませんよ。先生に近付く男はみくんなこのお侍さんが追い払ってますから」と言うと、有明は慌てて

「それは困るわ!」と叫んだ。

「では、怖がらず彼と会ってあげてください。お願いします!」

正吾は有明に頭をさげた。

「町田君は優しいのね…他人の為に頭を下げるってなかなか出来ない事よ。わかつたわ…話してみる。一度は愛し合った相手だもの…成仏させてあげたい」

正吾と九尾は手を取り合って喜んだ。

有明の後ろでは若侍が嬉し涙にくれていた。

正吾は有明に

「では早速今晚にでもどうですか?」と提案した。

「そうね。こういう事は先延ばしにしてちゃいけないわ。じゃあ今晚ここでいいかしら?」

正吾はうなずいた。

「はい！では今晚ここで」

弁天はニコニコして

「上出来、上出来！」

と正吾の頭を撫でている。

正吾はほっと胸を撫でおろし音楽室をあとにした。

「あゝ緊張したよ。とりあえずここまでは順調だね」

正吾がそういうと九尾は心配げな顔でつぶやいた。

「でも：本当にこれで良かったのでしょうか？もし、先生が彼を見て昔の気持ちがよみがえったりしたら彼の未練はますます深まるんじゃないかとちょっと心配です」

弁天はそんな九尾の肩をバンと叩いた。

「そうならんようにするために我らがおるのじゃ。本番はこれからじゃぞ！」正吾は帰り際に見た有明の不安げな顔を思いだし

「そうだよね。先生には幸せになって貰いたいよ」と音楽室を振り返った。

### 弁ちゃん恋のキュービッドその3！

その日の夜、夕飯が済んでから正吾と九尾、弁天はそつと家を抜け出し学校に向かった。

「さてと、いよいよじゃな！」

弁天のことは二人はうなずいた。

「前世の恋人なんて、僕も会ってみたいよ。どんな人だったんだろう…。」

それを聞いた九尾は口を尖らせて正吾をにらんだ。

「まあ！正吾様がそんなに未練たらしい男だとは思いませんでしたわ」

正吾は慌てて弁解した。

「いやあそんなんじゃないよ。ただの好奇心なんだけど…俺はやっぱり前世で縁があった人はこの世でも縁があるんじゃないかって信じてるからさ。忘れてるだけでもうすでに出逢っているのかもしれないな」

「その通りじゃ正吾、よく会った瞬間ビビツときたとかいうじゃろう？あれは前世での縁を直感的に感じておるのだろうよ。お前はまだそんな経験はないのか？」

正吾は思い巡らせてみたがやっぱり思い浮かばなかった。

「うーん。まだそんな経験はないなあ」

弁天はニヤニヤしながら正吾の顔をのぞきこみ

「どこに居るのかのう？正吾の運命の相手は…」と言つと、九尾の頭から真っ白い耳がニユツと出てきた。目は金色に光っている。

「そんなのこの九尾が許しませんわ！正吾様には私がいるのですから変な事ばかり吹き込まないでくださいまし」

弁天は

「おお怖い〜！九尾よ、冗談じゃ冗談！」と九尾をからかって遊んでいる。

正吾は呆れて

「二人共、いい加減にしなよ。もう学校に着いたんだから気を引き締めてよ、頼むからね！」とカツをいれた。

夜の学校はしんと静まりかえっており暗闇の中、足音だけがカツンカツンと響いていた。

音楽室の灯りだけが廊下を煌々と明るく照らしている。

「良かった。もう先生来てるみたいだね」

正吾がガラリと戸を開けると、神秘的な顔で座っている有明の姿があった。

「先生今晚は！」

二人が挨拶すると有明は立ち上がった。

「二人共来てくれてありがとう。先生、緊張しちゃって早く来ちゃったわ」

二人は有明の前に座り微笑んだ。

「そうでしょうね。先生、やっぱり怖いですか？」

有明は小さくうなずいて

「うん、いくら恋人だった人でも幽霊だからね。怖くないと言ったらウソになるわ…」有明がそう言うのと後ろの侍は少し寂しそうな顔になった。

「さあ、こうしていても始まりませんわ。早速彼を呼び出してみましよう！」

九尾と弁天は目配せして開始の合図をした。

「先生、まずは目を閉じて下さい。肩の力を抜いて…そうです、ではそのままです」

九尾はそう言うのと呪文を唱えだした。

「おん、まからぎゃ、ばぞろうしゅにしゃ、ばざらさとば、うん、ばく…」

すると、霧のようにつつすらと見えていた侍がにわかに実体を現してきた。

「…先生、目を開けてください」

九尾の声で有明はゆっくりとまぶたを開けた。

すると有明の頬はポツと紅く染まった。なんて…なんて素敵なお人かしら！

ちよつと、ちよつと待って…何かしらこのトキメキは。

「わたしは佐久間右近と申す者、ずっとあなた様をお慕い申し上げやつと…やつとこうしておめもじ叶い…感無量でござる」

有明は目の前にいる美しい元恋人にすっかり魅了されていた。

切れ長の涼しい目もと、繊細なあごのライン！私ったら昔から面食いだつたのね…

「あのおう…私達、昔付き合っていたそうですね。どうして結ばれなかったのかしら？そのいきさつを教えてもらえませんか？」

右近の顔は苦し気に歪んだ。

「はい…正直にお話ししましょう。織田信長様が亡くなり、豊臣が実権を掴んでからというもの我らキリシタンはそれと気付かれないよう。山の中に秘密の教会をつくり、そこで拝礼していたのです。

私達はそこで出逢いました。私は豊臣に仕える武士の家柄、あなたは町の商家の娘しかもお互いに親の決めた許嫁のいる身分でした」

「私達、身分の違いで親達に引き離されたというわけなのね？」

有明は右近の顔を悲しげに見つめた。

「いいえ…そうではありません。親達はまだ我々の関係に気付いていませんでしたから」

有明は首をかしげた。

「では、一体なぜ？」

右近は首をうなだれ顔を両手で覆った。

「私は…私あなたを裏切つたのです！」

苦し気にそう叫ぶ右近に弁天は優しく声をかけた。

「右近とやら、自分を責めるな！昔はどうあれ現在はこうして有明は元気で暮らしておる。気を鎮めて正直に真実を話し、楽になるがよい」

右近は顔をあげ有明と正面から向かいあった。

「あの日、私達はいつものように夜の礼拝に参列しておりました。つけられていたとは露とも知らず…。教会に攻めいられた時、私はあなたを置いて一人その場から逃げ出したのです。もし、私がキリシタンと知ればお家は断絶たくさんの者が路頭に迷う事になる…。でもそれは言い訳にすぎないのかもしれないかもしれません。そんな卑怯者とは違い、あなたはキリシタンとして極刑されむごたらしく死んでいきました。この罪は決して消えませんが…。ただどうしてもあなたに謝りたかった」

右近の両目からは留めなく涙があふれた。

「…赦します！あなたを赦します。イエス様はどんな罪も赦してくださいます。きつと昔の私もあなたを恨んでいなかったと思えますよ。あなたは他の者達を救ったのですもの…。きつと間違っていたなかつたわ」

そう言うつと有明は胸元に手を入れて口ザリオを見せた。

「私もキリスト教会の洗礼を受けています。これに見覚えはありませんか？先祖から受け継がれて今は私が身に着けています」

右近は目を見開いた。

「そ、それは私がお菊さんに差し上げたものです」

右近は感無量といった表情で有明を見た。「右近さん…お礼を言います。長い間私を見守ってくれてありがとうございます。こうしてお会いできて良かったです。そして先祖のお菊に代わり言わせて下さい。どうか…あなたも成仏してください。そしてきつと次の世でもう一度出逢いましょう。その時を待っています」

右近はうなずき立ち上がった。すると右近の周りを白い光が包みこみ、ゆっくりと空に昇っていった。

「先生…良かったですね。きつとまた逢えますよ」

正吾はそう言つて有明の方を見ると、有明の頬を一筋の涙が伝っていた。

## 弁ちゃん守護霊をフオローする！

そんな有明の背後からニユツと人影が現れた。

「アゝアやつと行ったか。いやあしぶとい男じゃったわい」

正吾は驚いて後ずさりした。

「あ、あなた一体誰ですか？」

その男はウゝンと背伸びしてフウと力を抜いた。

「わしか？わしはこいつの守護霊だ。いやあまずは礼を言う！アイツを追い払ってくれてありがとう」

有明は目を丸くしてその男を見た。

無精髭を生やし、ボサボサに伸びた月代は先ほどの右近の爽やかな美男ぶりとは遠くかけはなれた印象だ。手には尺八を持っている。

「のんきに礼を言つとる場合ではないぞ！これからはしっかりと守護霊の役目をまっとうしろよ。だいたいこうなったのもお前がきちんと有明を守っておらんからじゃ！」

「弁天様：はい！これからはしっかりとこやつを守っていく所存です」

武士は平伏してそう言った。

九尾はその様子を見て心配そうに眉根を寄せた。

「右近様の力が大きかったせいとかこの者はすっかり霊力が落ちてしまっているようです。このままではいつまた悪霊にとり憑かれるか心配ですわ」

有明はそれを聞いて不安そうな表情を浮かべた。

「九条さん、なんとかならないかしら？」

弁天が九尾に目配せした。

九尾はうなずいて

「大丈夫です。守護霊の力が回復するまで私がフオローいたします」と言つて有明を安心させた。

「先生、九ちゃんに任せておけば安心ですよ…でもやっぱり守護霊  
つてその人にも影響を与えるんですね。お侍さんプロの尺八奏者な  
んでしょ？」

侍はガハハと笑って

「わしは藩から追い出されてな、これで飯を食っておった！」と自  
慢気に尺八を掲げて見せた。

「先生は確か大学でクラリネット専攻してたんですね。ウーン守  
護霊の影響は侮れないですね！」

有明はそれを聞いてガツクリと肩を落とした。

「え〜！ほんとに？なんだか複雑な気分だわ」

「な〜にを言うか、わしのお陰で音楽教師になれなのだぞ！」

有明はそう言う侍を恨めしげに見て

「ほんとはプロになりたかったのに…」とつぶやいた。

「そ・れ・は！お前の努力が足らんからじゃ。なんでもわしのせい  
にするな」

二人の険悪ムードをなんとかしようと、正吾は話題を変えた。

「ところでまだお侍さんの名前、聞いてませんでしたね」

侍は無精髭を撫でながら

「佐々木誠之助じゃ」と答えた。

「佐々木さんですか、これからしばらくは俺達もお手伝いしますね。  
だから1日も早く霊力が戻るように頑張ってください」

佐々木はフン！と鼻を鳴らした。

「手伝いなどいらん！今まではあの若侍がいたのでどうにも動きが  
とれんかったがもうすっかり身軽になった。悪霊などバツタバツタ  
とやっつけてやるわ！ダ〜ツハツハツハ」

それをみて弁天は深いため息を漏らした。

「言っても無駄なようじゃな。仕方ない、陰から見守るしかなかる  
う」

正吾と九尾も仕方なく弁天に同意した。

「先生、これから呪文を解きます。そうすると霊の姿は見えなくなりますよ。今のうちに佐々木さんに言っておく事はありませんか？」  
九尾がそう言うと、有明は佐々木をじっと見つめ

「これからもどうぞよろしくお願いします」と頭を下げた。

佐々木は満面の笑みで

「任せておけ！お前の幸せは俺が守る。右近にもそう頼まれておるんでな。あやつは確かに迷惑なところもあつたが、本気でお前に惚れておつた…だから任せておいたのだ。さてと俺も本来の役目に戻るとするか」

二人はやつと仲直りすると有明は席につき、目を閉じた。

「おん、まからぎゃ、ばぞろうしゅにしゃ、ばざらさとば、うん、ばく…」

九尾が呪文を唱えると佐々木の姿は霧のように消えていった。

「ハアなんだか夢を見てるみたいだわ。見えないだけでそばに佐々木さんがいるんですものね。一回見ちゃうと変に意識しちゃうわ」  
正吾達には有明の頭の上でアツカンベーをしている佐々木の顔がはつきり見えて弁天はブツと吹き出した。

「ハハハそうかもしれないね。でもまあ今までと変わりませんよ。」

有明は

「それもそうね！」と元気よく立ち上がった。

「あなた達、ほんとにありがとう。なんだか私、やっと幸せになれる気がするわ。今度こそ素敵な彼氏が見つかりそう」

そんな有明を見て九尾は念を押しした。

「先生、今は守護霊のパワーが落ちていきますから行動にはくれぐれも気をつけてくださいね」

「ウフフなんだか立場が逆転したみたいね。わかったわ気をつけます！ずいぶん遅くなっちゃったわね。近くまで車で送るわ」

一同は有明の車に乗ろうとドアを開けた。

すると誰か先に車に乗っているではないか。

「先生、先客がいるなら俺達歩いて帰りますよ。すぐ近くですから」  
正吾がそう言うと

「なぐに言ってるの！そんなわけないでしょ」

正吾はブルツと身震いした。

「じゃ、じゃあそこに座っているのは…？」正吾は思わず悲鳴を上げた

「ギヤアア！お、お化けだ」

## 弁ちゃん生き霊の正体を暴く！

九尾は怯える正吾を突飛ばし車の中を点検した。

「チツどうやら逃げられたようです。」

弁天は首をかしげた。

「ずいぶん逃げ足が早いもう。正吾の見間違えではないのか？」

正吾はズボンのほこりを叩きながら立ち上がった。

「そんなわけないよ！俺、にらまれちゃったもん」

有明は正吾に詰め寄った。

「それでどんなやつだった？」

正吾はうくと唸り

「よく見えなかったけど男の人でしたよ。結構整った顔立ちの…でも怖い顔でこつちにらんでました。先生、心当たりあるんですか？」

有明は表情を曇らせた。

「実はね、最近誰かにつけられてる気がするの」

「そ…それつてもしやストーカー！？」

正吾は心配そうに有明を見た。「じゃあ、もしかして今のも？」

有明は首を振って答えた。

「そんなはずないわ！ちゃんと鍵もロックされてたし」

九尾は二人の会話をじつと聞いていたがやつと口を開いた。

「もしかしたら生き霊かもしれません」

「生き霊？」

正吾と有明は声を揃え聞き返した。

「ええ、多分間違ひありません…だとすると少し厄介ですね」

「厄介つて…普通の幽霊と生き霊つてどう違うの？」

「生き霊とは知らぬ間にその者から魂が勝手に抜け出てゆく状態じやからの。放っておくと命にかかわるのじゃ！なんとしてもその本

体を突き止めねばならぬ」

「それにしたって一体どこの誰なんだ。先生、何か手がかりはありますか？」

有明は首を振った。

「仕方ありませんね。次の機会を狙いましょう」

正吾がそう言うのと九尾は懐から紫色の小さな三角の塊をとりだした。

「先生、これを差し上げます。これは魔除けのお香ですわ。これを焚けば先生に近づけないはずですよ」

有明はその塊を受け取りギュツと握りしめた。

「分かったわ。どうして私のところに現れるのかわからないけれど佐々木さんが回復するまでは私もがんばらなくちゃ！」

有明の背後で佐々木は

「すまん！」

と頭を下げた。

「いざとなつたらやっぱり佐々木さんしかいないんですからね！その時はたのみます」

正吾の言葉に有明も見えない佐々木に頭を下げた。

「さあ、今度こそ送るわね。乗ってちょうだい」

車はあっという間に正吾の家の前に着いた。

「先生、じゃあ俺達帰りますけど大丈夫ですか？」

有明は力なく笑って

「だ〜いじょうぶ！先生はこう見えても強いんだから。さあさあ早く入りなさい」となかなか降りようとしないう正吾達に声をかけた。

「…わかりました。じゃあ何かあったらすぐに連絡してくださいね」

「了解！」

一同はそうつと正吾の部屋に戻った。

「あ〜疲れた！」

正吾は布団にバツタリ倒れ込んだ。

隣では九尾がすっかり元の姿に戻って丸くなっている。

「正吾よ、明日学校でも有明の様子をこっそりのぞいてみよう。何

か分かるかもしれないから」

正吾はまぶたを擦りながら

「そうだね。もしかして学校関係者かもしれないし…まずは俺達もパワー回復させないと。じゃあお休みなさい」

そして次の日…

「正吾様！朝でございます。起きてくださいませ。弁天様もそろそろ起きませんと遅刻しますよ！まったく手のかかる方達ねえ」

九尾は正吾の顔をベロンとひと舐めした。

「ウヒヤア！止めて〜」

弁天は正吾の悲鳴で飛び起きた。

「なんじゃ、なんじゃ!？」

「お二人共早く学校に行く支度をしてください。先生を偵察するんですよ？」

その言葉で弁天もすっかり目が覚めたようだ。

「そうであつたの！正吾よ、さつさと支度せよ」

正吾はだらだらと制服に着替え、パンをくわえて家を出た。その瞬間、九尾は九条狐鈴の姿に変わりニツコリと正吾に笑いかけた。

正吾は持っている揚羽に向かって

「こういうのもとり憑かれてるっていうのかなあ？」  
と聞いてみた。

揚羽は

「もちろん！」と答えて

「それだけじゃなく弁天様や私にもとり憑かれてるでしょ？まったく自覚がないんだから笑っちゃうわ」と軽くいなされてしまった。

「そんな事より練習よ、練習！これから昼休みは絶対にやるわよ。

弁天様もこの子を1日も早く一人前にするよう協力してくれないと

困ります！」弁天はうなずき

「分かつておる！これも正吾の音楽性を引き出す良い機会なのじゃ。今にわかる…そう焦るな」と揚羽に言い聞かせた。

学校に着くと、一同はまず職員室に向かった。

有明は窓際の自分の席で机に突っ伏していた。

「大丈夫かな？先生倒れ込んでるよ。声かけてみようか？」

九尾は首を振り

「いいえ…今日は外から様子を伺いましょう。生き霊ならば夜しか活動しないはず…危険はありませんわ」と言った。

すると、そんな有明の肩を優しく叩き声をかけている男がいた。

「あれは誰じゃ？」

「ああ、あれは理科の住吉先生だよ。ずいぶん親しげだね。もしかして先生に気があるのかな？容疑者候補にあげところ」「正吾はそう言つとメモ帳にペンを走らせた。

「正吾様、そろそろ教室に戻りませんか！」正吾はハツとして顔を上げた。

「よし、一時中断。教室に戻ろう」

## 弁ちゃん生き霊の正体を暴く！九尾の作戦

教室に入った正吾とこりんが席に着くと篠原と貧乏神がやってきた。

「おはよう！こりんさん」

「あら、おはようございます」

こりんは礼儀正しくお辞儀した。

「おい、町田。こんな可愛いフィアンセがいたなんて知らなかったよ。いいなあ…俺も彼女が欲しいよ」正吾は小声で

「ホントは違うんだ。この子は九尾っていう妖怪でね。なんでだか俺のギターが気にいってついてきちゃったんだよ」それを聞いた篠原は思わず

「ええっ！？」と声をあげた。

正吾は慌てて

「シィッ！」と口到人差し指を当てて

「まあ正確にいうと追っかけファンだな」と得意気に話した。それを聞いた弁天は

「調子に乗るな！九尾の音感はちと変わっておるでの。お前のはまだマニア受けするというだけの話しじゃ」篠原はフッフと笑って。

「なぐんだ、そういうこと」と何やら嬉しそうにしている。

その様子を教室のはじから見ている女子がいた。

「ねえ、チカ。町田のどこがいいわけ？あんなダサイ草食系男子、

チカには似合わないよ」

チカは正吾をじっと見つめ

「町田くんは誰がなんと言おうと素敵だよ。私はずっと彼を見てた。絶対九条さんになんか渡さないわ！」こりんは殺気を感じ、くるりと振り返った。こりんはチカと視線を合わせ、不敵に微笑み正吾の腕に自分の腕を絡ませた。「クッ！宣戦布告ってわけね。いいわ、受けてたとうじゃないの」正吾はそんな事になっているとは露とも思わず生き霊の正体の事で頭がいっぱいになっていた。

正吾達は休み時間ごとに有明の様子を観察しに行ったが特に変化はなかった。

「午前中は収穫なかったね」正吾が残念そうに言うと九尾は

「昨夜の様子を聞いてみましょう」と席を立ち上がった。

昼休みの職員室は生徒も沢山来ていて結構混雑していた。正吾達は職員室の中に入っていき有明に声をかけた。

「先生、音楽室借りていいですか？」

有明は目の下にくまがバツチリ出来ている。

「ええ、いいわよ。使ってちょうだい」

正吾は声のトーンを落として

「先生：昨夜はやっぱり何かありました？」と聞くと有明は

「このくまを見てよ。何も無かったとおもっ？」と疲れた表情で答えた。

「詳しく話して下さい。場合によっては今晚伺いますわ」

九尾がそう言うと

「私も一緒に音楽室に行くわ。話しを聞いてちょうだい」

音楽室の後ろの方の席にみんなで有明を取り囲むように座ると早速有明は昨夜の状況を話し出した。

「昨日、あなたたちを送ってから直ぐに私も自分のアパートに戻ったの。もうずいぶん遅い時間だったからシャワーを浴びて布団に直行よ。」

もちろん寝る前に九条さんから貰ったあの魔除けのお香を炊くのは忘れなかったわ。私も疲れていたからグッスリ寝込んだんだけど…朝方よ、なんだか息苦しくて目が覚めたの。そうしたら二本の腕が私の首を締め付けていたのよ。叫ぼうと思ったんだけど金縛りっていうのかしら…全然動けなくてね、必死で心の中で佐々木さんに助けて！っ祈ったの。そしたらやっ和金縛りが解けたわ。よくみたら朝までにお香はすっかり燃えカスになっちゃってたのよね…参ったわ」

弁天はそれを聞き満足そうにうなずいた。

「佐々木よ、ずいぶん頑張ったようじゃのう」

有明の後ろにたたずむ佐々木は疲労困憊といった顔で

「いやあ…なかなか手強いヤツだったわい。さすがのワシもへとへとじゃ」とぼやいていた。

こりんはすっかりしよげかえって

「すみません先生…香の量が足りないなんて初歩的なミスですわ」と謝った。

「九条さん、謝らないでちょうだい。あなたには感謝してるのよ。

ああ…それにしてもどうやったら本体を突き止められるのかしら？」

有明がそうこぼすのを聞き、九尾は何か思い付いたようにハツとした表情を浮かべた。

「そうだわ…揚羽よ！正吾様、ギターを弾いて下さいませ。揚羽にはどうやら魔を呼び寄せる力があるようです。経験者が言うのですから間違いありませんわ！」

正吾は驚いた顔で

「ええっ？じゃあ九ちゃん俺の演奏に惹かれたんじゃなくて揚羽の音に惹かれてたってわけ？」

九尾は正吾にそう言われ慌てて弁解した。

「違いますわ！あなたの演奏する揚羽の音に感動したのです。だいたい揚羽を鳴らす事が出来るのはもうあなたお一人だけでしょう？」

そんな二人のやりとりに弁天は呆れて

「こりゃ！またすぐイチヤイチヤする！時と場所を考えんか」

二人は反省したのか大人しくなった。

「さあ、ではさっそく揚羽で実験じゃ！」

弁天がそう言うと、正吾はすぐに揚羽をとりに出ていった。

## 弁ちゃん生き霊の正体を暴く！陰陽師登場

「お待たせ、持ってきたよ」正吾が揚羽の弦を弾くと弁天が  
「なんでも良い、思い付いたまま弾いてみよ」と言った。九尾は嬉  
しそうに目を輝かせている。

「うん。俺は楽譜なんて読めないからその場限りのアドリブでい  
よ。そうだな、今回のテーマは…挑発ってとこかな？」

「なんでもいいからはよう弾いてくれ！」

「ハイハイ揚羽、テーマは挑発でいくから頼むね。じゃあいくよ！」

正吾はアップテンポで気持ちよさそうに弦を弾いた。  
皆、有明をジイツと凝視している。

「どうかしら？何か変化があった？」

有明は不安げに九尾に聞いた。

「う〜ん何も変わりませんねえ。正吾様！ちよつとストップ、テ  
マを変えましょう。そうですね〜、じゃあ今度は癒しをテーマで弾  
いてみて下さい」

正吾はうなずいた。

「了解！癒しね。じゃあいくよ」

正吾は、優しく撫でるように揚羽の弦の上で指を滑らせた。

「ああ、やはり正吾様のギターは素晴らしいですわ」

九尾はうつとりと目じりに涙を浮かべながら聞き入っていた。

「有明はう〜んそうかしら。私には理解不能だわ」と首を捻ってい  
る。弁天は二人の感想を聞いて

「なるほど…正吾の演奏はいまいち人間ウケしないのう。妖魔には  
たまらん魅力があるらしいが…まだまだ修行が必要ということか…」  
弁天がそう独り言をつぶやいていると、九尾がアツと声をあげた。

「先生の肩の辺りに何か見えてきましたよ！ほら、みて下さい」  
なにやら蜃気楼のように人の顔がユラユラと見えてきた。

正吾が思わず演奏を止めると、あつというまにそれは消えてしまっ

た。

「アアッ正吾様、ダメじゃないですか！もう少しで見えるところだったのに」

「ごめん、思わずそっちに気をとられちゃった」

その時、昼休み終了を告げるチャイムが

「キンコンカンコン」と鳴った。

「キヤア、大変だわ授業が始まっちゃう！あなたたちも早く教室に戻りなさい」

「ハイ！じゃあ今晚先生のアパートにお邪魔します。放課後また音楽室で待ち合わせしましょう」

正吾はそういうところいを連れ、慌ただしく音楽室から出ていった。次の授業は体育かあ。いまから行っても怒られるだけだよ。こういう時はやっぱり仮病でしょ…

「九ちゃん、俺なんだか頭が痛いんだ。ちよつと保健室で休んでいくよ。先生にそう言っておいてくれる？」

「大丈夫ですか？ここのところ忙しかったから疲れがでたのかもしれませんね。わかりました。ゆっくりお休みください。多分今夜はかなりハードな夜になりますからね。パワー回復させておいた方がよろしいですわ」

「うん。そうするよじゃあね」

正吾は九尾と別れて一階の保健室に行った。

「春日先生、あれ？誰もいないのか？ベッドお借りしま〜す！」

正吾は一番奥のベッドに潜りこんだ。どれくらい眠ったのか目を覚ました時には夕暮れのオレンジ色の光が眩しく正吾の顔を照らしていた。「う…ずいぶん寝ちゃったみたいだな」

正吾に背を向け、何やらブツブツ呟きながら手を動かしている春日の白衣姿が目に入った。

「先生…今何時ですか？」

春日はビクツと肩を震わすと正吾の方に振り返った。

「びっくりした、な〜んだ町田いたのかあ。今はもう3時30分を

まわってるぞ。一体いつからいたんだ？」

「お昼休みが終わってからです。俺眠っちゃって…もう5時間目ですよね？授業もそろそろ終わりだからまだここに居てもいいですか？」

春日はニツコリ笑うとメガネの奥の細い目がさらに細くなった。

「しょうがないなあ。それでどこか具合が悪かったのかい？」

正吾は頭をポリポリ掻きながら

「ええ、ちよつと頭が痛くて…でもぐっすり眠ったら治っちゃいました」

「ハハハそりゃあ良かった。ココアでも飲もうか？」

「ハイ！頂きます」

春日は大きめのマグカップにたっぷりココアを入れて持ってきてくれた。

「はい、どうぞ」

二人は湯気をフウフウ吹きながらマグカップに口をつけた。

「先生って確か独り暮らしでしたよね？ご飯とかも自分で作ってるんですか？」

「もちろんだよ。作りに来てくれる彼女もいないしね」

正吾は春日の優しくふんわりした雰囲気が好きでよく保健室に遊びに来ていた。

「先生って歳いくつでしたっけ？」

「もう33だよ」

正吾はこないない人がまだ独身だなんて世の女達はみるめがないなあとつくづく思った。

「じゃあ早くいい人見つけなくちゃ！」

春日は笑って

「そうなんだよね」と他人事みたいにならずいた。

「先生、それは？」

机の上には細長い紙と硯、それにまだ先が濡れている筆が置かれて

いるのを見て正吾はたずねた。

「さつきから気になってたんですけど…もしかして俳句でもやっているんですか？」

「ああこれね…いやあ見られちゃったら仕方ないなあ。これはね、魔除けのお札なんだ」

正吾は不思議そうに春日の顔を見た。

「それをなぜ先生が書いてるんですか？」

春日は気まずそうにボソボソ話しました。

「実は…僕は陰陽師の末裔でね。今でもこうして頼まれごとを持ち込まれるってわけ。この世にはいろんな魔が潜んでいる。町田もそれはわかってるんじゃない？」

この人…一体何者なんだ？

正吾は春日がまるで初めて会った知らない人のように感じた。

**弁ちゃん生き霊の正体を暴く！有明の罪（前書き）**

今回はつい長々と書いてしまいました。

生き霊編はあと1話で完結です。

よろしくお付き合いください。

## 弁ちゃん生き霊の正体を暴く！有明の罪

驚く正吾に春日はニッコリ微笑み

「陰陽師なんていっても昔の事だしね。今の僕にはたいしたことは出来ないよ。こうしてお札を作って臆病な人達を慰めるくらいがいいとこさ」

正吾はもう少し話を聞き出そうとさらに聞いた。

「でも先生、どうして僕が魔の存在をわかるって知ってるんですか？」

春日はマグカップにおかわりのココアをつぎながら

「うん。実は少しなんだけど靈感っていうのかな？…どうもそういう存在が見えちゃってね。やっぱり先祖の血ってやつかね」

春日はココアをすすりながらそう答えた。

「じゃ、じゃあ僕のそばに何か見えてます？」

春日はクスリと笑い、

「そのちっちゃい彼女は一体誰なの？」

「うわっ！弁ちゃんが覚えてるんだ…本物だよこの人！

「先生なら分かるでしょ？」

正吾は春日の力がどのくらいのものなのか知りたかった。

「う〜ん。妖魔でも霊でもなさそうだな、もしかして妖精？」

弁天はブツと吹き出した。

「よく言うわい。陰陽師ならわかっておるだろうに。正吾をからかうのもたいがいにせい！」

春日はハハハと笑って

「どうもすみません。弁財天様」と殊勝に謝った。

「まったく陰陽師というやつはろくなヤツがおらん。霊や妖魔など見下して操ろうとする生意気な輩が多いでな」

「わたくしは残念ながらそんな力は持ち合わせておりませんよ。ましてあなた様は天界に住まうお方ないがしろにするなど…そんな

「恐れ多いこと出来ません！」

「フン！どうだか？」どうやら陰陽師にあまりいい思い出はないらしい。

「弁ちゃん、これこそ天の思し召しってやつだよ！」

「ハア？」弁天は何を言つとるんだコイツは？といった表情で正吾をみると、正吾は

「うん！そうに違いない」と一人で納得している様子だ。

「な・に・が言いたいのだ？」

正吾はニツコリと笑い

「生き霊払いに協力してもらおう！」

と力強く言い放った。

有明は興味深そうに身を乗り出した。

「生き霊だつて？誰に憑いてるんだい？」

「有明先生ですよ。気付きませんでしたか？」

春日はウーンと唸り

「だって有明先生はあの美形の侍がガツチリ守っていたでしょう？」

正吾は感心してしまった。

何でもわかつてるんだな…じゃあ話は簡単だ。

「実は彼は昇天して今は佐々木さんという守護霊が先生を守ってるんです。」

春日は合点がいったという顔で

「最近は何も会ってないからなあ。そんな事になっていたとはね」と言っ

た。

「それでいつやるの？」

「今夜先生のお宅に行って張り込むつもりです！春日先生も来てくれませんか？そうすれば鬼に金棒ですよ」

春日はしばらく考え込んでいたが

「わかったよ。ただし僕に退治はできないよ。せいぜい生き霊が暴

れないよう御札で結界を張るくらいがせきのやまだ」

正吾は嬉しそうに立ち上がった

「それで充分ですよ。行きましよう！」

二人が音楽室に入るとすでに有明と九尾が来ていて姿をみるなり驚きの声をあげた。

「春日先生、どうしてここに？」

「俺が来てくれって頼んだんだ」

不思議そうに正吾の顔をみる二人に弁天が説明した。

「こやつはどうやら陰陽師らしい。少しは術も使えるようなのでな連れてきたというわけじゃ」

「春日先生が？」有明が思わずつぶやくのを聞いて、春日は照れくさそうに小さく

「すみません…」と返事をした。

有明は

「すごいわ…すごいわ春日先生！陰陽師だなんて。じゃあ式神とかも出しちゃったりなんかするんですよね。カツコイイじゃないですか！」すっかり興奮している有明は放っておいて皆スタスタ歩き出していた。「有明先生、ほらみんな行っちゃいますよ。僕達もいきましよう」

皆、有明の車に一齐に乗り込んだ。

「有明先生はずっとひとり暮らしなんですか？」

正吾が聞くと

「そうよ、大学出てからずっとひとり暮らしだわ」

と答えた。

「そうですね…今までは先生に近づくと男の人はみんな右近さんが追い払っていたんですから」

有明はフウとため息をついて

「そうよねえ。なんでこんなに可愛い私がモテないのか不思議だったのよ」

臆面もなくそう言い放つ有明だったが

「せっかくフリーになったのにまた霊にとり憑かれるなんて…ホントに先生はモテますよね」と九尾に言われてしまい有明はガックリと肩を落とした。

「因果よねえ…」

有明はしみじみとそう言う

「さあ、着いたわよ。降りてちょうだい」と声をかけた。

「二階なの、こつちよ！」

ドアをガチャリと開けるとすぐ脇に小さなキッチンがあった。

有明の趣味なのかカラフルな食器が沢山棚に並べてあった。

「狭いとこだけどみんな入って！」

新聞紙を広げたくらいの玄関はみんなが脱いだ靴で埋まってしまった。

奥の居間は出窓のせいと意外と広く感じられる。

淡いクリーム色のソファと小ぶりのガラステーブルが置いてあったがまだスペースにゆとりがあった。

「そこら辺に適当に掛けてちょうだい。今、お茶でも淹れるわね」  
正吾は慌てて声をかけた。

「先生おかまいなく！それより早く始めましょう」

春日は早速紙をひろげ陣を描き始めた。

そして部屋の柱に御札を貼っていく。

「有明先生、この陣の上に正座して下さい」

春日はなにやら呪文を唱え始めた。

「まずは結界を張りました。霊が暴れても外には逃げ出せなくしましたよ。僕ができるのはここまで、あとは任せます」

九尾は前に進み出て円陣の中の有明に声をかけた。

「ではいきますよ！よろしいですか？」

有明はまぶたを閉じた。

「ええいいわ！」

九尾はその返事を聞くと生き霊を呼び出す呪文を唱えた。

「のうまく、さんまんだ、ばざらだんかん！」

すると円陣の中が青白く光りだし、有明の背後からゆらゆらと陽炎のようなものが立ち昇ってきた。

「よし、今だ！」

春日は叫び、有明の腕をグイと引つ張ると円陣の外に引き出した。

「痛い！もう、乱暴ね」有明は腕をさすり春日をにらんだ。

「有明先生、ほらとうとう正体を現しましたよ」

春日にそう言われ有明は円陣の中をじつと見詰めた。

「ここはどこだ？あの女、どこに行きやがった！」

スーツを着た中年の男が凄い形相でキョロキョロあたりを見回している。

「私を探しているのよね？怖い…こっち見てるわ！」

春日は有明の手をギュツと握った。

「大丈夫、こちらは見えなはずですから」

正吾は怯える有明に、この男に見覚えがないかたずねた。

「知らないわ、見たこともない！」

有明はそう断言したが人はそれと気付かぬうちに怨みをかう事もある。

九尾はそう思い、最近の出来事でなにか気になる事がないか確かめた。

「そういえば…先週くらいかしら、電車の中で痴漢にあったのも近くにいた若い男の人が助けてくれたわ」

「その捕まった男はどうになりました？」

「その助けてくれた人が次の駅で警察官に引き渡してくれたみたい」  
正吾は何か引つ掛かるものを感じた。

「普通、先生も証人として一緒に行くもんじゃないですか？」  
有明は首をかしげながら

「だって私は急いでたし、あとは任せちゃったわ」と答えた。  
九尾は御札を一枚剥がすと、円陣中で出口を探してもがいている生き霊に声をかけた。

「俺の人生を台無しにしやがって！どこだ、どこに行きやがった」  
「落ち着きなさい。あなたは今我々に捕らわれています。元の肉体に戻りたくば我々のいうことを聞きなさい！」

「なんだと？ふざけるな！誰のせいであんなことになったと思う？みんなあの馬鹿な女のせいだ！そのせいで俺は…俺は…」  
春日は優しく生き霊に問いかけた。

「いったい何があつたんです？話してみてください。お互い何か誤解があるかもしれない。こちらに否があれば謝ります」  
生き霊は笑った

「謝るだと？謝罪などなんにもならない。もう全て失ってしまったんだから…だがな、その女が己の罪もしらすのうのうとしているのも腹がたつ！いいだろう話す事にする」

皆それを聞き、ホツとした表情を浮かべた。

「あの日俺はいつものように朝の満員列車に揺られながら会社に向かっていった。会議に出る為、いつもより一本早い電車だったんだ。その会議は俺の課長になって初めての会議だったんだ…それを！この女が俺を痴漢と勘違いしたせいで出席出来なかった。その電車には俺の部下も乗っていてね。会社にはいられなくなったというわけさ。女房や子供にも恥ずかしい思いをさせ…俺はたまらず家を出た。俺は…俺は痴漢なんてしていない！犯人はあの若い男だ。それなのにあの女は忙しいからと俺がどうなるかなど考えもせず汚名だけきせていなくなった！俺は怨んで怨んで怨みぬいた、魂が脱け出すほどにな！」

皆シーンと生き霊の言葉に耳を傾けていた。

「私…大変な事をしてしまった」  
有明は愕然とそつつぶやいた。

弁ちゃん生き霊の正体を暴く！償い（前書き）

この章で生き霊編完結予定でしたが、どうしても入れたいシーンがあった為、完結までいきませんでした。もう少しお付き合い下さい。

## 弁ちゃん生き霊の正体を暴く！償い

自分の罪におののく有明に春日はしっかりするよう声をかけ

「でもこれで解決策がわかりましたね。あとは彼の身元を調べて家族や会社に間違いだった事を説明しなくちゃなりませんよ」と諭した。

有明はうなだれたままコクンとうなずき、生き霊が閉じ込められている円陣に近付いた。

「ごめんなさい！私、大変な間違いをおかしてしまった。許してくださいなんていわない…けどあなたの家族や会社にも私の過ちを話さなくちゃならないわ。だから、どうかあなたの居所を教えてください！」

「もうどうにもならない…遅すぎる、何もかも」

生き霊は悲しげにそうつぶやくとまたゆらゆらと陽炎のように実体がなくなっていくた。

「ああっ！消えてしまう」

正吾がそう叫ぶと春日は人型の紙をとりだしフウツと息を吹きかけた。

「あの男のあとを追え！」

小さな人型の紙は青白く光る円陣の中へ飛び込んで行った。そしてとうとう生き霊は皆が見守る中、跡形もなく消えてしまったのだ。

「あれは式神ですか？」

正吾は春日にたずねた。

「うーんまあそんなものかな。居所を突き止めたら帰ってくるよ。それまで我々は待つしかないね」

春日の様子を見ていた九尾は弁天にささやいた。

「あの春日という男、中々の術の使い手に見えますか？」  
弁天はうなずいた。

「フム、胡散臭いやつじやのう。まあしばらく様子をみるとしよう  
我らの邪魔にならぬのなら別にかまわん」

春日の方を見ると、その腕の中には涙にくれる有明の姿があった。

正吾はその二人の様子に

「もしかして?…うん、あの二人ならお似合いだよ」と少し嬉しく  
なった。

「さあ、感傷に浸っている暇はないぞ！式神が戻り次第行動開始じ  
や。春日とやら、連絡を待っておるぞ」

正吾は春日にもう少し有明が落ち着くまでそばにいるよう頼むと、  
そつと部屋から出ていった。

その帰り道、正吾はしみじみと二人に語った。

「なんだかさ。今回の事は色々考えさせられたよ。人は意識しない  
うちに誰かを傷つけている事もあるんだね…。そして知らないうち  
にその人の人生までも変えてしまうようなことも起こってしまう。

なんだか怖いよ」

弁天はフフフと笑って

「人はみな迷惑かけあって生きておるということじゃな。ならばお  
互い様じゃ！とりあえず相手を思いやる気持ちを忘れてはいかんと  
いうことじゃろう」

「うん、そうだね。有明先生も辛いだろうけど思いがけずナイトが  
登場してくれて良かったよ。二人とも恋にはあんまり器用じゃない  
みたいだけどこれがきっかけになればいいな」

人生は予測がつかないから面白いんだな…。俺にはどんな未来が待  
ってるんだらう？

正吾は弁天と九尾をじっと見つめた。

「ん？なんじゃ正吾」視線に気付いた弁天が言った。

「なんでもないよ」

「ウソ！正吾様、わたくしにみとれてましたわ」

弁天はブツと吹き出した。

「九尾お主、恵比寿に似てきたぞ！」

「ハア？弁天様がへんな事を言ってますよ正吾様」  
正吾はアハハと笑うと

「ハイハイ二人とも仲良くね！さあ帰ろう。春日先生からいつ呼び出しがかかるか分からないからね。自宅待機だな」

「そうじゃな。では正吾のギターを聴きながら帰るとしよう。なあ九尾？」

九尾は思わず飛び上がった。

「はい！そういたしましょう」

正吾は仕方なく揚羽を構えた。

「テーマは？」

正吾が聞くと弁天は少し考えて

「償いじゃ」と答えた。

正吾は

「わかったよ」と答え、弾き始めた。

「なんだか心に沁みますわ」

「そうじゃな。やはり人間に深みがでねばよい音楽も奏でられぬ。

今回の事は正吾にとってよい経験になったようじゃ」

次の日学校に行くとき校門の前で春日が二人を待っていた。

「おはようございます。式神は戻ってきましたか？」

「ああ！居所がわかったぞ。明日は休みだからみんなで行ってみよう。二駅先の場所だから駅前の時計台の下に9時集合でどうだい？」

「大丈夫です。有明先生の様子はどうですか？」

「大丈夫、落ち着いたよ。明日はきちんと彼の家族や会社にも謝罪に行くと言ってる。」正吾はため息をつき

「そうですか…」と相づちをついた。

「じゃあ、また明日！」

春日はそういつと校舎に戻っていった。

正吾はその日はずっと明日の事が気になって落ち着かなかった。

「弁ちゃん、彼は俺達と会った事があると気付くかな？」

弁天は首を横に振り

「いいや、分かるまいよ。多分昨夜の事は夢だったと思っただろうからな」

正吾は鉛筆を指でもてあそびながら

「やっぱりそうなんだ？ちゃんと話を聞いてくれればいいんだけど……」

と顔を曇らせた。

そして次の日：

正吾は時計台の下で九尾と弁天を連れ、春日と有明の到着を待った。

「駅前はいつも混んでおるのう。そうじゃ！正吾よ、ちよつどよい機会じゃぞ揚羽を弾いて電車賃でも稼いでおこつ」

正吾は渋い顔で弁天を見た。

「こりゃ！なんちゅう顔をしとる。この前は妾が憑依したから客が集まったのじゃ。今度は実力で集めてみよ！」

「ダメだよ。俺、人前に出ると震えちゃって指がいうこときかなくなっちゃうんだ」

弁天はそれを聞いてブチぎれた。

「なんでそう意気地がないのじゃ！失敗を恐れていては何もできんぞ。まずはやってみよ！別に失敗したとどれ程のもんじゃ。カツ

コつけるのもたいがいにせい」

正吾は弁天の言葉にハツとした。

確かに弁ちゃんの言う通りだな。人にどう思われるか俺は気にしてばかりだ……

「そうだね。弁ちゃんの言う通りだよ……やってみる」

九ちゃんは正吾に飛び付いた。

「それでこそわたくしの正吾様ですわ！」

正吾は揚羽を構え、天を仰ぎ深呼吸すると自分の音楽の世界にトリップしていった。

「なんだか今までの演奏と違いますわね」  
九尾がつぶやいた。

「そうじゃな。音が澄んでおる！」

いつの間にか正吾の周りには人が集まりだしていたが、正吾は周りなど気にせず揚羽をかき鳴らした。

その時、揚羽から色とりどりの蝶が飛び立つのを弁天と九尾は眩しく見上げた。

「見よ！揚羽も喜んでおる」

九尾は目尻に涙をためて

「ええ、さすが神に選ばれた者ですわ！空気が…空気がどんどん澄んでいきます！」

正吾は渾身の演奏を終え、やっと我にかえった。

周りを見渡し驚く正吾に九尾は近付きその右手をとって上に掲げた。その途端、凄い拍手が巻き起こりアンコールの手拍子が起こった。

「俺、俺はきつとこの日の事を忘れません！みんなありがとう」

「正吾よ。この光景を目に焼き付けておけ！よいな？」

弁天は目を細め、正吾の感極まった表情を優しく見つめた。

「町田く〜ん！」

正吾は声のする方に振り返った。

「有明先生、それに春日先生だ！」

弁天は正吾の頭をパシんと叩いて

「よし、行くぞ！」と声をかけ、人ごみをすり抜けていった。

有明は近付いてきた正吾がまぶしく見えた。

「町田くん…あなた凄いやないの！なんでギターは上手いのになりコーダーはダメなのかしら？」

正吾はそのセリフを聞いてガツクリきた。

「先生…そうじゃなくて…ん〜まあいいか」

正吾はトホホといった表情で春日を見た。

春日はクスクス面白そうにしている。

「さあ、皆様行きましょう！」九尾に促され、一行はプラットホームに向かった。

「さあ、乗って！」春日が先導してみな電車に乗り込んだ。

有明は電車にのり、その当手を思い出したのか暗い顔つきになった。春日は有明をかばうように背後に立っている。

正吾も段々緊張してきた。

果たして間に合うのだろうか？今から間違いを正したとしてあの生き霊の主は家族と仕事を取り戻すことができるのか？不安が段々押し寄せてくる。

正吾は拳を握りしめた。

しつかりしろ！最初から諦めるのはさつきもつ辞めると誓ったはずだ！

正吾は自分を力付けた。

「降りますよ！」

みな春日の後に続いた。

「あの川沿いに彼はいるはずです」

川は水量が少なく流れは穏やかだった。

「水際だからかな？寒いとこだね」

正吾は川沿いに行くつも並ぶ粗末なテントを眺めた。

「まさか…あのテントに住んでるの？」

有明は苦し気に春日にたずねた。

「ええ…そのようです」

有明の瞳からみるみるうちに涙が盛り上がってきた。

「ごめんなさい…ごめんなさい」

思わず崩れ落ちる有明を春日のたくましい腕がガツチリと支えた。

「しつかりして、償いはこれからなんですから！」

春日にそう言われ有明は涙をぬぐった。

「そうだったわ。行きましよう」

川沿いに立ち並ぶ無数のテントはどれもブルーシートと段ボールをうまく組み合わせ暖をとるよう工夫されていた。

中からこちらにいくつもの視線が投げかけられる。

そのテントのひとつから、どうやらこのリーダーらしき男がのっそりと出てきた。

「おまえら、なにをしにきた？」

春日が進みでて男の質問に答えた。

「僕達、人を捜しているんです。最近ここの住人になった人はいますか？」

男はフンと笑い

「そいつを見つけてどうするつもりだ？」と聞いてきた。

「家族の元に帰します」

男はフウと息を漏らすと

「ここはな、みんな世間から逃げてきたやつばかりなんだよ。無理やり連れ帰るつもりか？」

「…いいえ。そんなつもりはありません。でもきつと彼は家族の元に帰りたいはずなんです。ただ…帰れないと思っただけだと思っただけです。みんな彼の帰りを待ってるんです！」

「なんでそんな事が分かるんだ！家族はきつとせいせいしてるさ。恥さらしがいなくなつて良かったと喜んでるだろうよ！」男の陰から出てきたスーツ姿の痩せた男は紛れもなくあの生き霊の主であった。

「見つけた…見つけたわ！」

そう叫ぶ有明の顔をじっといぶかしげに見ていた男はハッと表情を変え、有明に飛びかかっていった。

春日はすかさず有明の前に立ちふさがり、男の拳を受けた。

「先生！！」

春日の唇は血で赤く染まった。

「私は有明玲子と言います。どうか…私の話を聞いてください！それからならどんな罰も受けますから」

それを聞いた男は薄く笑って

「どんな罰も受けるだと？いい度胸だ！きこうじゃないか。俺の名は真鍋進だ」

「真鍋さん…ですか。まずはどうか謝らせてください！本当にすみませんでした。私も一緒に警察に行くべきだったんです。そうしていれば今頃…。ごめんなさい」

真鍋はペツと唾を吐きかけた。

「そうだ、お前が俺を犯人でないと証言してくれていたなら今頃おれは会社で課長としてバリバリ働いているはずだった！」

春日が滲んでくる血をぬぐいながら

「これから彼女があなたの家族や会社に行き、謝罪してきます。どうかその許可だけでも頂けませんか？」

「どうかお願いします！」有明はひざまずいて頭を地面に擦りつけた。

その真摯な態度にさすがの真鍋も

「わかったよ…話してみてくれ。だがなそう甘くはないぞ」

有明はすつくと立ち上がり

「ありがとうございます！」と礼を言った。

一部始終をみていたリーダーの男は

「真鍋ちゃん、よかったな。あんたにはまだ希望がある。ここはな、長くいればいるほど脱け出せなくなっちまう忘れられた人間のたまり場だ…戻れるなら早く戻ったほうがいいよ！あんたら、真鍋ちゃんを頼む。なんとか家族のところに帰してやってくれ」

有明は力強くうなずいた。

「はい、必ず！」

**弁ちゃん生き霊の正体を暴く！完結編（前書き）**

生き霊編はずいぶん長いお話になってしまいました。最後まで読んでくださりありがとございました。反響が大きく作者としては次はより楽しい話を書こうと張り切っております。次回は毘沙門天が登場予定です。お楽しみに！

## 弁ちゃん生き霊の正体を暴く！完結編

有明は真鍋から住所を聞き出すと早速駅に向かった。

「春日先生、さっきはかばって来てくれてありがとう」

有明はペコリと頭を下げた。

春日は少し歪んでしまった眼鏡をずりあげながらニッコリ笑いかけた。

「これしきなんともありませんよ」

「先生、陰陽師なんだし術でなんとかならなかったんですか？」

正吾は真顔でそう聞いた。

「おいおい、僕は魔法使いじゃないんだからね。しかも喧嘩も弱いときてる。大人しく殴られとくのが一番の良策さ」

九尾は正吾の不満そうな顔をみて

「あら、でも春日先生素敵でしたわよ！ねえ？有明先生」

有明はポツと頬をピンクに染め、コクリと小さくうなずいた。

弁天はそんな有明の様子をみて

「乙女心にビビツときたかのう？」とニヤニヤしている。

「さあ、次の駅で降りますよ」

春日がそう告げると、みんなの表情はにわかに緊張した。

駅の構内を抜けると、空は薄曇りで今にも雨が落ちてきそうな気配であった。

「なんだか怪しい天気になりましたね。あそこに見える住宅街みたいですよ。行ってみましょう」

春日はそういうと早足でスタスタと歩き始めた。

「せ、先生おいてかないで下さいよ！」

有明たちも急いで後を追った。

住宅街はみな新しい家ばかりで、小さいながらも庭つきで中々に裕福な暮らしをしている様子がかがわれた。「MANABEって表

札出てる、ここですね!」

正吾がそう言うと春日は

「シイツ」と唇に指を当てた。

カーテンは下ろされ、中から人の気配は感じられない。

「留守なのかしら?」有明がそう言うと、家の中からカーテンを少し持ち上げこちらを見ている目があることを九尾が告げた。

春日はインターホンを押した。

しばらく待ったが人が出てくる様子はない。春日はもう一度押しして「すみません。我々は真鍋進さんの知り合いです。どうか話を聞いてもらえませんか?」

と声をかけた。

すると、奥の方からパタパタと小走りに駆けてくる音がして、ドアがガチャリと小さく開けられた。

「あなたたち、主人の居どころ知ってるの?」

春日は笑顔で

「はい、たった今ご主人とお会いしてきました」

と言うと、ドアは大きく開かれた。

「なんですって!?!とにかく中に入ってください。詳しく聞かせて有明は玄関を上がるなり、土下座して謝った。

「すみません!私のせいなんです…私のせいで真鍋さんがこんなことに…」

真鍋の妻はそれを見て、かなり動揺していた。

「ちょっと待って!真鍋の失踪にあなたが関わってるというの?」

有明はさらに頭を床にすり付け

「はい!私が真鍋さんを痴漢と勘違いしたばかりにこんなことに…すみません」と、平身低頭謝り、これまでの経緯をすべて話した。

「そうだったの…あの人、何も言わずいなくなったの。会社にも辞表を出してそのまま失踪よ。もしかしたら主人に好きな人が出来て私達を捨てたのかと思ってた」

真鍋の妻はホツとした表情を見せた。

「それで主人は今どこに？」

春日は言っていていいものかどうか迷ったがやはり言うことにした。

「二駅先の河川敷で雨露をしのいでます。」

これからご主人に会いに行きませんか？」

真鍋の妻は何度もうなずき、

「ええ、すぐに行きましょう。着替えを持っていきますわ。ちょっと待っていてくださいね」

そう言うと妻は居間をいそいそと出ていった。

「良かったですね、有明先生！真鍋さんもこれで元通りですよ」

「ええ、きつと喜ぶわね！問題は会社だわ。自分から辞表を出したとなると、取り消すのは難しいわ」

春日もそれには同意見だった。

「多分とり消すのは無理でしょう……すでに違う人がそのポジションについているでしょうしね」

みな明るい表情から一転、難しい顔になった。

「お待ちどうさま」

そのとき、真鍋の妻が居間に戻ってきた。

「では行きましょう！真鍋さんが首を長くして待っていますよ」

春日はそう言うと、駅に向かうため真鍋家を出た。

電車の中ではみな無言のままだった。

「着きましたよ。あの川沿いです」

薄曇りだった空はどんよりと重い雲が垂れ込め、雨粒がパラパラと落ち始めた。

川沿いのテントに行くリーダーがすぐに出てきて奥にいる真鍋を呼んだ。

「真鍋ちゃん！奥さんが迎えに来たぞ」

真鍋はバツが悪いのか少し不貞腐れた中学生のようになっそりと現

れた。

「あなた！何もいわず居なくなるなんて…ミクも私もどんなに心配したか…」

妻は両手で顔を覆い、声を出して泣き出してしまった。

それを見た真鍋は妻に近寄り背中を撫でた。

「良かったですね！有明先生。これでとりあえず真鍋さんは家に帰れますよ」

有明は涙を滲ませながらうなずいた。

妻が落ちつくのを待って、真鍋が口を開いた。

「すまなかつたな…心配かけて。でも見ての通り俺は元気だ。この人達もみんないい人ばかりでな…」

真鍋の妻はリーダーに向かって頭を下げた。

「主人がお世話になりました。おかげ様でこうして無事に迎えに来ることができました。ありがとうございます」

リーダーは照れくさそうに

「いやあとんでもねえ。こっちこそ真鍋ちゃんにはお世話になってばかりで…株も教えてもらってだいぶ儲けさせてもらいました」  
妻はキョトンとしている。

「株…ですか？」

リーダーはガハハと笑った。

「意外でしょ？こんなホームレスがつてね。でもね、結構金持ちのホームレスもいるんですよ。ここにいるのは自ら選んでホームレスになったヤツも結構います。ここから会社に通ってる人もいますよ」

そんな話をしていると、スーツを来て黒いカバンを下げたサラリーマンがやってきた。

「こんにちは吉田様」

「ああ、三菱銀行さん。こっちにどうぞ…すみません、ちょっと失礼します」

リーダーはペコリとお辞儀するとテントの中に銀行員とともに入っ

ていった。

「ハハ八吉田さんも忙しそうだな。洋子：俺はもう少しここにいるよ。会社は辞めてしまったしな。今考えると俺は逃げたかったのかもしれない：課長としての責任からも、一家の大黒柱としての責任からも：。少し時間をくれないか、俺は新しく生まれ変わりたいんだ。職が決まったら家に戻るよ：それまでは株で儲けた金を使ってくれ。お前の口座に振り込んでもある」

妻は思いがけない返事に愕然としていた。

「あなたにとつて私達家族は重荷だったの？」

真鍋は苦し気に

「お前達のことには愛している。とても大事な存在だよ。ただ少し俺に休暇をくれないか：すまん」  
妻はしばらく考え

「分かったわ：待ってる。あなたが自分で帰ってくるまであなたを信じて待ってるから」

妻はニツコリ真鍋に微笑んだ。

「ありがとう：ありがとう」

真鍋は妻を抱き締めた。

一行は真鍋を残して帰路についた。

有明は複雑な気持ちだった。

妻が迎えに行けばきつと一緒に帰ってくるだろうと思っていたのにここに真鍋は居ない。

「洋子さん、すみません…」

妻はフフフと笑った。

「いいのよ、あなたのせいじゃないわ。あなたのことはただのきつかけにすぎない：遅かれ早かれいずれこうなってたわ」

春日は言った

「きつと帰ってきますよ。真鍋さんは真面目な人ですから」

妻はうなずいた

「ええ…私もそう思うわ。真面目だからこそ思い詰めちゃったのよね…でもね、私はそんな不器用なあの人が好きなの。気長に待つわ…私も働こうと思ってるの。今度は私が家族を養ってもいいんだし、とにかくあの人と生きていきたいわ」

九尾はそれを聞いて

「素敵ですね。そういうご夫婦…羨ましいです」

妻はクスリと笑い

「人生山あり谷ありよ！だから面白いの」

と笑顔で答えた。

洋子を家に送り正吾達が学校に戻った時にはすでに雨は本降りになっていた。

「有明先生、お疲れ様でした。かつこよかったですよ！先生は全然言い訳しなかった。尊敬します」有明は照れて顔が真っ赤になった。

「町田くんたら、恥ずかしいじゃないの！」

「そういうところも可愛いですよ」

春日はサラリとそう言っただけ有明の肩をポンポン叩いた。

「とりあえず一件落着いですね？」

正吾は春日にそう言った。

「ああ…でも真鍋一家はこれからが始まりだ」

みなあの家族に想いを馳せた。

「どうか幸せに…」

弁ちゃん毘沙門天を見つける！（前書き）

毘沙門編が始まりました。ことう御期待！

## 弁ちゃん毘沙門天を見つける！

正吾は前を歩いている二人の姿を見て微笑んでいると

「もつ付き合つとるのかのう？」と弁天が聞いてきた。

「う〜んどうだろうね？二人とも受け身タイプに見えるんだけど…。どつちかが告白しないとカップルとは言えないんじゃないかな？」

「フム、有明もやつと自由になったのだから早く幸せになってもらいたいのが。そうであるう佐々木？」

弁天は有明の背後で疲れた顔をしている守護霊の佐々木誠之助に声をかけた。

「ハアそうですね。ワシも今回はいささか疲れました。中々に手のかかるおなごですわい。佐久間はよくやってくれたのですなあ。ああもう一度帰ってきてくれないかしらん」

「まあ！すっかり怠け癖がついてしまいましたね。気を抜いている場合ではありませんよ。有明先生は魔にとり憑かれやすい方ですからね。いつあなたの出番がくるかわかりませんよ！」

九尾は佐々木にそう注意した。

「これまたキツツイおなごじゃなあ。あんまりイケズ言っていると正吾さんに嫌われてしまうぞ！」

九尾はムツとした顔で

「正吾様はそんなお方じゃありません！ちゃんとわたくしの事分かってきてますもの。ね？正吾様〜」と言うと正吾にべったりと寄り添った。

「正吾も大変じゃのう」

弁天がニヤニヤしていると正吾がたずねた。

「弁ちゃんには恵比寿君がいるもんね。そういえばこのところ生き霊騒ぎで会ってないなあ。ごめんね弁ちゃん、寂しい思いさせち

「やったかな？」

弁天は慌てて弁解した。

「な、なにを言う！恵比寿なんて妾はなんとも思っておらんぞ。恋人じゃと言つとるのはあやつのはひとりよがりじゃ！」

「そうなんだ。じゃあ他に好きな神様いるの？」

弁天の顔はみるみるうちに赤くなった。

「そ、そんなのおらん！」

正吾は面白そうに

「ほんとかなあ？怪しい！その慌てようはますます怪しいぞと囃し立てた。

「もう知らん！」

弁天はプウツとふくれてフワフワ飛んでいってしまった。

「アハハ弁ちゃん照れちゃったね。九ちゃんは弁ちゃんの好きな神様知ってるの？」

九尾は首をひねった。

「そうですね…：そういうえば昔、トレジャーシップのメンバーと噂があったことがありました。ええと…：誰でしたっけ？」

そんなやりとりをしているうちに正吾達は家に着いた。

「ただいま〜！」

正吾は居間にいくとテレビをつけ、こたつに入った。

「正吾、最近どうよ？ギター弾いてるの？」姉の和美が興味津々といった顔で正吾に聞いてきた。

「うん、まあね。そのミカンとつてよ」

和美は段ボール箱からミカンを3つ取りだしこたつの上に置いた。読んでいたアイドル雑誌をペラペラめくり、正吾にオーディションの記事を見せた。

「ほら、ここ見て！あんたもそろそろデビューしないと歳くっちゃうわよ。最近はみんな小学生でデビューしちゃうんだからね！」

正吾は和美のららんと輝く瞳をつんざりした表情で眺めながら「俺はね、アイドルになるつもりなんてないよ！」

とはつきり宣言した。

「ええっ！？なんでよ。スターダストの社長にスカウトされてるんでしょ？」

和美は不満そうに正吾の足を蹴った。

「いたっ！痛いなもう。誰もつけるなんて言っていないだろう？」

まったく和美のヤツなに考えてるんだか…。

「俺はね、真のアーティスト目指してるの！だいたい俺の顔見てよアイドルなんてツラしてないでしょ？」

和美は正吾をまじまじ見ると

「そりゃあ美形とはいえないけどあなたは独特の雰囲気持ってるよ」と言った。

「それって誉めてる？」

正吾が聞くと、和美は真顔で

「もちろん誉めてるんだよ！」

と言ってくれた。

和美とは年子ということもあってずっと仲の良い姉弟関係を築いてきた。周りからはブラコンと呼ばれることもあり、それは心外であったが和美は正吾の自慢の姉である。和美はスポーツ特待生として私立の有名校に進んだ。

とくに取り柄のなかった正吾にしてみれば才能に恵まれた姉は頭のあがない存在であった。

「あんたに音楽の才能があったとはね。意外だったな。もうすでにあんたを認めてくれる人もいるんだから、頑張ってみなさいよ。応援するからさ！」正吾は嬉しくなって笑顔でうなずいた。

「ほら、今テレビに映ってる高崎伸って子もあんたとおなじ15歳だって。天才バッターでアメリカの大リーグも注目してるって言うてるよ」

テレビ画面にはとても中3とは思えない体格の高崎がバットを構え

ているシーンが映し出されていた。

ん？高崎の後ろに何かいる…なんだあれ？

「和美、高崎の後ろに何か映ってない？」

和美は目を細めじつとテレビ画面に食い入った。

「ん？なんにも見えないよ。見間違いじゃないの」

テレビでは高崎がホームランを打った瞬間が映しだされた。

「び、毘沙門！見付けたぞ！」

その時弁天は大声で叫んだ。

## 弁ちゃん毘沙門を見つける！近くて遠い人

正吾はブツとミカンを吹き出した。

「ちよつとく何やってんの！」

和美が正吾にティッシュペーパーを渡した。

「ごめんごめん、ちよつと驚いちゃって」

和美はいぶかしげに正吾を見た。

「ああ…うん。なんでもないんだ」

「そう？じゃあ私、宿題してこようつと」

和美は居間から出て行った。

「弁ちゃん、どういうこと？あの高崎の後ろに映ってるのが毘沙門天なの？」

弁天はじつとテレビ画面を見たままうなずいた。

「じゃあ高崎は毘沙門に選ばれた天才なんだね。俺なんてまだまだなのに高崎は成長が早いなあ」

弁天はチラリと正吾の顔を見て

「あれを見て少しは焦らんか！期限は一年と区切られておる。お前もしっかりせんと中途半端で終わってしまうぞ」

「そうなんだよな…。」

いつまでも弁ちゃんがそばに居てくれるわけじゃないんだ。チャンスは充分もらってるんだからそろそろ俺も始動しないと…。「そうだね。そろそろ進路も決めなくちゃいけないし、真剣に将来の事を考えてみるよ」

弁天は優しい目で正吾に

「そうじゃな。そろそろ世にできるきっかけを作らなくてはの！」と言い聞かせた。

「弁ちゃん…毘沙門君はどんな神様なの？」弁天は昔を懐かしむように遠い目をして語りだした。

「毘沙門はあの通りスポーツに秀でたものを発掘して天才に育てあ

げておる。我ら七福神はそれぞれが毎年1人これと思う人物を手助けしておるが、實際神がかり的な才能をみせるのは10人に1人出るかでないかといったところだな。中々に難しいものなのじゃ。我ら七人は天界ではトレジャーシップとしてバンドを組んでおったからいつも一緒におれたが人間界に降りてからはそうそう会えん。まあ、天照様が我らを召集する大晦日だけは会えるがのう」

正吾はフウンとうなずいた。

なんといつても神様なのだ、逢いたければいつでもあえるのかと勝手に想像していたがどうやら結構難しいらしい。

「じゃあ恵比寿くんにも教えてあげなくちゃ！毘沙門くんが見付かったと知ったら喜ぶんじゃない？」

「そうじゃな。喜ぶかどうかは微妙じゃが教えておいてやろう。正吾、早速じゃが明日カリンの家の倉で練習するでしょう。その時話す事にする」

正吾はウキウキと返事をした。

「了解！カリンさんと会うのも久しぶりだなあ」

それを聞いた九尾は少しムカついた顔を隣の襖からのぞかせて正吾に釘をさした。

「浮気したらただじゃすみませんことよ！」正吾はギョツとして振り向くと

「一緒に行くんだからそんな心配いらないでしょ？」  
と言った。

九尾は嬉しそうに丸くなって白い耳を倒している。

それをみた弁天はヤレヤレといった表情で正吾に言った。

「これではいつまでたっても人間の恋人は出来んのう」

正吾は笑って

「ハハハそうだね。まだ誰かに恋した事ってないんだよな。俺は臆病だから傷つくのが怖いのかも？もつと強い人間にならないと恋する資格はないんじゃないか？っていつも考えちゃうんだよ」

弁天はそう話す正吾をじつと見ていた

「正吾よ。恋とは考えてするものじゃないぞよ。知らぬうちに恋してて後からそうなのか!?と気付く。そういつもんじゃ」  
弁ちゃんも誰かに恋してるのかな?

「弁ちゃん、今恋してる?」

弁天は唐突にそう聞かれてギクツとした。

「わ、妾は…わからん。ずっとわからんままじゃ」

正吾はその様子を見てどうやら弁ちゃんには片想いの彼がいるらしいと察しをつけた。

「そっか…まあ弁ちゃんほど可愛い子はそうそっくないから大丈夫だよ。本気で口説けば断るやつはいないだろ」

弁天は照れくさそうにモジモジしている。

「そうか?ほんとにそう思うか?」

正吾はニッコリ微笑んだ。

「うん!そう思う」

正吾は力強く断言した。

そして次の日…

「久しぶりね。正吾くん!」

カリンは中学校の校門で正吾を待っていた。

「カリンさん!わざわざ迎えに来てくれたんですか?」

カリンは笑顔で

「そうよ。ずっと連絡ないから心配してたのよ」  
と口を尖らせた。

すれ違いざまに生徒たちが意味深な顔で二人を見ているのに気が付いた正吾はバツが悪そうにその場を離れようとカリンの手をとった。

「さあ、早く行きましょ!」

「ねえ、あれ町田君じゃないの?あの制服は聖アンナ学院よね。チカ、またライバル出現じゃないの?」

教室の窓から身を乗り出して様子を見ていた女子達は興味津々とい

った様子でチカの様子をうかがった。

「別にたいしたことじゃないわ。町田君のお姉さんも聖アンナ学院に通ってるからきつとお姉さんの友達よ」

チカはもう何度か街でカリンを見かけていたので別段驚かなかった。ポーカーの子ね…

今日は練習なのかしら？

町田君の練習、今度見せてもらおう。

彼はきつともうすぐマスコミに登場するようになる。手の届かないところに行く前に彼の心をしっかりと掴んでおきたい…

チカの想いも知らず正吾はカリンと恵比寿に徐々に会ってはしゃいでいた。

「恵比寿君、カリンさんの教育は進んでるの？」

正吾が聞くと

「いんや全然！全く俺の見込み違いだったんじゃないかとすつごく不安だよ」と恵比寿はまんざらウソでもなさそうにぼやいている。

「そうかあ。実はね、昨日テレビで毘沙門君を見つけたんだ」

それを聞いて恵比寿の顔色が変わった。

「な、なんだって！それで一体誰のトレーナーやってるんだ？」

「高崎伸っていう俺たちと同じ15歳の野球少年だよ。大リーグが注目してるくらいのが天才バッターだって」

恵比寿はしばらく考えこんでいて何も話さなくなった。

「どうしたの？恵比寿くん。何か問題でもあるの？」

恵比寿は重い口を開いた。

「ああ…すまん。ちよつと考え事してたよ」弁天は何か言いたそうにしていたが結局口を閉ざしたままだった。正吾は九尾に目くばせして小声でそつとささやいた。

「なんだか聞いちゃまずかったみたいだね。一体何があつたんだろっ？」

九尾は小さくうなずいて  
「きつとそのうち話してくださいませわ」と言って正吾をなぐさめ  
た。

弁ちゃん毘沙門を見つける！夢の階段（前書き）

毘沙門編といってもまだ実物は出てきません。期待した方ごめんなさい！正吾が出世しないと会えませんからもう少し先になるかもしれません

## 弁ちゃん毘沙門を見つける！夢の階段

正吾達は安西家の倉に到着すると重い扉をゆっくり開けた。

「この前掃除したからあんまりホコリはたたなくなつたね」

カリンは嬉しそうに正吾にそう言った。

「ここに来るのも久しぶりだなあ」

正吾が周りを見渡している間に九尾は一目散に二階に上がって行った。

「そうだった！ここは九ちゃんのお巣だもんね。久しぶりに家に帰ってきたというわけだ」と二人にニツコリ笑いかけた。

「そうだったのう。しかしここは妖怪の巣窟じゃ！またへんなものを連れてこんといいが…」

弁天がそうぼやいたそばから座敷わらしがポンポンと出現してイタズラをはじめている。

「ああ、また邪魔なのが来た。オラオラおまえら邪魔しないでちゃんとこいつらの演奏聞いてやってくれよ」

恵比寿がそう言うつと座敷わらし達はちよこんと座つておとなしくなった。

「よしよしい子だ」恵比寿はわらしの頭を撫で撫でしてやるとわらしはニコニコご機嫌にしている。

「じゃあ早速始めましょう！」

「準備OKです。ところで演奏前に言っておかなくちゃならないことが…」

「ん？どうしたの。何か問題でもあるのかしら？」

正吾はバツが悪そうな顔でカリンに話した。

「実は俺…楽譜読めないんですよ。だから俺が弾くのはすべてアドリブ、同じ曲は二度と弾けない幻の一曲ってわけです」

カリンは一瞬何を言われているのか分からずポカンとしたが、間を

おいて

「ええっ！？じゃあ私にもアドリブでその場で歌えっというわけ？」と困惑の表情を浮かべた。

「ハハハそうなりますね」

ちよつとちよつとハハハじゃないわよ！全くそんなの無謀もいいとこだわ！

カリンは呆れた顔で正吾を見ると

「そんなのダメよ。私には無理だわ！」

とふくれっ面になってしまった。

弁天はやれやれとため息をつく

「カリン、それはそれで面白いと思わんか？正吾は中々感性がよくてな。毎回楽しませてくれておる。カリンは好きに歌えば良い。正吾はそれに合わせ演奏するだけじゃ」

「簡単に言わないで！私にはそんな感性ないもの…。誰かの真似がよいとこよ。オリジナルなんて思いうかばない」

「やってみればいいじゃん！」

「えっ？」

恵比寿の隣にいた座敷わらしがニコニコしながらそう言った。

「おもしろそう！聴きたい聴きたい！歌って歌って〜」  
わらし達は囃し立てた。

恵比寿はニヤニヤしてその様子を眺めている。

「まずはテーマを決めてみよう。カリンさんなんにする？」

あくなんだかうまくのせられちゃってるな。正吾くんは何気にそういうの上手いのよね…。

「もう！負けたわ。わかった、やってみましょう。タイトルは…：そうねえ…：夢の階段はどうかしら？これからその階段を登っていくんですもの。今の気持ちにぴったりでしょ？」

正吾は力強くうなずいた。

「夢の階段？いいね！凄くいいよ。それでいこう」

正吾は振り返って弁天に声をかけた。

「弁ちゃんどうだい、いいタイトルだろう?」正吾は意味深に弁天の顔をのぞいてそっと耳もとでささやいた。

「その階段のてっぺんには毘沙門君が待ってるよ!」

弁天はポツと頬をピンクに染めた。

正吾は弁天にウインクするとカリンに言った。

「どうだい歌詞は浮かびそう?」カリンは紙にサラサラと歌詞を書き込んでいる。

「ちよつと待って…もう少しだから」

カリンはしばらくすると

「よし!出来たわよ」と立ち上がった。

「いい?じゃあ歌ってみる。笑わないでよね」

カリンは自分でリズムをとり、歌いだした。

「私はとつても優等生、ずっとずっとそうだった。親に誉められ先生からも信頼あつい生徒会長!でもね…でもねほんとは違うんだ、有名大学?そんなのやだ!有名企業?だからどうした?道は自分がつくるもの。そうでしょ?ほら夢の階段の上には輝く自分の姿見えてる。行こう勇氣出して、さあ後悔しないために」

カリンは一気に歌い上げ

「どう?どう?」と周りに聞いた。

座敷わらしは大爆笑で転げ回っている。

「ひ、ひどい!こら!笑わないでよう」

正吾はうくと唸り

「カリンさん、歌詞はいいと思う。気持ちがストレートに響いてくるいい歌詞だよ。だけどリズムがなあ…ちよつと俺のリズムで歌ってみてよ」

正吾がリズムをとり、それに合わせてカリンは歌いだした。

「おっ?さつきと同じ曲とは思えん!いい調子じゃ。なあ恵比寿どうじゃ?」

恵比寿はうなずいて

「ああ、いいかんじだな。もう少しアップテンポでいこう。あとは問題ない」

二人は演奏を終え、顔を見合わせた。

「うん！これでいこう」正吾はカリンの肩を叩いた。

「声、ずいぶんハリができましたね。恵比寿君の特訓の成果バツチリですよ！」

カリンは正吾に照れくさそうな顔を向け

「ううん。やっぱり君の音楽センスは相当ね。私の下手くそな歌詞をあれだけかつこよくアレンジしちゃうんだから参ったわ」と正直に誉めた。

「そういえば九尾はどこにおるんじゃ？せっかく正吾が演奏したのにのう。ファンクラブ会長はクビじゃな！」

「まあ！クビとはひどい。ここにありますよ。とつてもいいかんじだと土蜘蛛も申しております」

二階にあがる梯子の途中に腰掛けている九尾の後ろには黒くて巨大な蜘蛛がどっかりとしがみつき、正吾たちの方をギョロリとした目でじつと見ていた。

「うわあ！それ九ちゃんの仲間？」

九尾はヒラリと梯子から飛び降りた。

「はい！昔からの友達です。彼女もファンクラブに入るって言ってますよ」

土蜘蛛はあつという間に人間に姿を変えて階段を降りてきた。

ダイナマイトボディのセクシー美女だ。

「ヒエ〜！目のやり場に困るよ。まさか彼女も家に来るなんて言わないでしょ？」

土蜘蛛はウフフと笑って

「そんな事九尾が許すはずありませんわ。あなたが浮気しないかいつも見張ってるくらいですもの。でも私だってファンクラブ会員で

すから度々会いにいきますことよ！九尾、よろしいわね？」

九尾は

「まあ仕方ないわね。でも正吾様は私のもの、手出ししたら容赦しませんわよ！」と軽く睨んでみせた。

弁天は

「良かったのうファンは大切にせねばな！あとは人間のファンを増やさねば」

カリンはドンと胸を叩いた。

「それは任せておいて、私に考えがあるわ！」

正吾はこれからの展開に期待で胸をふくらませた。

弁ちゃん毘沙門を見つける！夢の階段（後書き）

カリンの歌う歌詞が思いつかずアップが遅くなりました。  
これからも歌詞に泣かされそうです

弁ちゃん土蜘蛛をマネージャーにする！

正吾はカリンにこれからの計画をたずねた。

「まずはこのデモテープをスターダストの社長に送るわ」

正吾はアツと声をあげた。

「い、いつの間に!？」

カリンはフッフと笑って

「まずはそれからね！」と言った。

「なかなかやるのう。ではそれまで少し活動の範囲を拡げておくとするか」

「では私にマネージャーをやらせて下さい」土蜘蛛が立ち上がった。

「まあ！土蜘蛛本気ですの？」

九尾が目を丸くして聞いた。

「ええ、せっかくこうして知り合えたんだから仲間になりたい。やらせてちょうだい」

「では決まりじゃな！頼んだぞ土蜘蛛。ところで人間界での名前はどする？九尾は九条狐鈴と名乗っておるぞ」

土蜘蛛は少し考えて

「私はやっぱり土蜘蛛でいいわ。じゃあ土蜘蛛美香でどうかしら？」

弁天はうなずいて

「まあよいじやろう。よろしく頼むぞ！」

土蜘蛛は嬉しそうに

「任せてちょうだい」と声を張り上げた。

「ところで土蜘蛛、その格好はどうかと思うわ。ボンテージファッションは行き過ぎじゃないの？」

九尾は先輩らしくそうアドバイスしたが土蜘蛛はサラサラの黒髪を揺らしながら

「これでいいのよ！インパクトあるからきつとみんな一発で私を覚

えてくれるわ。いい宣伝になるじゃない？営業の一環だと思ってちようだいよ」

と至って強気である。

「ところであなた達、人前でライブやったことあるの？」正吾はブンブン首を振った。

「ないない！今まで何回か人前でやったけどそれは神様たちが憑依して演奏したわけで俺たちはまだデビューしてないよ」

土蜘蛛はフンフンとうなずいて

「では学校で演奏してみましよう！まずは近場からです」と提案した。

「そうじゃなあ。どうじゃ？正吾」

正吾は

「大丈夫、やってみるよ！俺は前回1人で演奏したからね。問題はカリンさんかな？」とカリンの方をチラリと見た。

「わ、私だつて大丈夫よ！ところでいつやるの？」正吾は少し考えて「ちよつと有明先生にでも相談してみるよ」と答えた。

「そうなることやほり私も学校に潜入した方が良さそうですね。近くにいれば何かとお役にたてますよ」土蜘蛛はすっかりその気になっている。

「うゝん中学生にしては色っぽ過ぎる気がするけど？」

土蜘蛛はウフフと笑って

「制服きちゃえばそれなりに見えてくるものよ」と全く気にしない様子だ。

カリンはグラスにジュースを注いでみんなに配った。

「では！新マネージャー就任を祝して、かんぱい！」

そして次の日…

「おはよう、みんな！」正吾達の背後から呼びかける声に振り返った。

「土蜘蛛さん！」

はあく女の子って着る物でこんなに印象ちがうんだ！  
めっちゃめっちゃ清楚なお嬢様に見えるよ。

なんて美人なんだ。正吾がボウツと見とれていると九尾が思い切り正吾の耳を引っ張った。

「イタタタ！九ちゃん止めて〜」

「正吾様が土蜘蛛に見とれたりするからです。この浮気もの〜！」

「ギヤア！九ちゃんも可愛い！とっても可愛いから〜」

九尾はようやく手を放すと弁天に愚痴っていた。

「ほんと男ってどうしようもない生き物ですわよね！男なんてみんな浮気ものですわ〜」

弁天はハハハと豪快に笑い

「毘沙門はいつもクールで女共には目もくれなかった！男といえど人によるう？」

九尾はプイツと膨れて

「そうでしょうか？」とご機嫌斜めた。

正吾はフウとため息をつく、九尾の手をとり歩き出した。

九尾はやっと笑顔になりニコニコと歩き出した。

「ウフフ九尾はほんとに正吾さんが好きなんですわね」

土蜘蛛がそういうと弁天は

「羨ましいのう。妾は九尾のように可愛らしく甘えることが下手で

な…。土蜘蛛、お前はとうじゃ？」

と、たずねた。

「…そうですね。私は好きな人のためならどんなことでもします。

たとえそれが間違っていたとしても…そんな自分が怖くなる時があります」

土蜘蛛の厳しい横顔を眺めると弁天は少し心配になった。

どうやら土蜘蛛のお相手はちと問題があるようじゃの…

難しいものじゃな。弁天はこの神秘的な美しい妖怪をじっと見つめ

た。

「町田！それに九条さんも。おはよう」  
声をかけてきたのは篠原であった。相変わらず貧乏神を肩に乗せている。

「おはよう！篠原、貧乏神さん」

正吾はパツと九尾の手を放した。

「ところで彼女は？」篠原は土蜘蛛が気になって仕方ない様子だ。

「彼女は…土蜘蛛美香さん。俺とカリンさんのマネージャーなんだ。  
今日からうちの中学校の生徒だ」

篠原はポウと頬を染め

「篠原です。どうぞよろしく」  
と頭を下げた。

土蜘蛛はニツコリと極上の営業スマイルで

「こちらこそよろしく」と頭を下げた。

## 弁ちゃん土蜘蛛をマナージャーにする！小悪魔の降臨

どうやら土蜘蛛は篠原の恋心に火をつけてしまったようだった。貧乏神はそんな篠原の様子に眉間を寄せていたが何も言わなかった。

「美香ちゃんて呼んでいいかな？」

篠原は照れながら美香の横顔をのぞきこんだ。

「ええ、もちろん！」篠原はすっかり鼻の下を伸ばしている。

こりゃあクラスの男共も大騒ぎだな。

正吾はなんだかウキウキしてきた。

みんなの反応が楽しみだな。

「なんじゃ正吾？ニヤニヤして」

「弁ちゃん、有明先生や春日先生にも美香ちゃんを紹介しようよ。俺たちの仲間なんだしさ」

「そうじゃな。佐々木がちゃんと仕事しておるか確かめておきたいしう。まさかまた怨霊どもにとり憑かれてはおるまいな？」

九尾はその言葉に

「大丈夫でしょう。あの陰陽師がそれとなく霊を抜っているようです。」

と言った。

「フム、中々に役に立つ男だな」

九尾はその言葉を聞いてフフフと笑って

「弁天様の陰陽師嫌いも少しは治りましたか？」

とたずねると弁天はプイツと横を向いてしまい。

「いいや！だいつきらいじゃ」

と言い張っている。

まったく意地っ張りな神様だこと…

九尾は弁天をからかうのが楽しくてならない。ほんに可愛らしい！  
「何を笑つとる！」

弁天の膨れっ面をみるとますます笑えてしまう。

「す、すみません。あんまり弁天様が可愛らしくてつい…ウフフ」  
「ほら、弁ちゃん何してんの。おいてくよ！」正吾が振り返ってそ  
う叫んだ。

正吾たちは学校に着くとまずは保健室に向かった。

春日は机でのんびりとコーヒーを飲んでいるところだった。

「春日先生おはようございます！」

春日は顔をカッブから離して正吾たちの方に振り向いた。

「おはよう。なんだか怪しい妖気が流れ込んできたと思ったら君達  
か」

正吾はニヤニヤ笑って

「有明先生じゃなくて残念でした！」

と言うと、春日は

「まったくだよ」

とメガネの奥の目を細めた。

「ん？その美人は誰だい？」

美香は前に出てきて挨拶した。

「今日からこの学校にお世話になる土蜘蛛美香です。どうぞよろし  
くお願いします」

春日はじつと美香を見つめると

「よろしくね」と握手した。

正吾は彼女が正吾とカリンのマネージャーになった事を話した。

「ほう、とうとう始動したというわけだね」美香は早速学校でライ  
ブをしたいと春日に話した。

「いいんじゃないかな。沢山の人に聴いてもらうといいよ。結構口  
コミで広がったりもするからね。そうだなあ…来週、卒業生を送る

会があるだろう？そこでやってみちゃどうだい」

正吾は目を輝かせた。

「いいんですか？ぜひやりたいです」

春日はうなずき

「それにはまず生徒会に許可をとらないとね。君から直接話した方がいいだろう」

「わかりました。会長の小暮君に話してみます」

正吾達は保健室を出て教室に向かった。

「私は職員室に行くから先に行つててちょうだい。後で会いましょ  
う」

美香はそういうと廊下の角を曲がり颯爽と歩いていった。  
すれ違ふ生徒達が次々と振り返つていく。

「美香ちゃんの実在感はん端じゃないね！すぐにファンクラブが  
来そうだな」

正吾がそういうと弁天は

「昔から人間に化ける場合はかなり美女と相場は決まつとる。やは  
り美人の方が何かと便利だからのう」  
と言つた。

「どんな姿にもなれちゃうわけだ」

弁天は

「もちろんじゃ！だから我々はその者の姿には興味はない。問題は  
その魂じゃ。人間はよく外見も気にするようじゃがその気持ちはよ  
くわからん」

うーんでもやっぱり人間はそうもいかないよな。とりあえず心配な  
のは野郎どもの美香ちゃん争奪戦と女子からの妬み&いじめかな…。

九ちゃんはあの天然ぶりでなんとかうまく溶けこんじゃったけ  
ど美香ちゃんはどうかだろう？

まあ俺たちがそばにいるから大丈夫だろう。

「正吾、何を考えこんでおる？」

正吾はハツと我にかえった。

「ああ…なんでもないよ。さあ、行こう」

正吾が席に着くと、すぐに篠原が寄ってきた。

「町田、美香ちゃんは？」

「今、職員室に行ってるよ」

篠原は嬉しくてたまらない様子だ。

「どこの席かな？このクラスなんだろう？」

正吾はうなずいた。

「うん。たぶんね！」

その時チャイムが鳴り担任が教室に入ってきた。

「きりーつ、礼、着席」

あれ？美香ちゃんがない！

「おはよう。では出席をとるぞ、相原！」

「はい」

「伊東！」

「ハイ」

おいおいちよつと待ってくれよ。

「せ、先生！」

「ん？なんだ町田？」

「あのう。転校生は？転校生はこのクラスじゃないんですか？」

担任は笑って

「ああ、転校生なら隣のクラスだぞ！がっかりしたか？」

正吾は少なからずショックであった。

そんなの妖術でなんとかするのだろうと思いきんでいたのだ。

「そ、そうですね…」篠原の叫びだしそうな顔がチラリと見えた。

美香ちゃん大丈夫かな？

正吾が心配しているちょうどその頃、隣のクラスでは美香の自己紹介が始まっていた。

「土蜘蛛美香です。親の仕事の関係ですとアメリカにいました。どうぞよろしく願います」

美香がペコリと頭を下げると男子達はピュウツと口笛を吹いたり拍手したり大騒ぎだ。

女子達はそのはしゃぎようをみてふて腐れている。

その様子を一番後ろの席から生徒会長である小暮はじつと観察していた。

面倒が一つ増えたな…ボソリとつぶやき興味なさそうに教科書にはさんだ雑誌に目を移した。

「小暮！小暮聡」

「は、はい！」

担任に名前を呼ばれ聡は顔を上げた。

「土蜘蛛はアメリカから来たばかりだ、生徒会長のお前が色々と彼女にこの学校の事を教えてやってくれ頼むぞ」

「わかりました」

担任は小暮の隣の机を指差し

「じゃあ、席はあそこだ。今日は教科書を見せてやってくれ」

土蜘蛛は小暮の隣に腰をおろした。

「よろしくね小暮君」

「お、おお！よろしくな」

美香は何人かの鋭い敵意を感じとったが素知らぬふりで自分の机を小暮の机にくつつけた

「ごめんね。教科書見せて」

「ああ…どうぞ」

ウフフ楽しくなりそうね。

美香の髪から花の甘い香りができてきて小暮はクラクラしてきた。

参ったな…これじゃエロ本も見れないぜ。  
小暮はフウと小さくため息をついた。

## 弁ちゃん土蜘蛛をマナージャーにする！ナイト決定

美香は小暮の教科書をのぞきこむふりをして小さな声で話しかけた。「小暮君、生徒会長だったのね。ちょうどいいわあなたにお願いがあるの」

小暮は少し面食らった。

さすがに帰国子女…物怖じしないね。

小暮は

「ふうん。なんだい？」

とたずねると

「あなたの彼女にしてくれない？」

とニコリと微笑んだ。

「……え？もう一回言ってくれる？」

「あなたの彼女にして欲しいの！考えといて」

小暮はバサリと教科書を落とした。

「こら、小暮！土蜘蛛にみとれとらんで教科書読んでみる。3行目からだ」

小暮は動悸を抑えて落とした教科書を拾いあげた。

小暮は教科書を読み上げながらこの大胆不敵な少女に興味をもちはじめた自分に苦笑した。

こいつ…面白いじゃん！

「よし、いいだろう。続きを吉田！読んでみる」

小暮は椅子に座ると美香の涼しげな横顔を眺めた。

まあ美人ではあるよな…しかし、どういうつもりだ？

小暮は美香の腕をつついた。

「おい！なんのつもりだ？まさか一目惚れなんてわけじゃ…ないよな」

美香はチラリと小暮をみると

「嫌なの？」と顔色一つ変えずに聞いてきた。

「俺達、今会ったばかりだぜ？いいのかよ、俺とんでもないやつかもよ？」

美香は可笑しそうに

「とんでもないやつだったらそんなこと自分から言わないんじゃない？」と言った。

「ふりだけでも構わないわ。私の彼氏だつてことにしといてくれな  
いかしら？」

やっぱり俺に惚れたわけじゃないのか…

小暮はちよつとがっかりしたが

「うん。それなら構わないよ。でもその訳を教えてくれ」と真面目な顔で美香に言った。

「それは、しばらくすればわかるわよ。でもそうしてくれると色々助かるわ」

小暮はなんとなくスッキリしなかったが引き受ける事にした。

「まあ別に彼女もいないし、構わないよ」

美香の顔がパアツと明るくなった。

「ありがとう！嬉しいわ。じゃあ早速今日は一緒に帰りましょう」  
変な事になったな。

ついコイツ…美香だっけ？美香のペースにはまっちゃったよ。

ちよつと退屈してたとこだからいいけどさ。

授業が終わって休み時間…

美香の机の周りに男子達が詰めかけてきた。

「ねえねえ美香ちゃん！アメリカってどの辺にいたの？」

美香は一応愛想よく

「カリフォルニアよ」と適当に答えた。

「何かスポーツとかやってる？」

「いいえ。私、運動は苦手なの」

男子は一樣に相槌をうち

「ところで彼氏はいる？」とすかさず篠原が聞いた。

「ええ、いるわ」

男子たちは皆肩を落としてがっかりしている。

「もしかしてアメリカ人？」

篠原は美香の彼氏がアメリカにいるなら、まだ自分にも可能性はあると思った。

「いいえ、この学校にいるの」

「ええ〜!？」

これを聞いて女子達も集まってきた。

「ウソ！幼馴染みとか？」

生徒会副会長をしている山崎萌が追及してきた。

美香はニッコリ笑って隣にいる小暮の腕に手を回した。

「うっん。小暮くんが私の彼氏よ。実はさっき告白されちゃった」

「なんだと〜！マジかよ。ソッコ〜やられたな！」

男子達は小暮の手の早さに地団駄踏んでくやしがっている。

篠原はショックで呆然としていた。

「そ…そんな！クラスが違ったばかりに…一足遅かったか。でもまさかそんな。小暮のやつ！抜け駆けだぜ」

萌が小暮を睨み付けながら

「それ本当なの？聡！」

と問いつめた。

「ん?…ああ、まあな」

萌はその言葉を聞くと凄い形相で

「サイテー！」と叫んでくるるときびすを返し、女子達と去っていった。

アチャ〜。女子達を敵に回しちゃったかな？  
しっかしコイツの考えがいまいちわからん！

篠原は呆然としたまま自分のクラスに戻っていった。

「あつ篠原、どうだった美香ちゃんみんなと仲良くしてたか？」

正吾が聞くと、篠原は机に顔を付けて返事もしない。

その様子にこれは何かあったな？と勘づいた。

「おいおいどうしたんだよ！何があったんだ？」

正吾が篠原の背を揺すぶると小さな声で

「やられた…」と言った。

「なんだよ、何がやられたんだ？」

「…小暮が美香ちゃんに告白した。それで美香ちゃん小暮と付き合  
うらしい」

正吾は最初何を言ってるのか理解できなかったがしばらくして

「エエエ！？」と絶叫した。

や、やるな。小暮！

「いやあ。さすがに生徒会長、ソッコーだね。まああれだけの美人  
だからな。残念だったね篠原君！」

篠原はむっくりと起き上がった。

「なんか変だ…いくらなんでも早すぎる！俺諦めないからな」

ぶーたれる篠原の肩で貧乏神がヤレヤレといった顔で座っていた。

弁天は貧乏神に

「恋の病にとりつかれたな。しばらくは何を言っても無駄じゃろう  
と声をかけた。

「しかたありませんね。でも相手が悪すぎますわ」

弁天は貧乏神の肩をポンポン叩いてなくさめた。

そして放課後：

正吾達は隣のクラスに美香を迎えに行った。

「美香ちゃん！一緒に帰りましょう」

こりんが声をかけると美香は小暮に

「じゃあ帰りましょう」と声をかけている。

小暮は少し照れた様子で正吾達の前に現れた。

「彼も一緒にいいかしら？」

「どうやら篠原の話は本当らしいな。」

正吾は二人の様子を見てそう感じた。

「もちろんだよ！一緒に帰ろう」

九尾はさっそく美香にたずねた。

「ねえ！二人が付き合う事になったって本当なの？うちのクラスでも大騒ぎしてたわよ」美香はシラツと

「本当よ。ねえ聡？」

小暮は美香の隣で苦笑いしながら

「ああ。そうなんだ」

と答えた。

「小暮くん、これから大変よ！美香は昔からスツゴクモテたんだから。美香に近づく男達を追い払うナイトに指名されたからにはしつかり姫を守ってね！」

小暮はこりんの言葉になるほどなあ。と納得した。

俺は面倒な男達から口説かれるのを防ぐ防波堤なわけね！了解。でもなんでかな？なんで俺なんだ？

小暮は美香の長い黒髪が揺れるのを見つめながらそう考えていた。

## 弁ちゃん強敵出現！

美香は小暮に例の話を持ちかけた。

「小暮君、私実は町田君達のマネージャーやってるの」

「マネージャー？」

美香はうなずいた。

「ええ、バンドのね！」

小暮は驚いた様子で正吾をどついた。

「ええっ？町田そんな活動してたんだ。知らなかったよ」

こりんは胸を張って

「正吾様は芸能プロダクションからスカウトされてるんですよ」

正吾は恥ずかしそうに

「いやいやまだ大した活動してないんだけどさ」とうつむいてしまった。

「そついやあクラスの女子がお前の事、テレビで観たって言ったな。てつきり見間違いだとばかり思っていたよスゲーじゃん！」

正吾は顔を赤くしてモジモジしている。

「それでね。今度の卒業生を送る会で演奏したいんだけどいいかな？」

そう言うと美香は小暮の顔を覗きこんだ。

「そりゃあいい！ぜひプログラムに入れよう」

小暮は気持ち良くOKしてくれた。

「いいの！？やった。カリンさんにも知らせてやらなくちゃ」

正吾が浮かれていると小暮がたずねてきた。

「カリンさんて？」

「ボーカルの女の子でさ。女子高生なんだ」

「へえ。町田って結構交際範囲広いなだね」

「そんなことないさ。でもライブかぁ。楽しみだな！美香ちゃん、

演出考えといてよ」

「うん！任せておいて。ねえ？こりんちゃん」

「はい。私、衣装を担当しますわ。裁縫は得意なんです」

「じゃあ、あとは本番まで練習あるのみだね」

正吾は早速カリンの携帯に、これから倉に練習に行くとメールを入れた。

「じゃあ僕とこりんちゃんはカリンさん家に行くよ。美香ちゃん達はどうする？」

美香は小暮に

「私はマネージャーですものお伴しなくちゃ！小暮君また明日ね」と言つて手を振った。チエツと一緒にどうお？とか聞かないのかよ…小暮は内心がっかりしたが

「おう！じゃあまた明日な」と言つて交差点を渡つて行つた。

「フム。土蜘蛛よ、あやつがお前のターゲットか？」

弁天の問いに美香はうなずいた。

美香ちゃんも小暮を天才に育てるつもりとか？

正吾は二人の会話に耳をそばだてた。

「正吾様！盗み聞きなんてはしたないですよ」

こりんは正吾のほつぺたをつねりあげた。

「イタタタ！はいはい。それよりどんな衣装作るつもり？」

正吾がそつたずねるとこりんはウーンと唸り、美香に相談した。

「どんなイメージにしようか？」

「そうねえ。ゴシックホラー風はどうかしら？」

こりんの目はキラキラ輝いた。

「それ、いいかも？正吾君はドラキュラ風の衣装でカリンさんはゴスロリでメチャメチャ可愛いの作ってあげる！」

カリンはすでに倉で発声練習をしていた。

「カリンさん、お待たせ！」

「遅かったね。こっちはもう準備OKよ！」

カリンと正吾が練習している間、美香とこりんは衣装の打ち合わせを済ませた。

「デザインはこれで決定ね！」

美香がそう言うところりは

「了解、早速とりかかるわ」と倉の二階に上がって行った。

「正吾君、私用事を思い出したから出掛けてくるわね」

「ああ、了解！行ってらっしゃい」

美香は倉を出てまた学校に戻って行った。

校門からは部活動を終えた生徒達が次々と出てきた。すでに薄暗く  
なった校舎は人気もなくなりすっかり静まりかえっている。

美香は廊下を一人足音を忍ばせながら歩いていた。

廊下の突き当たりのドアをガラリと開けると暗闇の中から緑色の光  
を放つ円陣が目に飛び込んできた。

「土蜘蛛か？」

「はい。御主人様」

「うまく潜入できたようだな」

美香は静かにうなずいた。

「これを見る！人間の憎しみ、哀しみ、妬みの炎が燃え盛っている。  
あの方の復活もそう遠くないはずだ」

土蜘蛛はそう囁く男の膝にもたれかかった。

「畏は仕掛けたか？」

「ええ。生け贄になる者は決めました」

それを聞き、男は満足そうに美香の髪を優しく撫でた。

「土蜘蛛よ、これを持ってゆけ」

「これは？」

美香の手のひらには小さな人形が置かれた。

「それに息を吹きかけてみる」

美香は言われるままにフウツと息を吹きかけた。

するとその人形はピクリと動き出し、あっという間に毘沙門天の姿になった。

「こ、これは？」

男はふふふと笑い

「これは私の言う通りに動く操り人形だ。おとりに使うがいい」

美香はうなずき、毘沙門天の操り人形を自分の肩に乗せると姿を消した。

## 弁ちゃん強敵出現！仕掛けられた罠

正吾達は練習を終え満足気に座敷わらしの頭を撫でた。

「どうだった？少しは上手くなったかな？」わらし達はダルマのような体を弾ませながら

「チョピツとだけ！チョピツとだけ！」とケタケタ笑っている。

「アハハハわらし達は正直だな」

正吾がトホホといった顔でカリんに視線を送ると、カリンは

「上手くなってるんだからいいの！焦らないでいきましょうよ」と正吾を励ました。

「うん。分かったよ。そういえば美香ちゃんなんの用事かな？戻って来ないね」

こりんはウフフと意味深に笑い

「きつと小暮君のところじゃないかしら？」と言った。

「土蜘蛛は昔から男をたぶらかす悪い癖があるでな。小暮とやらが心配じゃ」

弁天の心配をよそにこりんは歓声をあげた。

「出来ましたわ！」

皆こりんの早業に驚いた。

「もう出来たの？見せて！」

カリンは黒いベルベット生地ワンピースを身体に当ててみた。短いですその部分からレースが覗き、カリンの足をさらに細く優雅にみせていた。

「とっても可愛いわ！ありがとう」

こりんはニツコリと微笑んだ。

「どういたしまして。正吾くんのもちゃんと作っておくわね」

正吾は

「あんまり派手にしないでよ」と釘をさした。

「わかってるわよ」

こりんは正吾の寸法を計り

「今日はここまでね」と正吾を解放した。

「さて、もう外も真っ暗じゃ。帰るとするかの」弁天はそう言うと正吾の肩によじ登った。

「ああ、やっぱり緊張するな…でもさ最近はその緊張も楽しめるようになってきたよ」

弁天は嬉しそうに

「それは頼もしい発言じゃな。程よい緊張は良い演奏につながるものじゃからな」

弁天と正吾は本番を前に落ち着かない様子で自宅に帰って行った。

そして卒業生を送る会当日…

「ええっ！？ホントにこれ着るの？」

正吾はこりんの作った衣装を見てギョツとした。

「そうよ。素敵でしょ？カリンさんの衣装にあわせてドラキュラ伯爵イメージでゴージャスに仕上げたわ！何か文句でもあるの？」

文句なんて言わせないって態度ですけど…

「イヤアお疲れ様…。す、凄く凝ったつくりだね…。でもさ…このマントだけは…無くてもいいんじゃないかな…なんて」

こりんはマントを広げ

「何言ってるの！これは小道具としても絶対必要なの。舞台上でトレジャーシップと呼ばれたらゆっくりマントを広げて中からカリンさんが出てくるって演出なんだから。」

了解？」

正吾はしぶしぶ

「了解」とつぶやき弁天に話しかけた。

「弁ちゃん、グループ名貰っちゃったけどほんとによかったの？」  
弁天はニツコリ笑って

「妾は嬉しいぞ！その名を汚さぬようしっかり頼む」と答えた。

「お待たせ！正吾君。緊張してない？大丈夫？」

カリンが舞台衣装を身につけて現れた。

「俺は…ちよつと緊張してるかも。」

でも舞台にあがっちゃえば大丈夫だよ」

舞台袖から小暮がやってきた。

「二人ともきまつてるじゃん。こりんちゃんセンスいいね！」

こりんは鼻高々といった表情だ。

「さあ、次が出番だ。頼んだよ！」

正吾はゴクリと唾をのみこんだ。

会場のライトは全て落とされ真つ暗な闇の中、マントでカリンをく  
るんだ正吾はまるでコウモリのように見えた。

青白いスポットライトがポツと正吾を照らしゆつくりとマントを開  
いてゆく、すると目を閉じてまるで人形のようなカリンが現れた。

正吾はカリンを横抱きにしてキスするふりをする。

するとカリンは人形から少女へと変化を遂げ動き出した。

マイクを持ち夢の階段をアップテンポで歌っていく。正吾は揚羽を  
掻き鳴らし、生徒達を音楽の渦に惹きこんでいった。

美香は舞台袖にひっそりとたたずみ、その様子を冷たい表情で眺め  
ていた。

「そろそろお前の出番よ」

美香はポケットから人形を取り出すとフウツと息を吹きかけた。

「毘沙門天、お前の相手は生徒会長の小暮聡だ。まずは弁財天に近  
づき信用させろ！よし、行け！」操り人形の毘沙門天は司会者席に  
いる小暮の肩に跳び乗った。

小暮が何か気配を感じて振り返るその首元に毘沙門は小さな指先を押し付けた。

すると一瞬緑色の光が輝き、首元には焼き印のようなアザが出来た。「聡、俺はお前の守り神だ。これからは俺の言うことを聞け！そうすればお前は歴史に名を残す天才となるだろう」

聡は魂が抜けたような表情でうなずいた。

美香は舞台裏に行きレバーの一つに手をかけた。

「さあ、これからが本番よ」

体育館の後ろの壁際で春日と有明は二人のライブを感慨深げに見ていた。

「あの恥ずかしがりやで引つ込み思案だった町田くんがみんなを前にあんなに弾けてる！成長したわね」

有明の言葉に春日はクスリと笑って

「彼は神に選ばれし者ですからね」と言った。

「えっ？なあに聞こえないわ」

会場全体が地響きするほどの音の波にのみこまれ春日のつぶやきはかき消された。

## 弁ちゃん強敵出現！毘沙門天の過ち

美香は舞台の二人がステージのちょうど中央に来たのを見計らいレバーを引き下げた。

トレジャージップの看板はカリンの頭上から真っ逆さまに落ちてくる。

会場から

「危ない！キヤアアー！！」と悲鳴があがったがカリンは脚がすくみ、その場に凍りついた。

舞いあがる埃の中からカリンに覆い被さるように倒れている小暮の姿が現れた。

正吾は顔面蒼白になりながら小暮の背中から看板をとりのけた。

「小暮！小暮しっかりしろ！」

舞台上に駆けつけた春日は正吾に声をかけた。

「町田、ゆすつちゃダメだ。そつと安西を引き出そう！後は救急車が到着するのを待ったほうがいい」

「わ、わかりました。カリンさん！カリンさんしっかりして！」

「う…一体何がどうしたっていうの？こ、小暮くん？」

カリンは自分に被さる小暮を見てすべてを悟ったようだった。

正吾と春日は生徒達を取り巻く中、そつとカリンを小暮の体の下から引き出した。

あまりの出来事にすつかり放心状態の恵比寿もやつと我に返り、カリンに

「バカバカ！なんでよけないんだ！」と逆ギレ気味だ。

引き出されたカリンの背中に何か貼りついている。

「う…参ったぜ！小暮、大丈夫か？」

ムツクリと立ち上がったのはなんと毘沙門天であった。

「び、びび毘沙門！？」

恵比寿が叫ぶと弁天が駆けつけた。

「恵比寿！今…今なんと？」

毘沙門は弁天の顔を見るとニツコリと笑いかけた。

「弁天！久しぶりだな」

弁天はこの状況がのみこめずしばし呆然とした。

「どうした？挨拶も無しか？」

恵比寿は無然とした顔で突然現れた毘沙門にたずねた。

「おまえ…どうしてここにいるんだ？」

ちょうどその時、救急車が到着し、人混みをかき分けタンカが運びこまれた。

救急隊員が手際よく小暮をタンカに載せると周りを見渡し声をかけた。

「一緒に行かれる方は？」

春日が手をあげた。

「保健医の僕が行きます」

救急隊員はうなずいて

「では行きましょうか」

タンカはゆつくりと静かに持ち上げられ進んで行った。

毘沙門は小暮の上に跳び乗ると見送る弁天と恵比寿に

「また後でな！」と言い残して救急車の中に消えて行った。

「毘沙門のヤツ…また悪いクセが出たようだな」

恵比寿がつぶやくのを弁天は苦々しい思いで聞いた。

「カリンさん、ケガはない？」

正吾はカリンの額から血が出ているのに気付きハンカチを渡した。

「私は大丈夫！かすり傷よ。小暮くんが心配だわ。一体どうしてこんなことに？」

正吾は後ろに片付けてある看板に目をやって

「どうやら重みに耐えられなかったみたいだ…小暮、大丈夫かな？」

正吾が表情を曇らせると弁天が肩をトントン叩いて

「大丈夫じゃ！毘沙門がついておるでの」と正吾を慰めた。卒業生を送る会はその後続けて行われた。

「残念でしたわね。とつても盛り上がりましてましたのにこりんがそういうのに」

「仕方ないさ。それより小暮のケガが大したことなくて良かったよ。春日先生がすぐ連絡してくれたんだけど、どうやら背中 of 打撲だけで済んだみたいだ」

学校の帰り道、正吾達は小暮の見舞いに病院に寄ることにした。

「弁ちゃん、毘沙門くんの事だけど…どうして小暮についてるの？この前テレビで見かけた時は高崎伸のトレーナーやってるようだったけど？」

弁天は正吾にそうたずねられ困った表情を浮かべた。見かねた恵比寿が吐き捨てるように言った。

「アイツはそういうヤツなんだよ…作戦なんだ。俺達は1人を選び全力でその人間をサポートしていく。それでも神がかりの天才なんてそうそう出るもんじゃない。そこでヤツは考えた…二人育てて互いに競わせ更に上達を促そうとな！結果1人は天才となり、もう1人は踏み台となって消えていく。俺は嫌だね、そんなやり方認めない！」

弁天は哀しげにうつむいてしまった。

「じゃあ毘沙門くんは高崎伸と小暮聡を競わせるつもりなんだ…高崎伸はもうすでに有名人だろ。わざわざ無名の小暮をぶつけなくてもいいんじゃないかな？」

恵比寿はフンと鼻を鳴らした。

「だからこそ…だろ？多分高崎は今伸び悩んでるはずだ！当たり前だよな。もうすでに有名人で周りからもチヤホヤされてる。俺は凄いやつだって自分でも思ってるだろ。そこで突然現れた無名のヤツにコテンパンにされたら…どうだ？目を覚ますだろうよ。自分の未熟さに…さ」

正吾はそれを聞いて思わず唸った。

「ウーンなるほどね！と…いうことは小暮自身も実は秘めた才能の持ち主つて事だね。場合によっては高崎が踏み台になる可能性もあるつてわけだ！」

恵比寿はフウとため息をついた。

「まあな！もしそうなたとしても、それはそれで大変だぜ。実際それで失敗してるわけだしな…アイツ何考えてやがる」

恵比寿は頭を抱えこんでしまった。

「…なんだか色々あつたみたいだね」

正吾は恵比寿の様子にただならないものを感じた。

「正吾よ…後で妾が話す。今はそつとしておいてやれ」

弁天の言葉に正吾はうなずくより他なかった。

## 弁ちゃん自縛霊を退治する！

小暮が入院したのは町で一番大きな総合病院だった。

受付で部屋を聞き、エスカレーターを上がり一番端の部屋のドアをノックした。

中からは話し声が聞こえてくる。

「誰か先客がいるみたいだね」

「ええ、女の方がいらしてるようですよ」

正吾とこりんは顔を見合せた。

「お邪魔しまゝす。具合はどうだい？」

正吾の問いかけに照れた様子で小暮が答えた。

「大丈夫だよ。悪かったね。心配かけて」

カリンはすまなそうに

「私の代わりにケガさせちゃったわね。ごめんなさい」と頭を下げた。

「気にしないで！君にケガなんてさせちゃったら正吾に殺されてたよ。君たち付き合ってるんだろ？ライブ最高だったもんね…息もピツタリ、最高のコンビだね！」

こりんはその言葉を聞き膨れっ面になった。

「正吾様ったら、それは間違いだって説明してください！」

正吾はほっぺたをポリポリ掻いて苦笑いを浮かべた。「それは誤解だよ。小暮こそこんなに可愛い彼女がいるなんて知らなかったよ」

正吾は、ベッドの端にひっそりとたたずんでいるショートカットの女の子に会釈した。

「ああ、彼女とはまだ知り合ったばかりなんだ。この病院に入院してる。遥さんだ」

遥はうつすらと微笑んだ。

「おい！お前、いい加減にこの部屋から出ていけ。目障りなんだよ」

小暮の頭の上で毘沙門が怒鳴った。

「毘沙門！いいじゃないか。遙さんはただ遊びに来てただけだよ。そんなに邪険にしたら可哀想だろ！」

小暮は遙の悲しそうな顔を見るのが嫌だったが毘沙門はお構い無しに悪態をついている。

「それがコイツのためでもあるんだよ！この世の未練を増やすような真似はやめてくれよな…じゃないとこいつ、いつまでたっても昇天出来ないぜ！」

正吾はその言葉にギョツとした。

「えっ？じゃあ君つてもしかして？」

弁天が呆れた声で正吾に言った

「わからなかったか？この者はとうの昔に死んでおる」

正吾は口をあんぐりあけたままうなずいた。

「す、凄いな全然わからなかったよ。でもおかしいなあ…霊と人間の見分けはつく自信持ってたんだけどね」首を捻る正吾にカリンが言った。

「それだけ霊力が強いってことじゃないかしら？」

毘沙門はニヤリと笑い

「察しがいいな。その通りだ！恵比寿、今回の見立てはなかなかだ。今度こそ天才をつくれるんじゃないか？」恵比寿はその言葉にキレた。

「うるせえ！てめえに言われたかねえぜ！二兎追うものは一兎をも得ずを地で行くようなヤツだからなお前は」

こりんは見かねて

「ちよつと怪我人を前に仲間割れは辞めてよ！続きをやりたければここから出て行ってよ二人とも！」と声をあげた。

「そうですよ！小暮くんは私が看てますから皆さんはロビーでもお話してきてはどうですか？」

遙がそう言つと皆、ダメだこりゃあ…と肩を落とした。

弁天は

「とにかく早く退院した方が良さそうじゃな。このままでは小暮はここから出られなくなる」と皆に伝えた。

小暮は不安そうにたずねた。

「それはどうして？」 毘沙門が答えた。

「遥はお前にここにいて欲しいからな。その為ならなんだってやるということさ。なんせそいつは自縛霊だ。自分は動けないから相手をひきとめる。これ以上ケガを増やしたくないなら今すぐここを出ていくべきだ！」

カリンはうなずいた。

「賛成よ！そうしましよ小暮くん」

小暮は遥をじっとみると

「ごめんよ。遥さん」

と謝った。

遥の表情は凄い形相に変わっていった。

「イヤよ…絶対イヤ！あなたは私とここにいるの！約束したじゃない。ずっと一緒にいてくれるって。聡君…逃がさない…逃がさないわ！でないとあなた、二度とここには戻って来ないでしょ？」 「ま…ずい！周りの浮遊霊もとりこんで、よりパワーアップしておるぞ！」  
小暮は化け物の姿となった遥の怨霊に飲み込まれそうになっている。  
「ど、どうすればいいの？弁ちゃん！」

弁天は毘沙門に叫んだ

「毘沙門！靈魂鎮めの曲じゃ。それしかあるまい」

毘沙門はグツと言葉につまり、返事はなかった。

「弁天、無駄だ。そんなヤツあてにするな！俺とお前、それに正吾でやろう！」

正吾は慌てた

「お、俺！？どうすればいいの？」

弁天は正吾の肩から跳びおりて雷電をかまえた。

「正吾！あの悪霊を鎮めるぞ。恵比寿の声に集中しろ！そして祈っ

てやれ、遥の魂が本来の優しさを取り戻すように。さすれば揚羽は応えてくれるはずじゃ。よいの？」

正吾は揚羽をかまえた。

「揚羽！頼むぞ。遥さんを助けてやってくれ」

恵比寿の声はまさに天使の歌声であった。どこまでも透明で切なくそして優しさに溢れていた。

雷電と揚羽の音は絡み合い、そして重なり見事なハーモニーを奏でた。

「見てください！遥さんから次々に浮遊霊たちが離れていきますわ」浮遊霊たちは次々に天に昇っていき、遥は元の姿に戻っていった。

小暮はうなだれる遥に声をかけた。

「遥さん…淋しかったんだね。でもここにはダメだよ。神様が待つてる、天にかえらなくちゃ。そして次の人生を生きるんだ！また生まれくるんだよ。だから怖がっちゃいけない。一つのことが終わるってことはまた何かが始まるってことなんだ。そうだろう？」遥の大きな瞳から涙が一筋落ちてきた。

「そうでした…私、間違っていましたね。天界に参ります。そして次の人生を生きる準備をしてきますわ」

小暮は嬉しそうに何度もうなずいた。

「遥さん、また逢おう！」

遥は清々しい顔で返事をした。

「ええ…ええ待っています！みなさんまた逢いましょう」

遥の体は一瞬白く輝き天に昇っていったのだった。

皆、その姿を眩しく見送った。

弁ちゃん絶対絶命の大ピンチ！（前書き）

とつとつクライマックスに突入です！明かされる春日の過去。  
お見逃しなく！

## 弁ちゃん絶対絶命の大ピンチ！

正吾は遥の霊が自分達の演奏によって浄化されていくのを見て、胸が熱くなるほどの感動をおぼえた。

「弁ちゃん…俺、鳥肌たってるよ。最高の気分だ！」

弁天は何も言わずニッコリと笑いかけた。

視線はすぐに毘沙門へと移っていく。

弁天の唇は何か言いたそうにしていたが、結局何も語らなかった。

その様子に見かねた恵比寿が、毘沙門に食ってかかった。

「おい！毘沙門。なんのつもりか知らないが小暮はもう俺達の仲間なんだ。もし、去年のような事があつたら俺は今度こそ赦さないからな！覚えておけよ」

毘沙門はそんな恵比寿を鼻で笑い。

「フフン、負け犬の遠吠えか…見苦しいぞ恵比寿！」

正吾はこれ以上事態をこじらせたくないだったので、早々と退散する事に決めた。

「小暮！とにかく無事でよかったな。俺達はこれで帰るよ。お前も早く退院しろよ！どうやらお前も霊媒体質みたいだな…学校で会おうぜ、恵比寿くんが言ったようにお前は俺たちの仲間だ。そうだろうっ？」

小暮は嬉しそうにうなずいた。

「ああ、そうだな。毘沙門が俺をプロ野球選手に育てるっていうんだ。俺には才能があるって！だから俺、やってみようと思う。小さい頃からの夢なんだ…俺もお前に負けないよう頑張る！」

「おお！世間のやつらをアツと言わせてやるうぜ。じゃあな！」

正吾達は病室の白いドアから出て行った。

弁天の顔に緊張が走る。

毘沙門がテレパシーで

「今晚、学校に来てくれ！話がある…」

と伝えてきた。

弁天はしずかにうなずき正吾と共に病室を後にしたのだった。

その晩、正吾はなかなか寝付けなかった。

毘沙門の過去がどうしても気になったのだ。

弁ちゃんは話したからない様子だし…明日、恵比寿君に聞きに行ってみよう。

寝返りをうつつ正吾の背中を見つめながら弁天はそうつと見つからぬように外に出た。

誰もいない学校はシンと静まりかえっており、なんの気配も感じられない。

「毘沙門…どこじゃ？」

弁天は中庭に出て空を見上げた。

「月が美しいの…今日は満月か」

「弁天…ここだったか」

毘沙門が飛んできて庭の銀杏の樹の枝に座った。

「毘沙門…お前はいつも突然現れるな。妾になんの用じゃ」

毘沙門は苦笑いを浮かべた。

「それが久しぶりに会った仲間に言う言葉かよ。冷たいヤツだな」

弁天は毘沙門を睨み付けた。

「お前がやったことに比べれば大したことではあるまいよ」

毘沙門はチツと舌打ちした。

「まあいいさ。ところで今日はお前に会わせたいヤツがいる。一緒に来い」

弁天はいぶかしげな顔で毘沙門を見た。

「お前のよく知ってるヤツだ。そう警戒するなよ」

弁天は何か引つ掛かるものを感じたが、ついて行くことにした。

「それで、そやつはどこにおるのじゃ？」

「すぐそこさ、ついて来いよ！」弁天は毘沙門の後からふわふわと飛んでいった。

「ここさ、入れよ」

弁天は戸惑った

「ほんにここなのか？」

薄暗闇の中でも弁天には何処なのか直ぐにわかった。

そこは正吾と何度も来たことがある保健室の前だった。

入り口を開けると、春日がいつものように椅子に座ってこちらを見ている。

「やあ、いらっしやい弁天様。遅くに呼び出して悪かったね」

弁天は振り返って毘沙門にたずねた。

「逢わせたいヤツとは春日のことか？」

「まあな、だけどそれだけじゃない」

春日は白衣のポケットから小さな2本の水晶を取り出した。

春日はその一本を宙に放りあげ呪文を唱えた。

するとその水晶はみるみるうちに大きくなり、まるで透明の棺桶のようになつた。

「弁天様、この中を見てごらん」

いつも優しげに見える細い目が今日は冷酷な光を放っている。

弁天は恐る恐る近寄るとへたへたとその場に座りこんだ。

「だ…大黒！」

春日は容赦なく、へたりこむ弁天に更なるクサビを打ちこもつていた。

「弁天様、ここにもう一つあります。きっとあなたが一番逢いたい人でしょう」

春日は残りの一つを放りあげた。

また棺桶が現れ、弁天はそれをみるなり両手で口元を覆った。それでもしなければ悲鳴をあげてしまうから…。

「び…毘沙門！どうして！？ではここに居るのは？」

春日は弁天の後ろに佇む毘沙門に

「お疲れさん」と声をかけ、フウツと息を吹きかけた。すると毘沙門の動きはピタツと止まり、ただの人形に戻った。

「春日！お前…一体何者じゃ！？」

春日は眼鏡を外し、弁天に近寄って行った。

「言ったはずですよ…陰陽師の末裔だとね」

弁天は叫んだ。

「神を捕まえてどうするつもりじゃ！？人間の分際で我ら神に楯突くつもりか！」

「神？…神とはなんですか？人間に幸福をもたらす存在？それとも苦しめるためにいるのかなあ？」

春日は遠い昔を懐かしむようにゆっくりと語り出した。

「僕ら一族はその昔、神との交信も許された名門の陰陽師でした。

春日兼継、この名を覚えていますか？」

弁天は首を横に振った。

「そうでしょうね…。あなた方は私を見捨てたんですから。私から全ての力を奪い去り安倍晴明などという軟弱者にその力を与えた！」  
弁天はすつくと立ち上がった。

「思いだしたぞ！お前は竜殺しの大罪を犯し、神を裏切った罪で処刑された。そうであろう！」

春日はクスリと笑った。

「ようやく思い出して貰えたようですね。そうですよ…。僕がその大罪人です！」

弁天は語気を荒くした。

「ならわかつていたはずじゃ！そうなる事を知っていながら何故竜を殺したのだ！」

春日は苦悶の表情で答えた。

「あの頃都は魑魅魍魎が跋扈しており、それを鎮めるためには僕の寿命では足りなくらいの歳月が必要だったのです！だから竜の血を飲んで永遠に生きようと思ったんだ。僕は間違っていない…間違つてなんかないんだ！」

春日の身体はブルブル震えだした。

「自惚れるな！！結局その後どうなったか…まさか忘れはしまい？」  
春日は助けようとした人間達に処刑された無念を思いだしその瞳からは血の涙が流れた。

「憐れなヤツ…。報われぬ思いを引きずり、こうしてまた罪を重ねてゆくのか。いい加減目を覚ませ！」

春日は流れ落ちる涙を拭いもせず弁天をギロリと睨んだ。

「いやだ！神の力を我がものとし、人間どもに復讐してやる！」  
弁天は深く息を吐いた。

「確かに今のお前は人の心を忘れた鬼そのものじゃ！だがな、お前は人間だったのじゃ。いくら霊力があるうがただの人間であったのにはかわりない…許してやれ。もとはといえばお前の傲った心が引き起こしたこと…自業自得じゃ！」

春日はかぶりを振った

「聞きたくない！聞きたくない！黙れだまれ〜！」

春日は水晶の柱をとりだし弁天に投げつけた。

水晶はあつというまに大きくなり、弁天をその中に封じ込めてしまった。

「フフフ…アツハハハハハハ！これは俺のものだ。誰にも渡さない。俺は神をも超える陰陽師になる…最強のな！」

正吾はそんな事になっているとは知らず、夢の世界でまどろんでいた。

## 弁ちゃん絶対絶命の大ピンチ！対決の時

「起きなさい！学校に遅刻するよ！」

正吾は眠い目を擦りながらムツクリと起き上がった。

「あれ？母ちゃん…」正吾は弁天がいつも眠っている皿をのぞいたが姿が見えない。

正吾はキヨロキヨロ辺りを見渡したが影も形も無かった。

「弁ちゃんどこに行ったのかな？こりんちゃん起きてよ！」

正吾は足元ですっかり九尾の姿に戻り丸くなっていたこりんを叩き起こした。

「弁ちゃんがいないんだ。何処に行ったか知らない？」

こりんは伸びをして人間の姿に変化した。

「アゝよく寝た！さあ？気付きませんでしたけど…お散歩にでも行ってるんじゃないですか？」

「弁ちゃんが俺を置いてどこかに行くなんて初めての事だよ…なんだか心配だな」

こりんは大きなあくびをして

「正吾さまったら！心配し過ぎですわよ。もしかしたら毘沙門さんのところでは？久しぶりの再会ですもの。きっとそうに違いありません」

「そうかなあ？だったら言ってくればいいのにさ。とにかく学校へ急ごう！今日から小暮も登校するはずだから」

まだボウツとしているこりんを急かして、正吾は学校に向かった。

正吾はまっすぐ隣のクラスに行くと、小暮を呼び出した。

「おはよう小暮、毘沙門くん。なあ、弁ちゃんそっちに行かなかった？」

小暮は毘沙門の顔を見たが毘沙門は首を横に振った。「いいや、来

なかったぜ。どうした居ないのか？」

正吾はみるみる青ざめた。

「ああ、そうなんだ。朝起きたらもぬけの殻でさ…もしかしたら君達のところかと思っただけだ」

毘沙門は涼しい顔で

「全く、お前は弁天がいないとまるで赤ん坊だな！そんなお前に嫌気がさしたんじゃないのか？」

と呆れた顔で言い捨てた。

こりんは真つ赤な顔で怒りだした。

「ひどい！あんまりですわ！弁天様はあんたなんかと違って真剣に正吾様と向き合っていていらっしやいます。それを…あんな言い方、許しませんわ！」

毘沙門はフフンと鼻で笑い

「ほう…許さないか？じゃあどうする、お前ごときに何ができるんだ」

こりんはツカツカと毘沙門に歩み寄ると

「こうしてやりますわ！」と叫び、手をふりあげてバシッ！と毘沙門の頬を打った。

その途端、毘沙門はピタリと動きが止まりその瞳は何も映さなくなつた。

正吾は驚いて毘沙門を揺すぶった。

「どうしたんだ！毘沙門くんしっかりしろ！」

毘沙門の体はシュルシュルと小さくなり、ただの人形となってパタリと床に落ちた。

「キヤア！これはどういう事なの？」

こりんは小暮にたずねた。

小暮はガツクリと膝をつき、首元を苦し気にかきむしった。

「ウ…ウガアッ！」

小暮の首元が緑色に光り、何かアザのようなものがシュウツと消え失せたかとおもつと、ドツと前のめりに倒れてしまった。

「どうしたの!？」

教室の中から異様な気配を感じた美香がとびだしてきた。

「み、美香ちゃん! 毘沙門は偽物だったのよ」

倒れた小暮の横には人形が転がっていた。

まずいわ!

一体どうしてバレたの?

美香は心の動揺を気どられぬよう言葉を選んだ。

「と、とにかく今は小暮くんを助けなくちゃ! 保健室に運びましょう。話はそれからよ」

正吾は小暮をおぶって廊下を走った。

「春日先生! 小暮が倒れたんです。診てやってください」

正吾はベッドに小暮をおろした。

「一体どうしたんだ!？」

春日は美香の方に視線を走らせるとギョツとした表情を浮かべた。

美香があの人形を抱いて蒼白い顔で立っていたのだ。

呪がとけたのか?

一体なぜ!

春日は混乱したがすぐに冷静さをとり戻し正吾達と向き合った。

「何があつたか話してみて」

こりんがぶすくれた顔で言った。

「私、毘沙門をぶつたんです! だって正吾様にひどいこと言ったから。そしたらなんだかこんな人形になっちゃって…」

春日は目を丸くした。

「神様をぶつたつて!？アハ… アツハハハ。まさかそんなことするヤツがいたとはな! 俺の計算が甘かったか」

正吾が叫んだ。

「それはどういう事ですか!？」

春日はニヤリと笑って美香に言った。

「土蜘蛛、ご苦労だったな。弁天はすでに我々の手におちた！こいつらに教えてやれ。俺達の正体をな……」

美香はうなずいた。

「美香ちゃん！…ど、どうして？」

美香は哀しげな目で語りだした。

「この方は春日兼継様とってかつて強大な力を神からさずかりし偉大な陰陽師。私はその使い魔です」

正吾は愕然とした。

一番信頼していた先生に裏切られたのだ。

「先生！弁ちゃんをどうするつもりです」

春日はフツと笑みをもらすと

「俺は神なんて大嫌いだね、だがその力は利用価値がある。持っていても損はないだろう？ほら、見せてあげるよ。僕のコレクションをね！」

春日は水晶の柱を3本とも放り投げた。

「べ、弁ちゃん！それに毘沙門くん！それから…ん？誰？」

こりんが答えた

「大黒天様ですわ！」

「えっ？じゃあ七福神のうち、もう3人も捕まっちゃったのかよ！まったくもう！何やってるんだ」

正吾は呆れたがそんな事を言っている場合ではないのだと気を持ち直し、どうしたら助けられるか頭を巡らせた。

その時ハツとあの露店商の親父の言葉を思いだした。

「いいかい…この紙に願い事を一つだけ書くんだ。そうすればその願い事は必ず叶う！」

オヤジ…あの言葉信じていいのか？

正吾はポケットの中を確かめた。

大入り袋と書かれたポチ袋が確かにある。  
まさかこんなに早くこれを使う日はな…。

正吾がそんな事を考えているとは知らないこりんは早くも九尾の姿に  
戻り、戦闘態勢を整えた。

九尾の白い体の周りを蒼白い炎が燃え盛っている。

正吾様：いままで優しくして下さいありがとうございます。  
こりんは…こりんは幸せでしたわ。

正吾様は私が命に代えてもお守りいたします！

九尾は蒼白い火の玉となって春日に向かって飛び込んでいった。

## 弁ちゃん絶対絶命の大ピンチ！最後の切り札

九尾は敵を捕らえ、その狐火の炎は更に勢いを増した。

「ギヤアアア〜！」

物凄い断末魔の叫びが闇を切り裂いた。

「つ、土蜘蛛！」

狐火で焼かれたのは春日でなく美香であった。

「ど…どうしてなの、美香！」

九尾はこりんの姿に戻り、春日をかばって焼け焦げた美香の体を抱き起こした。

「ウ…アアツ…」

正吾は二人に駆け寄りポケットから大入り袋を取り出した。

「なんであんなヤツ庇ったりしたんだ！美香ちゃんしつかりしろ！今、俺がこのお札で助けてやる。だから頑張るんだ！」

正吾はお札にポケットに差してあるペンでサラサラと願い事を書いた。

「土蜘蛛の怪我を治してください…よし！書いたぞ」

正吾は自分の目を疑った。

札には

「その願い事は受付出来ません」と赤文字が浮かびあがってきたのだ。

「ク、クソ〜！なんでだよ！？」

美香はこりんの手をギュツと握りしめた。「こりんちゃん…私じゃダメだったわ。あの人の魂を救えるのは有明先生しかない」

美香は一筋涙を流し、そのまま息絶えた。

「美香ちゃん！美香ちゃん死んじゃだよ〜！うつつ…あああん」

正吾は泣き崩れるこりに言った。

「九ちゃん！有明先生を呼んできてくれ。美香ちゃんの死を無駄にするな」

こりんはその言葉で我にかえり、有明を呼ぼうとドアを開けると、なんとそこには有明が厳しい顔で立っていた。

「あ、有明先生！」

有明の後ろには佐久間右近も控えていた。

「春日先生…いいえ、あなたは私の知ってる春日静馬ではないわね！その体、返してちょうだい」

正吾は右近に話しかけた。

「右近さん…助けにきてくれたんですね！」右近はうなずいた。

「有明優子を幸せに出来るのは春日静馬だけです。ヤツは私が倒します！」

右近はスラリと刀を抜いた。

その靈力で形作られた刀を有明は右近からもぎとった。

「優子！お前じゃ無理だ」

有明は首を横に振った。

「いいえ…あの化け物は私じゃないと倒せない…いいえ、違うわね。私と静馬さんでなくては倒せないわ！」

兼継も妖術で刀を出し、スラリと鞘から刃を抜いた。

「面白い！かかってくるがいい。相手をしてやる」

有明は刀を振り上げ

「やあゝ！」と叫び声をあげ斬りかかっていった。

カシューーン！と乾いた音がして2つの刃がギリギリと交わった。「

先生は命懸けで春日先生の魂を呼び戻すつもりだ…俺も命懸けで弁ちゃん達を助けなくちゃ！右近さん、有明先生を頼みます」

正吾はそういうと駆け出していった。

春日はまるで小動物をいたぶる猛獣のように有明を追い詰めていく。

「ウツ…ウウツ静馬さん！静馬さ〜ん！…！しっかりしてよ。負けないで。私を幸せにするって約束したじゃないの。あれは嘘だったの

?!…アアツ…クツ…兼継の霊に負けないでー!!」その時、有明の刀から明るい光がほとばしり、兼継は目が眩んだ。  
「見、見えない!アアツ静馬め!クウツ止めるー!!」

有明は兼継をバツサリと袈裟懸けに切りつけた。

「ギヤアア〜!し、静馬め。やりおつたな!」

兼継はドサツと前のめりに倒れた。

有明はハアハアと荒く息を吐きながら、倒れた春日に近づいた。

春日の眼鏡はヒビが入り、額からは血が出ていた。

そつと抱きおこし、その頭を抱きしめた。

「静馬さん!静馬さん!」

有明は泣きながら何度も春日を呼び続けた。

「ウツ…優子?」

目を覚ました春日の目は元の優しい糸目に戻っていた。

「し、静馬さん?静馬さんなのね!」

春日は泣きじやくる有明の涙を拭きながら

「どうしたの?何かあったのかい?」とおっとり話しかけている。

兼継であった時の記憶は無くしているようであった。

そして目の前に立ち並ぶ3つの棺桶にギョツとした表情を浮かべた。

「これは一体?」

かりんは春日に詰め寄った。

「先生、覚えてないんですか?先生が兼継に憑依されていた時に神様達を封印してしまったことを」

春日は記憶を手繰って見たが

「すまない。覚えてないんだ。それが本当なら、今の僕にそんな力はない。だから封印を解くことも出来ないんだよ」と謝った。

こりんはガツクリと膝をついた。

「そ…そんな…」

その時、入り口の戸がガラリと開いた。

「春日先生！元に戻ったんですね。よかった：有明先生ならきつとやるだろうと思つてました！」

「正吾様だったら！どこに行つてたんですか？突然走り去つてしまふんですもの、心配しましたわ」

正吾は揚羽を構えて弦を弾いた。

「俺に出来ることと言えばこれだけだからね」

正吾はもう一度ポケットの中を探つた。

「でもその前にもう一度だけ確かめたいことがあるんだ」

正吾は大入り袋からお札をとりだした。

先ほどの赤文字はすっかり消えてなくなっていた。

「それはなんですか？」

こりんは不思議そうにその紙を眺めた。

「これはね、弁ちゃんの入つた福袋を買つた時にオマケでもらつた大入り袋さ。その中に入つていたのが、この何でも一つだけ願い事が叶う夢のお札つてわけ」

こりんは正直に言つた。

「私にはただの紙切れに見えますけど…」

正吾は哀しげに笑つた。

「うん。そうかも？天照のじつちゃんに騙されたかな…。さつき美香ちゃんを助けようとお札にそう書いてお願いしたけど却下されちゃつた」

こりんも哀しげに顔を歪ませた。

「美香ちゃん：私のせいで死んじゃつた」

正吾はこりんの肩を抱き

「仕方ないよ。どうしようもなかった。今はまだ救えるかもしれない弁ちゃん達の事を考えなくちゃ！」

と励ました。

「でも：そのお札。天照大御神様が嘘をつくとは思えませんわ。もう一度だけ使つてみては頂けませんか？」

正吾はうなずいた。

「うん！もう一度やってみよう」

正吾はお札に

「弁ちゃん達の封印を解いて下さい」と書いた。  
するとまた赤い文字が現れた。

「その願い事は受け付け出来ません」

「やっぱりダメだ……」

正吾はそのお札を呆然と見つめた。

## 弁ちゃん絶対絶命の大ピンチ！ハッピーエンド

正吾はそのお札をポケットにしまうと、揚羽を構えた。

「やっぱり自力で救えってことかな…天照のじっちゃん。そういうことだろ？」

みんなが見守る中、正吾は絶対封印を解いてやる！とのかたい意志をもって弦をつま弾き始めた。

揚羽は正吾の心に反応している烈しい指の動きに見事に応えていた。

「春日さん…どう思う？町田君、変わったわよね。あの軟弱で引っ込み思案だった彼が、今はとても頼もしく感じるわ」

春日はうなずいた。

「今までの彼は常に弁天様に守られている立場だったけど、今は彼女を救う立場だからね。男は守るべき人を守るようではなければ一人前の男とはいえないよ。町田…頑張れよ！弁天様を救えるのはお前しかない！」

正吾の必死の演奏にこりんは心打たれていた。

「正吾様！指から血が…」

正吾の指先は皮が擦りむけて血がにじみ出していた。

「も…もう止めて下さい！正吾様、正吾様ったら！」

こりんは見ていられず正吾を揺すぶったが、正吾はまるで何かにとり憑かれたようにギターをかき鳴らした。

すると、天空に暗雲がたち込め雷が轟いた。

稲妻が走りピカッと光が弾けると、雲の間から巨大な竜が現れた。

竜はスルスルと小さくなり、弁天達が封じ込められた水晶の棺に巻き付くと春日に向かい

「出でよ！春日兼継」と呼びかけた。

すると、春日の背後に陰陽師の衣装をまとった兼継の霊が現れたのだった。「俺を眠りから覚ましたのは誰だ！」

兼継の霊はそう叫び竜を見て怯んだ様子を見せている。

「兼継よ。よく聞け、ワシはお前に殺されたが恨んではおらん。ワシはあの時、逃げようと思えばいくらでもそうできたのだ。だが…あえてお前に殺されたのじゃ。お前に命をやり、京に巢食う怨霊どもの成敗がなしえればそれでよいと思っただからじゃ。それなのにバカな人間どもはお前の気持ちもわからずお前を殺した。無念というならワシも同じじゃ！許してやれ…ワシはこの少年の必死の願いを叶えにきたのだ。この少年の願いは兼継…お前の魂が救われることだ。さあ…ワシと共に天界にゆこう、天照様がお待ちじゃ」

兼継はうなずいた。

「やつと…やつとわかってもらえた。もう思い残す事もない。少年よ赦せ！神々よ…どうかこの愚か者を赦してください」

兼継が呪文を唱えると棺の蓋が明いた。

竜は兼継を背に乗せると、天空に昇っていった。

正吾は弁天に駆け寄った。

棺から弁天を出すと、棺は元の水晶の柱に戻った。

「弁ちゃん！しっかりして！目を覚ましてよ」

正吾が弁天に呼びかけると、弁天はゆつくりとまぶたを開いた。

「ん…ここは？正吾…すまん。妾は、妾はな…」

正吾は涙を流し弁天を抱き締めた。

「いいんだ…いいんだよ弁ちゃん。もう大丈夫だ！もう大丈夫…」

毘沙門、大黒も次々目を覚ました。

「弁天？弁天じゃないか…」

「毘沙門！毘沙門！」

弁天は毘沙門に抱きついた。

毘沙門天は何がなんだかわからない顔で、泣きじゃくる弁天の頭を撫で続けている。

「こりゃ二人とも！オイラの存在忘れてない？」

大黒が太った腹を揺すりながら二人の前に現れた。

「大ちゃん！久しぶりじゃなあ。会いたかったぞい」

弁天がそういうと、大黒は不貞腐れた顔で

「まったく毘沙門の時とえらく態度が違っじゃないか！」とブー  
ブー言いはじめた。

「とにかくみんな助かって良かったよ。美香ちゃんだけは助けられ  
なかったけど… 弁ちゃん！聞きたいことがあるんだ。実は美香ち  
やんを助けようと例のお札に願い事を書いたんだけどダメだったん  
だ。どうしてかな？」

弁天はそれを聞き、ギクツとして気まずそうに苦笑いした。

「弁天：お前何やったんだ？」

毘沙門が弁天にたずねた。

「どれどれ、そのお札オイラにも見せてよ」大黒が丸々太った手を  
差し出した。

正吾はポケットから大入り袋をとりだし、中からお札を引っ張りだ  
した。

大黒はお札を見るなりアアツと声をあげ、毘沙門にも見せた。

「どうしたの？ねえ、教えてよ！」

正吾が言うのと毘沙門が弁天の方を向いた。

「ちゃんと自分で説明しろよ」

弁天は両手を合わせ

「すまん！正吾、実は妾が先にお札に願い事を書いておいたのじゃ」

正吾は思ってもいない答えに驚いた。

「ええっ！？ちよつとそのお札、俺にも見せてよ」

正吾はお札を両面ともみたが、特に何も見えなかった。

「うーん、どこに書いてあるのさ。わかんないよ」

弁天は仕方なさそうにお札の角の方を指差した。

「ここじゃ、ここ！」正吾は目を凝らしてじつとみた。

小さく何か書いてあったが如何せん小さ過ぎて解読不能だ。

「なんて書いたの？小さすぎて読めないよ！」

「それはナ・イ・シヨ！」弁天はニカツと笑って答えた。

「なんだよー！勝手に書いたりして。でもなんでそんな事したの？」

弁天はフウとため息をついて

「正吾の性格からしてこのお札を自分の為に使わんのじゃないかと思つてな。案の定そのつもりだったようじゃが：先手を打つておいで正解じゃ！」弁天は最後のところは小さく呟いた。

「え？なんだつて？」弁天は

「なんでもない！だがな妾はどうしてもこのお札は自分の為に使つて欲しかった！それだけじゃ」と言った。

正吾はやれやれと思いつながら弁天の自分への思いに深く感謝した。

「このこと、恵比寿くんにも報告しなくちゃね！きつとびっくりするよ」

弁天はうなずいた

「そうじゃの。これからが大変じゃ！色々と後始末が残つておるわい」

いつの間にか空は青く晴れ渡り、午後の優しい風がみんなの頬を撫でていった。

## 弁ちゃん旅立ちへの序章！

正吾は倒れている小暮の頬を軽く叩いて声をかけた。

「小暮、小暮、目を覚ませ！」

「う…ここは保健室か？俺、一体どうしちゃったんだ。なんだか長い夢をみていた感じた…」

正吾は毘沙門を呼んだ。

「毘沙門くん、彼は小暮聡とって君が囚われている間、偽物の毘沙門がサポートしてたんだ。君は一体いつから兼継に捕まっていたの？」

「今は一体何年なんだい？」

毘沙門は正吾にたずねた。

「今は2009年だよ。」毘沙門はガツクリと肩を落とした。

「じゃあ3年も封印されてたのか…その間になにがあったか不安だよ」

正吾の連絡を受け、駆けつけた恵比寿は弁天とその話を聞き、顔を見合わせた。

「毘沙門…じゃあ俺達は偽物の毘沙門をずっと見てたって訳だ」

恵比寿は複雑な表情を見せた。

「どうやらそのようだね」

正吾は小暮にこれまでの事を話して聞かせた。

小暮は薄く笑って

「アハハ…そうかあ。そうだよな！俺なんかがプロ野球選手なんて…笑っちゃうよ。ホントにさ」

そう話す小暮の顔はとても寂しげに見えた。毘沙門は小暮の肩に座り「うん…なかなか座り心地がいいな。君、だいぶ鍛えてるね。大丈夫！俺がしっかりサポートするよ。プロになれるかどうかは君の努力次第だけだね！どうやら兼継はなかなか見る目はあったらしいな

…どうだい？その気はあるかい？」

小暮の表情はパツと晴れ渡り、嬉しくてたまらないといった様子でなんともうなずいた。

「嬉しいよ！俺、どんなキツイ練習でも耐えてみせる！よろしくお願ひします」

「ああ！こちらこそよろしく」

そんな二人の様子を弁天は優しい目で見つめていた。

恵比寿は毘沙門に近付き

「毘沙門…俺てつきりお前がイヤな奴になっちゃったと思って幻滅してた。お前の事信じてれば騙されるはずなかったんだ…悪かったな。ごめん！」

毘沙門は恵比寿の肩を叩き

「いいよ！気にするな。」

と言つて微笑んだ。

大黒は

「ところで僕の身代わりは？いないの？なんでよ〜！」

となぜか不服そうにしている。

こりんは無情にも

「そんなの弁天様を誘き寄せるには役不足だったからじゃありませんか」

と正直に言つてのけた。

「九尾ちゃんは今変わらさずキツイね〜」

と大黒は顔をしかめ、みんなで大爆笑した。

恵比寿は何か思い出した様子で

「あつ！そつだ。正吾、カリンからの言伝てだ。明日、ビックリする事があるつて言つてたぞ。」

正吾はもうこりこりといった顔で

「え〜っ！今度はなんだろう？なんだか嫌な予感がするけど…カリ

ンさん、他に何か言ってなかった？」

と恵比寿にたずねた。

「明日になってのお楽しみ、だつてさ！」

そして次の日：

学校から帰った正吾は家の前に、ところ狭しと駐車されている黒いリムジンを見て驚いた。

近所の人も出てきて、何かと様子を伺っている。

「うちにお客様みたいだけど…こんな車乗ってる知り合いはいないはずだよ。誰だろう？」

弁天は首を捻つてこりんを見た。

「もしかしたら…カリンさんが言った驚く事つてこれじゃありません？」

正吾はうなずいた。

「そつらしいね、とにかく家に入ろう！」

正吾は家のドアを開けて大きな声でただいま〜と声をかけた。すると、居間の戸が開いて母のユカリが慌てた様子で出てきた。

「正吾！待つてたよ。お前にお客さん！一体誰だと思つ？なんと、スターダストプロダクションの社長さんだよ！」

正吾の胸は高鳴った。

「えっ！？松下さんが来てるの？」

ユカリはホツとした様子で

「やっぱりお前、あの人と知り合いなのかい？私はてつきり人違いかと思つたよ」

正吾は苦笑いして

「うん…まあね。でもなんの用かな？」とユカリに聞いた。

ユカリはお手上げポーズで

「さあねえ。お前が帰ってから話すつて言つてたからね。さつきからお待ちかねだよ。とりあえずその話とやらを聞こうじゃないか」

ユカリは正吾を居間に入れた。

「どうも…お久しぶりです。あの、今日は一体？」

「久しぶりだね。ん？ちょっと見ないうちにだいぶ印象が変わったね…ずいぶん男っぷりが上がったよ。まあこの年頃の男の子が一番変わる時期だからね。さあ、ここからが本題だよ。お母さんも一緒に話を聞いてください。正吾君の将来についてお話しがあります」  
少し離れて座っていたユカリも、その声をかけられ正吾の隣に座った。

「お母さん、私が正吾君を最初に見かけたのは骨董市場でした。その日は祭りの日ということもあって沢山の人で賑わっていましたが、特に黒山の人ばかりになっていて一角がありまして、私は何事かと人混みをかき分け中に入っていました。」

すると、女子高生と正吾君のバンドの演奏でした。  
私はこういう職業柄、沢山の音楽を聴いています、正吾君の演奏には荒削りですが人の心を一瞬にして掴んでしまう不思議な魅力があるのです。

はつきり言って、上手い子は他にも沢山います。  
でもなかなか魂に訴えかけてくる音楽にはそうそう出会えません。  
デモテープ聴きましたがはつきり言って、今のままでは通用しないでしょう。

才能はあっても音楽の基礎が無くては砂上の楼閣です。  
世界に出るにはもつと感性を研かないと！

どうですか？彼を海外に留学させては？」

ユカリは思ってもみない話しに目を白黒させた。

「正吾がバンドですって？海外に留学！」

「ええ、そうです。もちろん学費はうちで援助します。ただし、うちのレコード会社からデビューしてもらいたいです。」  
どうでしょう？」

ユカリが面食らっていると、隣の襖がスラリと開いて姉の和美が顔を出した。

「お母さん、いい話しじゃない？応援してあげようよ！」

「応援するも何も…あんたがバンド組んでたなんてお母さん初耳だよ。和美は知ってたのかい？」

和美はうなずいた。

「うん、まあね。テレビで見かけたんだ」

和美は思わず声をあげた。

「テ、テレビでみたあ？」

松下はクスリと笑い

「お母さん、大丈夫ですよ。それはたまたまですから。私が通りかかったのもその時です」ユカリはホツと胸を撫でおろし、正吾の顔をじっと見た。

「正吾、お前はどのなの？やってみる気はあるのかい？海外なんて…あんた家族と離れて独りでやっていける自信はあるの？」

正吾はユカリの目をまっすぐ見つめ

「覚悟は出来てるよ！このチャンス掴みたいと思う。母さん、俺を行かせてくれ頼む！」

ユカリはフウとため息をもらした。

「あのひ弱でパイパイ泣いてばかりいた子がねえ…」

ユカリは思わず涙ぐんだ。

「分かりました松下さん。そちら様の心使いありがとうございます。父親とも相談しまして改めてお返事させて頂いてよろしいでしょうか？」

「もちろんですよ！ただし、もちろん留学するには実技試験を通らなければなりません。

もし、そうなればこれから厳しい特訓が待っています。正吾君いい返事を待っていますよ。

それでは、私どもはこれで失礼いたします」

松下はリムジンカーに乗り込み、町田家を後にした。

その晩、町田家では緊急家族会議が開かれた。父親の健一はその話を聞き厳しい表情をみせた。

「正吾、本当にいいのか？音楽家なんて一握りの選ばれた天才しか出来ない職業だと思っただが…」

正吾は決然とした態度で

「うん、俺もそう思う。だから俺その一握りの人間になってみせるよ！」

健一は目を見開いた。

正吾…お前…

「わかったよ。やってみろ！」

健一は慈しみに満ちた目を正吾に注ぎ

「忘れるな。俺たち家族は何かあってもお前の味方だ！俺たちはチームだからな。だから安心して行って来い！」

正吾は思わず目を潤ませたが、ぐっとその涙をのみ込み

「ありがとう」と礼を言った。

弁天は正吾の肩の上でその情景を見ていた。

「みんな、心配するでない！後はこの弁天がしかと引き受けた。きつと立派な音楽家に育ててみせるでの！」

弁ちゃん新しい世界へ！フィナーレ（前書き）

最後までお付き合いくださりありがとうございました。

おかげさまをもちまして無事完結できました。この作品は沢山の方々に応援を頂きまして感謝でいっぱいです。次の作品（仮作品名）寿命買い取り致しますの連載準備中です。どうぞまたよろしくお願ひ致します。

## 弁ちゃん新しい世界へ！フィナーレ

季節はもう春、教室は受験ムード一色で生徒達はみなピリピリとした緊張の中、己との戦いに日々明け暮れている。

生徒達は早速朝から教科書や参考書を広げ、各自勉強に勤しんでいた。

篠原はキヨロキヨロと教室を見渡した。

「町田：今日も音楽室か。アイツ大丈夫なのか？もう受験まであまり時間ないのにさ」

篠原の肩で貧乏神はフツと笑みをもらした。

「町田君の事より自分の心配しないと！奨学生ならなおのことですよっ？」

篠原はハツとした顔でまた参考書にむかいだした。

そして、もうひとり正吾の姿を探す佐山チカは、てっきり正吾が隣の進学校を志望していると勘違いして今日も正吾と共に通学する自分の姿をイメージしながら問題集に取り組んでいる。

「正吾君：私、卒業式の日にあなたに告白するって決めた！同じ高校に一緒に通いましょうね。ヨッシやるぞ！」

当の正吾はといえば、アメリカのセントジョセフィン音楽院を受験するため、空いている時間は音楽室に行き、弁天と有明の特訓を受け放課後は松下が紹介してくれた有名なギタリストに指導してもらう毎日だ。

「町田君、ずいぶん頑張ったわね！あとは英語が問題だわ」

有明が嘆いたが正吾は全然気にしていない様子で

「先生、大丈夫ですよ！ジェスチャーで乗りきりますから。実際、俺のジェスチャーは分かり易いってジャクリーン先生が言ってますもん」

正吾は、有明をどついて

「それより、婚約おめでとーございます！」

有明はポツと顔を赤らめた。

「ありがとう！結婚式には来てくれる？」

正吾は笑顔でうなずいた。

「6月ですよね？きつと行きますから！だって俺は二人の結びの神ですからね。それにしても右近さん、やっどホツと出来ますね」

正吾がそういうと有明は感慨深げに遠くを見つめた。「ええ…右近さんが認めた春日先生ですものね。幸せよ…私」

すると、有明の守護霊佐々木がヒョイと顔を出し

「おい！俺の意見はどうなんだ？右近ばっかりおいしいところ持っ  
ていきやがって。俺がどれだけこいつの為に戦ってるか言っ  
てくれよ！」

と訴えた。

正吾は苦笑いして

「先生、佐々木さんも頑張ってますよ。変な悪霊にまたとり憑かれないようにしつかりとボディーガードしてくれてますから安心して  
ください。と…本人がそう言ってます」

有明はアハハと笑い

「ごめんね佐々木さん！頼りにしてるわよ。これからも頼むわね」  
と見えない佐々木に礼を言った。

有明は正吾に向き直り

「とーとー来週実技試験ね。自信の程はどう？」

「最善は尽くしました。俺、なんでいつもあがっちゃうのか考えた

んです」

「それで、解ったの？」

「ハイ！」

「俺があがってしまうのは結局自信がないからなんですよ。それは自分がした努力が足りないからなんです。今回俺は自分がやってきた努力に納得しています。ですから自信を持って本番に挑めますよ。有明はうなずいて

「その言葉を聞いて安心したわ。体に気をつけて行ってらっしゃい」

「ハイ！ありがとうございます」

学校から帰るとユカリが正吾にエメールを渡した。

正吾は高鳴る胸を抑え、文面を見たが全然読めなかった。

「こりゃあダメだ！辞書ひかないと…」

ユカリは文面に目を通したがお手上げポーズだ。

「そろそろ父さんが帰ってくるから読んでもらいなさい」

正吾の父親は海外赴任の経験もあり、ある程度の英文は読みこなせる。

「ただいま」

ちょうどよいタイミングで健一が玄関から入ってきた。

正吾はとびだして行って健一に手紙を渡した。「父さん、これ読んで！セントジョセフィンからだ」

健一は廊下を歩きながら

「おいおい、これしき読めないでどうする。これからあつちで暮らすっていうのに…なになに…試験日の案内だなこりゃあ。お前、卒業式いつだっけ？」

「3月10日だよ」

「あゝ試験日と重なっちゃったなあ」

「ええっ！それホントかよ」

正吾はがつくりと肩を落とした。

沈んだ表情の正吾に弁天は声をかけた。

「残念だったのう」

「フウ…仕方ないさ。明日、担任に話すよ」

「ウム…寂しくなるのう。じゃが世界にはお主と同じように神がかりの人間は何人もおる、妾もこれからは外国の神々と張り合わねばならぬな。フツフツ楽しみじゃわい！」

正吾はエツと驚いた。

「何を驚いておる？音楽の神は妾だけではないぞよ。だからボヤボヤしてはおられんのじゃ！うゝん楽しみじゃのう。な？そう思わんか？」

正吾はウキウキと心が浮き立ってくるのを感じた。「ああ！世界に挑戦だ。どんなライバルがいるか楽しみだよ」

そして次の日、教室に入って来た担任は正吾に前に出るよう言った。

「みんな、残念なお知らせがある。実は町田が卒業式に出られない事になった」

教室はザワザワとざわめいている。

「えゝっどうして？親の転勤とか？」

女子の一人が声をあげた。

「みんな静かに！実は町田はアメリカの高校を受験することになってな。ちようど卒業式が試験日なんだ。町田、自分で話すか？」

「はい、そうさせてください」

「実は俺、アメリカのセントジョセフィン音楽院を受験する事になりました。俺がギターやってることは既にみんな知ってると思うけど、俺プロになろうと思う。受かるかわからないけど挑戦してみようと思います。みんな：ありがとうございました。とても楽しかったよ。お互い夢に向かって頑張ろうぜ！」

みんなの拍手を受け、正吾は改めて絶対合格するぞと決意を新たにしました。

そして放課後…

音楽室でいつものようにギターを弾いていると、音楽室のドアがそつと開いて佐山チカが入ってきた。

「町田君：ちよつといい？」

「佐山？どうした？」

「うん：町田君、アメリカに行っちゃうんだね。驚いたよ」

正吾は揚羽をおろした。

「ああ：驚かせてごめんな」

チカは首を横にふって

「ずっとアメリカで暮らすの？」とたずねた。

「もし受ければ何年かは向こうだけど、学校が終われば日本に戻るよ」

チカはホツとした表情を浮かべた。

「そっか：実はね。私、駅前の広場で町田君の演奏聴いてからずっと追っかけてやってたんだよ。知らなかったでしょう？」

「ええっ！マジで？は、恥ずかしいなあ。でも凄くうれしいよ。じゃあ佐山は俺のファン第1号だな」

チ力は泣き笑いの表情で

「そうよ！私が一番。九条さんより私の方がずっと町田君を見てた」

「え？今なんて…？」

「ううん。なんでもない！頑張ってるね町田君、あの…たまにメールしても…いいかな？」正吾はニツコリ笑った。

「もちろん！ずっと友達でいてくれよ佐山」

チ力は寂しそうにうなずき、音楽室を出て行った。

隣の音楽準備室にいたこりんはブスツとした顔で音楽室に入ってしまった。

「なあにあれ！私が一番よ！だって。正吾様ったら何でこりんが一番だって言ってくれなかつたんですか？」

正吾は揚羽を持って音を鳴らしながら

「だってそれが女の子への礼儀だろ？」

と涼しい顔で言うではないか。

「まあ！なんてイケズ」

「だったらそんなところで隠れてないで出てくればよかったのに」

こりんはフフンと鼻を鳴らし

「それは女の子同士の礼儀ってもんです！」と言って

「ね？弁天様」と目で合図した。

「今はそれどころではない！こりんは邪魔じゃ。先に帰っておれ」  
こりんは

「ハ～イ」と返事をしてチラチラ正吾を見ながら帰っていった。

「ラストスパートじゃ！気合いを入れていくぞい」

「おお！やってやるぜ！」

練習は毎日暗くなるまで行われた。

そして春…

卒業証書を片手に篠原は青く澄みわたる空を眺めた。

「町田！しっかりな…頑張れよ」

貧乏神もつばやいた。

「早く立派になって帰ってきてくださいね。そしていっぱい稼いでくださいまし」ニンマリ。

そしてこりんは…

カリンと恵比寿のもとで暮らしていた。

「だ・か・ら！なんでそこで売りなんだ！タイミング間違っなよ」  
恵比寿の教育も更に熱が上がっている。

「弁天には負けられないぜ！ほらカリン、そうじゃないだろ」

「あ〜ん！正吾君助けて〜！」

こりんはそんな二人の様子を眺めながらアメリカの正吾に想いを馳せた。

毘沙門は…

小暮を無事に野球の名門高校に合格させ、共に寮生活を始めた。

「弁天…年末にまた会おうぜ！」

そして正吾は…

飛行機が飛び立ち、小さくなってゆく街並みを眺めながらこれから挑戦する世界に旅立っていった。

「弁ちゃん。そろそろ教えてよ。あのお札にはなんて書いてあったのさ？」

弁天は笑って

「ひ・み・つじゃ！」とニッコリ笑った。

**弁ちゃん新しい世界へ！フィナーレ（後書き）**

お気に召されたかたはアルファポリスドリームブッククラブに投票  
ください。現在出版にむけ活動しております。

出版されましたらシリーズ化させていただきます。

[http://www.alphapolise.co.jp/  
dream.php?ebook\\_id=1042391](http://www.alphapolise.co.jp/dream.php?ebook_id=1042391)

こちらから投票できます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0326g/>

---

福袋買いませんか？

2010年10月9日12時37分発行